

801.1-G72ウ



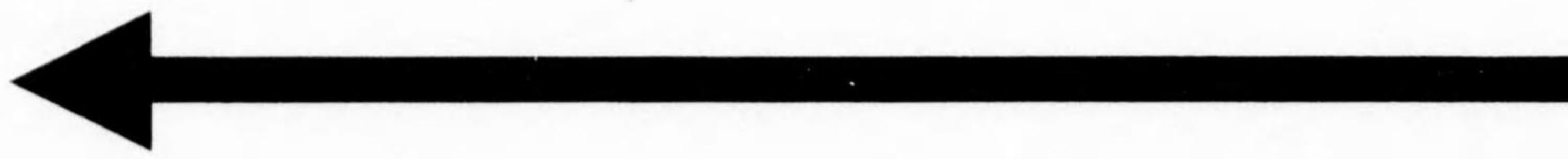
1200500753095



801.1  
72



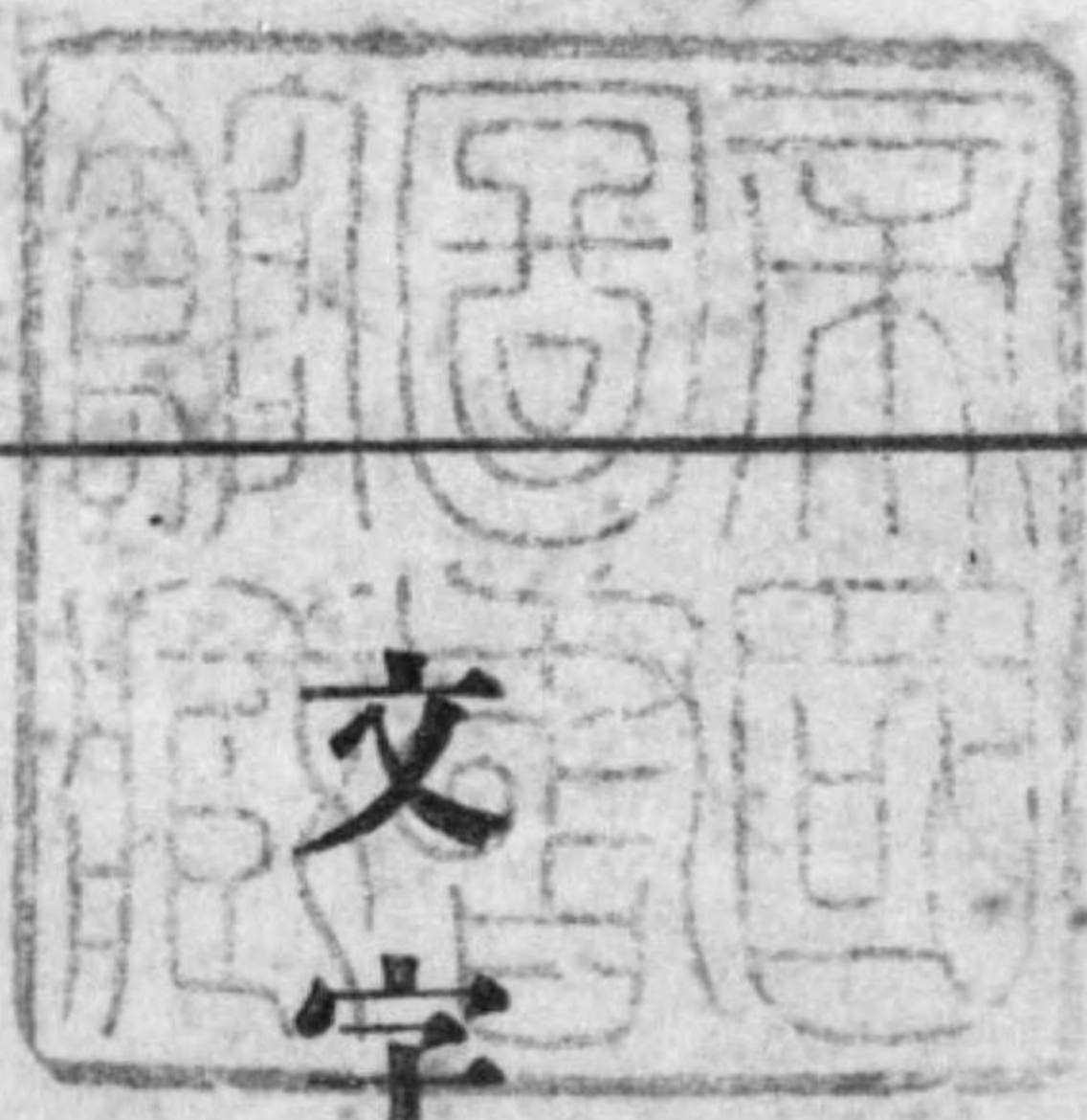
始



25 188

188

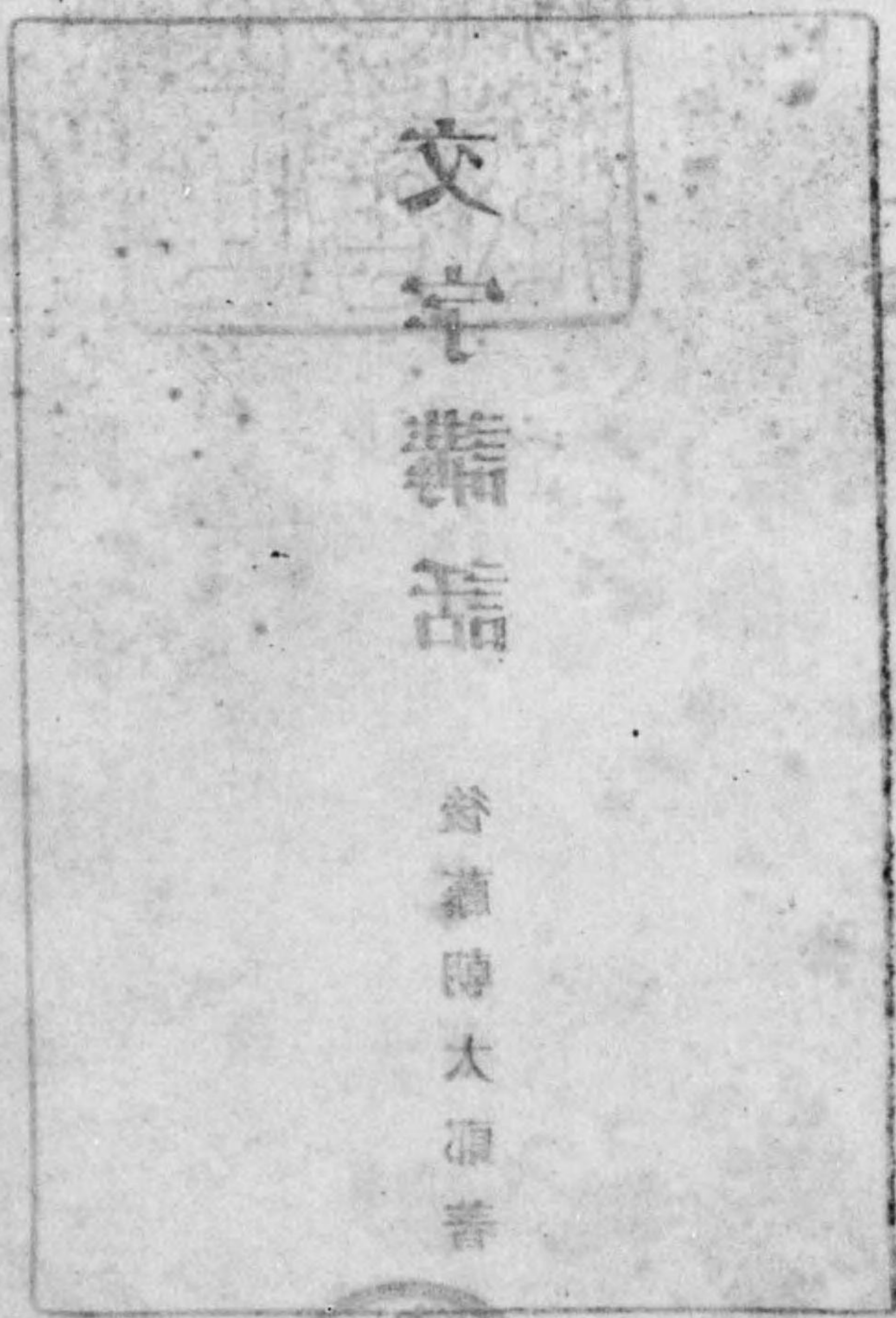
801.1  
G72



文字  
講話

後藤朝太郎著





文字考

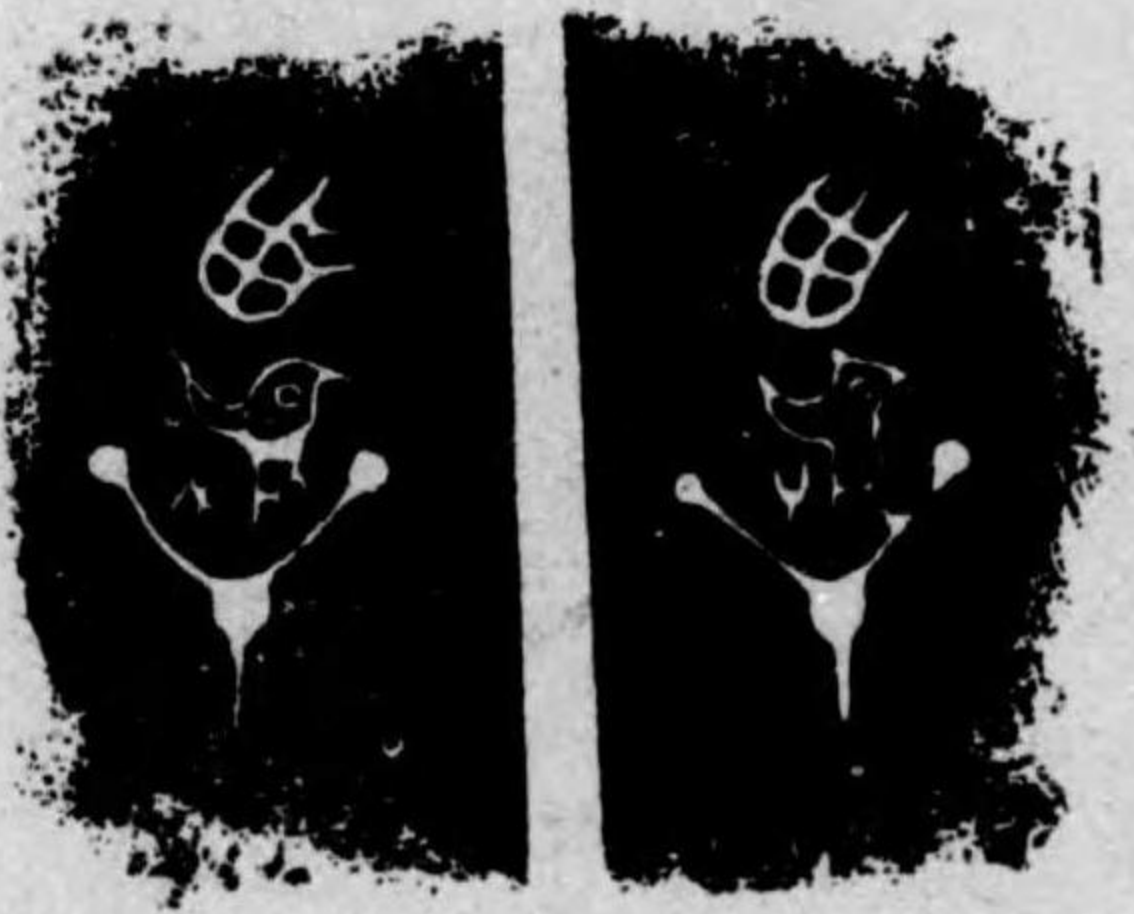
翁謙博 大源 著



右圖は祭器虎卣（卣は音イウ、與九切、彝と器との中間にあるもの）の器文を示す。釋文に曰く、

子作父戊  
虎尊彝

鐘鼎文の元始形を反映するもの、清、劉心源の奇觚室吉金文述參照。



左圖は祭器由爵單の銘文を示す。



茲に掲ぐる左右兩圖は殷時代の龜甲獸骨卜辭に見る象形文字。河南省彰德安陽河畔小屯より出土する龜甲斷片に見る支那最古の繪文字を示す。建築物に象れる「高」の字、祭器壺に配せられた「女」の字、矢の倒形「至」の字など明白に認識せられる。清、羅振玉の殷虛書契等參照。

右圖は右方より讀み、左圖は左より讀むか。當時はみぎひだり未だきまらざる刻文を見る。



### 文字講話に序して

日本古來の文運を助け、輝かしい日本の傳統を持續して來た文字は、個人の自由思想や便宜本位から之を厄介視してはならぬ。よし一時制限して厄介拂ひをした積りであつても、子供の着物が大人になると小さく感じ不便になると同様、又大きく殖やして行かねばならぬ事になるだらう。大東亞の滿華泰は固より、佛印に大南洋に馬來にと擴がれる華僑連中も漢字の看板を用ひ漢字新聞を讀んでゐる事實を日本人は認めなければならなくなつたのだ。

漢字と云ふものは從來一部では兎角之を厄介視してゐた傾きがないでもないが、その生ひ立を調べ、その變遷の跡を辿つて行くならば、洵に興味深いものがあるのだ。日常これを使用するに當つても、譯もわからず使ふのと、多少でもそれらの知識を持つてゐて使ふのとでは随分大きい違ひがある。又一般家庭の父兄や教職にある人々が文字の生ひ立、變遷發達の事情を辨へてゐて、その教育の際これを利用するならば、兒童も亦文字の理解記憶に負擔を感ずるところか、寧ろ欣然として之を習ひ憶へるやうになるものではあるまいか。

357  
201

本書は一般の人々が文字そのものに親しみをもち且つその正しき理解を得るやう、文字發生の歴史的事實を概説し、又字源の問題に於てはその材料を主として國民學校教科書に出て來る日用文字から取り、努めて平易にその生ひ立、變遷について解説したものである。

文字は之を始めから食はず嫌ひで厄介視すれば何とでも無用視されるか分らぬ。米英人は嘗て之を雞が足で蹴ちらかしたやうな變な字などと悪評した事もあつた。字音にしろ字形にしろ漫然殖えてゐるものやうではあるが、その間一糸亂れぬ系統が立つてゐる。谷(コク)が俗(ゾク)になり浴(ヨク)になり、區(ク)が樞(ス)になり歐(オウ、ヨウ)になると云ふ間にもK↓S↓Yといふ軌道を歩んでゐる。脱線してゐるのではないのだ。象形文字も亦その上代の繪文字として描寫された頃から幾千年の變遷を経てはゐる。その間新陳代謝があり分岐に分岐を重ねてはゐる。がしかし、その生ひ立を辿つて見ると優に爪哇のフクチャンに見るやうな兒童心理に訴へて興味深く呑み込ませる材料はいくらでも澤山あるのだ。況して師範の生徒とか、國民學校の訓導とか、家庭の父兄とかにとつては譯なく解せられるものがどの位あるか判らぬ。漢字を厄介視してゐない人ならこの態度がとれるのだ。厄介

視してゐる者だつて長い目で見てゐると成る程と合點の行く點が多い事だらうと察する。全く日本の國民性に融合し國民生活に編み込まれてゐる漢字の事だから之を今支那のものだと見なくてもよい。字音も純日本式に扱はれ、日本語に同化させてしまつてゐるのだから、我が國字だと思つて之を認識すべきだ。「我が物と思へば輕き傘の雪」と云はれてゐる句もある。漢字を以て國民性の涵養に資する上のビタミンとするならば、之を愛し之を少しでも多く採入れたい氣分になるのは人情なのである。

云ふまでもなく、漢字はその生ひ立が大陸に始つてゐるのだから、大陸の風土風物に結付け民俗學的に扱つて行くとするに幾らでも興味のある話がある。又腑に落つる節も多いのだ。本書に於ても、上代支那の生活様式、現代支那の風習を考慮しつゝ、文字構成の諸要素を出來るだけ具體的に例證するやう努めた。

漢字は之を我が物と思つて可愛がり之を育てあげて行きたいと云ふ至情さへ溢れてゐる者であるならば、制限とか厄介とかは云へぬ筈だ。之を口にする前少しでも行く末を案じて、深く掘りさげ、伸び行く方針ぐらゐは考へたくなるべきものである。今からでも遅くはない

のだから出来るだけ常用字の生ひ立を明かにし、その本を知り抜いて之を教育上に適用する事だ。児童をして小さい頃から文字に興味を持たせることはやがて之が大東亞の文化を解する礎石にもなり又引いては將來善鄰友好の手掛りともなるべきである。

文字を掘りさげる事は從來文字の末に拘泥するなど云つて之を徒事と見られてゐた。今からはさういふ考へは捨て、大東亞文化建設の一と役を買ふと云ふ心構へから見直さなければならなくなつた。文字問題の八釜しい折柄漢字の生ひ立の大略を知るだけでも將來の文字問題にどれだけ有益な示唆が得られる事か判らぬ。それはその人による事なれば、その心構へから本書の内容を味つてもらひたい。もしどの一節にか役立つところがあつたならば望外の幸とするところである。

昭和壬午十七年晩秋十一月

東都小日向臺の小廬にて

後藤朝太郎 するす

## 凡例 八則

一、世界の人口約二十億の四分一を占むる東亞民族が日常使用してゐる漢字に就いて根本的な知識を把握することはお互に愉快な事で、東亞の民族の一員として聊か誇りを感じてゐるところである。本書はその氣分で全篇に互り著者が五十餘年間打込んだ文字生活の研究態度を反映させてゐるつもりだ。その氣分態度に出来るだけ讀者各位も成つて頂くことが出来ればと思ふ。ならば著者の氣持と實は溶け合ふだけの心構へがあもつて欲しいものである。

二、文字の生ひ立、起源に遡りその當時の支那上代生活の實相を探ることは文字研究上の一つの大きな使命として考へらるゝのであるが、然し又文字の永い間の歴史的變遷とか又之が研究には如何なる態度を取るべきかとか云ふ實際上の大きな部門もある。これらの方面は文字講話のところで十分とは行かぬが抱負の一端を述べておいた。文字の實用

上の研究はこれ亦なほざりに出来ぬ問題であることを深く留意せられたい。

三、字源方面の知識の事であるが、もし人あり、字の生ひ立當時の上代の支那は文化の實相がとも低い時代であつたなどと考へたら頓でもない間違である。その年代は相當久しきに互つてはゐるが、なか／＼文化的に進歩した片鱗をばいろ／＼の部門に見せてゐるのである。鐘鼎彝尊盤爵の如き祭器の鑄金術の發達を見ただけでも思ひ半に過ぐるものがある。されば文字の象形描寫がたとひ元始状態にあるからとて直ちに當時の文化を蒙昧未開のものだと斷じて掛ることはよくない。支那文化の淵源の如何に深く又悠久であるかは想像以上のものであると信するものである。

四、文字の古代状態を本當に理解せんとするには單に説文の字學や訓詁の學のみで足りれりとせず、あらゆる生活方面、衣食住から慣習思想信仰趣味娛樂年中行事などに至るまでの大體の理解力推測力が伴はなくてはならぬのだ。古典一點張り、小學(文字音韻)の繩張りに踟躕してゐたりするあたまでは到底釋き得ないものがある。一字一字のわけがわかり字源の由來因縁はわかつたとしても、その頃の生活、住民の心情氣分が共に併せ解せ

られなくては何にもならぬのだ。つまり小乘字學から大乘字學に到るやう致したいものである。

五、古代文字の生ひ立を解する上に今日の支那の知識が必要だなどといふと變に思ふものがあるか知らぬ。然し漢民族の實生活の機微は今日各省に住まつてゐる各地方民によつて具體的に證明せられてゐると云つてよい。堯舜禹の時代からして既にあつたと見られてゐる穴居民の如きも今だに河南洛陽、鄭州から山西太原のわきに行くとかかなり見出される。上古の穴居民も、大東亞戦下の穴居民のとつてゐる衣食住もその要領は一つのみ。之を別々のものとして見ることは出来ぬ。方法論の上からでも、これを現代生活に結付けて考へると云ふ態度をとりたいたいものだ。かくの如くしてこそ今日の土俗習慣嗜好などが時代の開きはあるにしても好参考として光りを發して來る所以であると信する。この點が理解せらるゝことは讀者として又研究者として一番大事なことだと考へるのである。

六、漢字を以て支那の文字也と之を狭くきめてしまふのは誤りである。お互に大東亞の國にゐて漢字を使つてゐる以上、漢字は大東亞の言語感情思想を表現してゐる大事な符



牒なのであると見るべきものだ。日本人は又之を立派な日本字なりとの自信自覺の下に之を扱ひ又之を窮めなくてはならぬ。一部の人々の如く一にも二にも之を厄介視し之をバチルスバチルスの如く見て、之からの羈絆を脱却することにのみ汲々たる態度をとる如きは遽かに賛同し得ないのである。このことに就いてはなほ論すべきことが多々あるのであるが、それは別の機會に譲るとして、こゝにはたゞ漢字の短所、弊害にのみ目をむけ、その長所、利益の面を過少評價することは、大東亞を背負つて立つべき國民として採らざるところであることを記しておく。

七、世間では論語を読むに隋唐以後の楷書の論語をとりその本文を誦じ之によつて先秦の論語がわかつたとしてゐる。滔々皆然りである。先秦の孔壁の中から出たなど云はる、竹簡又木簡などいふものにしてもその文字は先秦時代の書體で書かれてあつたものである。秦始皇前後の文字の書體は小篆である。又古隸であるのだが、孔子時代に遡ると、すべて大篆即ち鐘鼎文（古文と稱せらるゝもの）で書かれてゐたのである。

篆文孝經、篆文論語などいふ本が清の吳大澂の努力で再製されてゐるが、それによつ

てもその原本の姿は想像推測が出来る。何れにしても先秦の文獻はひとり論語と限らず孟子にしても又遠く詩書にしても易にしてもなるべくその當時の書體に還元して讀むのが理論上正しいとしなければならぬのだ。

物は理窟通りにまゐるものでもないがせめて古典の扱ひ方はさうありたいのである。その態度をとりたいとの氣分だけなりと持ちたいものだ。又さう念願する事が眞の古典學者のとるべき正しき道でなくてはならぬのだ。さうすると清朝考證學者が考勘記や小學金石研究で以て大分開拓した分野を更にもつと本格的に進めて行かなくては嘘なのだ。日本の萬葉紀記をもし後世の書き流し文で讀み之で古典研究が出来たなどと云つたとしたらをかしい。それと同じわけである。

かやうな見地から本書の文字解説には出来るだけつとめて小篆や鐘鼎文乃至は古く龜甲獸骨文に見る殷代の書體をとり入れその例證を列舉した。初學者に取つては之がどしどし讀める處に進むのは或は難かしい事かとも思ふ。がしかし如何にせん、楷書の形では何としても古形の描寫状態を知るに由なく、そこで止むなくその元始形の原字にまで

廻らざるを得なくなるのである。

八、 周代の鐘鼎文とは後漢、許慎の説文に見る小篆の根元をなせる書體の謂ひである。之はつまり周代又はそれ以前にありて神前の祭壇に供へられたる禮器の銘文である。古は木鼎土鼎さまざまのものがあつたが三千年後の今日に遺れるものは古銅器の鐘鼎類のみである。鐵鼎も相當にあつたがそれは錆びて遂に亡くなり、傳はらなくなつた。そこで鐘鼎文の銘文と云ふと古銅器ときめられてゐる。次ぎには龜甲獸骨文であるが、これは河南省彰德城外安陽河畔の小屯から出土する上代龜卜用卜辭の象形文の刻字を指していふのである。これは鐘鼎文よりも更に古い元始状態を寫したものが多く、説文や鐘鼎古銅器の文字を根本的に釋明せんとするにはサーチライトの役割りをなすものである。手許にも幾百枚と持つてゐるが、その龜甲獸骨の刻文は實に夢かとも思はるゝくらゐ古代生活を反映させてゐる繪文字に富んでゐる。文字の象形方面を掘り下ぐるにはこれらの材料によるのでなければ徹底した方法はとれないのである。

## 目次

文字講話	三
一、文字研究の任務	三
その一、社會の要求する文字研究	四
その二、學界の要求する文字研究	七
その三、研究の態度	三
二、文字學の範圍	八
その一、文字の純學術方面	三
その二、字形研究の範圍	五
その三、字音研究の範圍	元
三、支那の上代文字	三

その一、日月考……………三

その二、首の字考……………四

その三、上代文字の發達……………五

その四、上代文字の統一期……………六

その五、説文……………七

四、西方の上代文字……………九

その一、埃及文字……………一〇

その二、支那文字の西方起源説に就いて……………一〇

その三、アッシリア、バビロニア文字……………一一

五、結語……………一二

初等漢字の字源(二)

山・川・水・江・火・日・月・木・本・竹・私・年・米・花・田・子

天・大・小・又・正・目・見・力・犬・牛・太・人・口・耳・出・上・  
 中・下・白・郎・畠・土・入・星・空・風・雨・雲・雪・電・春・早・  
 草・明・今・時・毎・朝・夕・多・外・夜・名・氣・汽・石・谷・海・  
 池・河・島・原・野・道・森・林・松・杉・枝・根・柿・新・机・箱・  
 節・稻・麥・村・里・國・町・車・舟・船・東・西・南・北・左・右・  
 方・前・後・遠・近・廣・長・高・少・音・光・金・玉・赤・青・黃・  
 黒・色・美・馬・物・毛・羽・扇・鳥・鳴・鳥・學・校・家・戸・所・  
 間・聞・居・屋・内・場・向・店・宿・京・宮・寺・持・先・立・皇・  
 神・様・祭・式・仕・吉・主・虫・心・思・皆・泣・急・行・來・乘・  
 追・吹・番・強・着・軍・弓・引・矢・知・勝・負・將・遊・力・分・  
 百・工・合・作・度・其・此・事・答・申・話・書・通・取・買・賣・  
 袖・字・男・女・父・母・兄・弟・友・孫・僕・自・手・足・生・死・  
 送・何

初等漢字の字源(二) ..... 二五二

四

正安品兵雷魚穴我衆開愛候信王爪求  
奧臼集農樂召威脈熟甘啓察普獲失奪  
雜史協尊善憂柔烈

軍事に關する文字文化 ..... 三六九

大陸戰の特色 ..... 三六九  
軍の字に見る兵車 ..... 三七四  
戰の字に見る戈と旂 ..... 三七八  
鬪の字に見る兵糧武器の爭奪 ..... 三八三  
爭の字に見る農具の喧嘩 ..... 三八六  
攻の字に見るたたく意義 ..... 三九一  
弱の字に見る文飾ある弓 ..... 三九二

法律に關する文字文化 ..... 四二三

虜の字に見る珠數つなぎの捕虜 ..... 三九六  
旅の字に見る軍旗と旗手 ..... 三九九  
國の字に見る國境の兵備 ..... 四〇四  
肇の字に見る筆と記録 ..... 四一三  
律の字に見る佈告の表裏 ..... 四二〇  
度の字に見る炊事場光景 ..... 四三〇  
法の字に見る神獸・水・被告人 ..... 四三九  
文字回顧録(跋に代へて) ..... 四四七  
青少年頃を回顧して ..... 四四七  
文字の畑に這入る氣分 ..... 四五〇  
大東亞の文化建設に ..... 四五三

五

文字講話

## 文字講話

### 一、文字研究の任務

文字の研究の第一義は實用の目的にあることは勿論であつて、文字は讀めなくてはならぬ、書き易くなくてはならぬ、意味の判り易いものでなくてはならぬ、と云ふは誰れしも唱道するところである。表音文字であればその意味の含まれてゐないことは云ふを俟たぬが、一般に支那の文字であるとか、支那系統の文字で安南の文字、日本の漢字などはすべてその形、音、義の三者の明白でなくてはならぬことは無論である。而してこれらの文字を學問の對象として研究するのは、その出發點において役に立つことの爲めに研究をするのでなくてはならぬ。實際に裨益を與へることが大であるとか、一般の學問の爲めに貢獻するところある考へ

を以て研究すると云ふことであるべきである。

文字の研究は單なる玩弄、死したる穿鑿、他に關係のなき骨董的のアマチュアを事としてゐる丈では吾人の所謂研究の任務と云ふ目的に叶つてゐないことになる。今日の時勢に於ける文字の研究である以上はこゝに明確なる研究上の務めと云ふものがなくてはならぬのである。

現代の時勢が要求する文字學の任務としては、一に社會の要求を充たすやうなる研究であるべきこと、二に學界の要求する研究たるべきもの、三にその研究の態度が今日の時勢に認められる丈の態度に進んで行くべきこと、これである。昔ながらのやりかたにしても長所はどこ迄も採るべきであるが然し舊式の方法のみに執して社會なり他の學界の要求する所を少しも考へに入れない如き態度は洵に吾人は之を惜しむのである。これは文字研究の任務として是非とも最初から明白にしておく可き事項であると思ふ。

### その一、社會の要求する文字研究

文字研究は先づ社會の文化の進運に何か貢獻をなす學問でなくてはならぬ。直接でなくても間接に裨益を與へる丈でもよろしい。これは明々白々のことであるが學者の研究にしてやもすると、全然社會が何を要求してゐるかを少しも知らずむしるあつてもなくとも何れでも構はないと云つたやうなことを唯骨董的に穿鑿してゐる類のものがある。これは仙人めいてゐてよいかも知れぬが、今日自分共の研究の動機が文化の進運に資する目的である以上は、社會の要求が那邊にあるかをいつも考へに入れてゐて研究を進めなくては無駄になる恐れがある。社會に没交渉の如く見えて實は基礎學として洵に重要な位置を持してゐる如きものも時としてある故に、一概に社會の直接の要求を考慮において居ないからと云つてけなす譯にはいかぬ。しかし文字學の如き學問に在りては、原則原理のみの空論みたやうなことは研究の任務として缺くるところがあると思ふ。社會の進歩の爲めに、また國民能率の増進の爲めに、或は教育の爲めに、或は藝術の爲めに、或は東洋文化の共同的向上發展の爲めにと云つたやうに實際問題を解決して行く上に文字の専門的研究の効果がどれ位大切であるか判らぬ。狭い學界のことは別にして考へて見ても頗る浩瀚なる範圍に之が應用され利用されて行くの

である。

これ迄日本の文字研究はやゝもすれば古い歴史的沿革の研究かさも無くば心理學研究の方面から來た研究ぐらゐであつた。而も多くは從來の傳統もあり、極く狭く見られてゐた傾きがあつた。之を社會の爲め生きた方面の役に立つるやうなことは餘り考へられてゐなかつたのである。

過去の古い時代の文字の研究にしたところで、矢張り古代の社會の各般のことが判つてゐなくては眞に文字のことは判つて來ない。社會と云ふ背景があつて始めて文字の生成があり、變遷があり、生命があるのである。その背景が判らなくては文字の根本、文字の正體は理解されやうがない。今日の文字の研究をなさんとするものは今日の社會あつての文字であることを先づ念頭にもつてゐるべきである。社會を離れて文字にその生命があるものの如くに誤解してゐる人々のなす研究は片手落ちである。されば苟しくも世に役立つ文字研究をなさんとするものは豫めその社會の要求を高處大處より達觀してその立場から手をつけなくてはならぬものであることをこゝに述べたいのである。社會の要求を無視した研究又は社會と全然

没交渉の研究は、今日の文字研究の任務でないと思ふのである。

## その二、學界の要求する文字研究

佛蘭西のシャンポレオンが西紀一七九九年にナイル河畔のロセッタ・ストーンの埃及文字を読み始めて以來埃及文字はその固有名詞と希臘文字との比較對照が始まり、固有名詞の綴字は之をギリシヤの固有名詞のそれに宛て嵌め、種々苦辛慘憺の後遂にともかくも千古の埃及文字なるものは歐洲の學者によつて讀破さるべきものとなつた。今や埃及文字の字引までが出来てその文字の構造までもよく明白にすることが出来るやうになつた。又アッシリア、バビロニアの文字もそのハムラビの法典の研究を始め種々の貴重なる文字研究が起り、遂にその今一層古い時代のスメル・アカツド民族の文字までが闡明せられるやうになり、それのみならず又そのスメル・アカツドの文字の元始形式が埃及流にもと繪畫そのものから起つてゐることがアッシリア學者によつて認められるやうになつた。その之を證明する材料が英國ロンドンの大英博物館に陳列されてゐるので之が最も明瞭にされて來たと云ふやうな事實



もある。このアッシリア、バビロニアの文字は疾くに古く亡んで了つたもので、あと何れの國にもそのキエネイフォームと稱せられる楔形の文字は傳はつてゐない。この國の民族の滅亡と共にその文字は亡びて了つた。その國の文明は後世にも傳へられてゐるが、その文字はそれきりになつて了つた。埃及文字の方は地中海の島を経て希臘の文字に傳はつたと云ふ説もあるが、これは假定説として認めておいても面白い説である。又事實さう思はれる材料が色々ある。しかし埃及文字そのものは埃及文明の衰亡と共に廢滅に歸して了つたのである。印度サンスクリットの文字、カロウシテイの文字の如き表音的の文字のことはこゝに暫く措き、繪文字の系統を持つてゐる古代文明國の文字はかくの如くにして今日見る影もなく亡んで了つてゐるのである。

支那には金石學として古來文字の専門的研究の部門があり、殊に清朝の世考證學の隆盛となつたにつれて金石そのものから比較考勘せなければ原本原刊本そのものに誤りがあると云ふことで、古銅器拓本の蒐集やら碑碣類の銘文などの比較が始まつた。清朝時代にはそれ故金石學者が著しく顯はれた。その研究著作の豊富に出てゐる事は既に三十餘年前拙著「文字

の研究」巻尾に詳細を列記しておいた通りで、汗牛充棟も當ならぬ程ある。日本の金石は狩谷棧齋翁の古京遺文を始め、幾多の金石文を蒐めて見ても二千有餘件で盡きて了ふと云ふ事であるが、支那はそこへ行くと無盡藏であつて無限にある。支那疆域内には無限に出て来る。支那は文字の國である丈にその材料も底知れぬ位にある。上は三代の金石より始つて秦漢三國六朝隋唐までに限つて見ても大變な數である。「金石萃編」「荆南萃古編」「寰宇貞石圖」「兩漢金石記」を始め、その古人の著述をあさる丈でも大變である。然り而うして支那の金石學者はこれらに對して文字上の研究を積んでゐることは非常である。爲めに説文解字の研究が先づ根本的のものになり説文學は長足の進歩を示すに至つたのである。

支那の金石學は、從來その古銅器ブロンズの銘や碑碣に見えた所の刻文拓本を唯一の材料としてゐたのであるが、この最近二十年以來は河南省から殷虛の例の龜甲獸骨の斷片が出土、發掘されるやうになり、こゝに俄かにその金石文字の研究に更に根本的の手がかりを得るやうになつた。これは劉鐵雲の著「鐵雲藏龜藏陶」が最初の閃きを示したのである。何にてもその龜卜文字は支那最古の繪文字を示してゐるもので埃及の象形繪文字より一層元始的で且

つうぶなものである。原物そのものから直接に之を見とどけることの出来る機會を得たのである。これが非常な力となつて従來の金石の研究に一段の光彩を添へるに至つたのである。然しその材料の出土したときは既に支那では金石學者の凋落期に屬し僅かに王國維、羅振玉二翁の外江南の少數の學者は之を認めてゐたものがあつたが、北京大學などに行つて自分共はその金石小學擔任の教授連に意見を叩いて見たのであるが、殆んどその龜甲そのものに就いて研究を積んでゐないのは固よりのこと、そのものに對する正鵠なる見解さへも持たうとしてゐなかつた位であつた。陳漢章翁の如き又故章炳麟翁の如きも再三自分はこれらの人々と議論をして見たが殷虛の龜甲そのものに就いては全く没趣味であり、或は之を無視してゐるやうでもあつた。湖南の葉德輝翁とは蘇州城内の故宅に遇つて色々文字談を交換して見たところ、説文一天張りで説文のことにかけては之を暗誦してゐる位であつたが、龜卜文字のことには觸れようとしなかつたやうである。

支那の金石學は今日何を要求してゐるかと云へば、金石の根本となつてゐる河南彰徳の安陽河畔から出るこの龜甲獸骨のことを考へに入れた研究を要求してゐるのである。これなく

しては眞の支那文字の研究は出来ない。故林泰輔翁や高田竹山翁なども之を認め吾人も亦之を認めてゐる。この點に於て支那の金石學は今後一段の擴張を要するのである。かくして始めて大成の道程に在る東洋の金石學は將來一つの大きな文字學として建設さるべき基礎をここに得ることになる譯である。

文字學に對しては他の諸學からの要求がある。つまり文字學は文字學以外の他の學問の爲めに貢献するところがなくてはならぬ。文字そのものの闡明された爲めに法制史の上に、歴史の上に、また考古學の上に少なからぬ學問上の手がかりを與へると云ふことが重要となつて来る。古代文字の解剖から得た知識を以て支那古代の法律思想の如きも明白にせられるとがあり、その結果ローマの古代法律の思想とその揆を一にすることも推斷することが出来ると云ふ如き發見もあるのである。例へば、

法の字即ち灋の字——水と鷹（獸）と人と口

これは文字の古代に於けるその要素を示したものであるが、その $\dot{\text{水}}$ は水であるからこれは水平、公平、公平無私の觀念のシンボルであることを示し、鷹は神獸であつて、墨子の明鬼

篇などに見ゆる神羊の如きもの、つまり正義、正道、曲がれるものを食ひ殺す、正しきものはどこ迄も之を擁護すると云ふ觀念を示したもので、この兩者のシンボルがあるによつて支那古代の法の觀念の二大要素は了解されるのである。これらは一例であるが、以てその一端を窺ふに足るのである。

かやうに文字のことは他の學問に直接に又間接に貢獻するところがあるのである。文字にはいかなる方面のことでも含まれてゐるのであるから、その影響は大きい。さればなるべく大きくひろい要求に應ずべく、ひろく研究しておくことが文字學に對する學界の要求であると思ふのである。

これ迄説文解字などの研究は單に文字そのものの研究と云ふよりはその用例とか本義とか轉義のことなどの方面が多く、段玉裁などもそれに力を多く致してゐた。従つて文字そのものから出て來るところの色々の新しい發見と云ふものが少なかつた。吳大澂なども文字そのものはよく集めてゐたがその分解の點に足りないところがあつた。今後はその文字の要素をたしかめその要素と要素との結合によつて生ずる第三の意味が明かとなるならば古代の文化

史研究に非常な參考となるのである。又古代の字音そのものが又古代の言葉の研究に多大の貢獻をなすことがあるのである。吾人は支那金石學そのものを一層擴張し又音韻學そのものも文字學中に取り入れてそして他の諸學より來たる要求に十分に應じ得る丈の準備の出來るやうやつておくことを希望したのである。

### その三、研究の態度

文字研究の任務として先づ必要なる一要件はその研究の態度の如何と云ふことである。専門事項の研究なり科學的調査なりと云ふことであつて見れば、文字研究の如きも、その取扱ひかたが兎も角も學究的でなくてはならぬ。然しその學究的と云ふうちにも色々ある。どこ迄も穿鑿的に次ぎから次ぎへと奥へ進むことは同じことであるが、

- 一、單に材料のみを臚列し事實の真相を掴むことなくして煩瑣なる傾きあるもの
  - 二、議論や推論等の側のみ多くして實例の適確なるもの乏しく概論に過ぎたるもの
- この兩者は何れも一得一失である。その餘りにくなくだしく事實の例證多きに失するは却

つて事の真相を掴むに困難なるものがある。時には事實、時には推論、その双方の必要なるは云ふを俟たぬ。しかし文字の研究に在りてはその材料なるものが複寫ものでなく原拓そのものであることを必要とする。複刻とか筆寫の拓本にては金石文の蹟が十分に判讀しがたい場合を見る。また古銅器の如きはその實物の銘文で見るとより拓本にとりて観る方が明白に讀めることが多いのである。されば實物の外に拓本にとりて調査研究を進める方が便利なことが多いためである。けれどもその原物も原拓も何もないときは仕方がない、筆寫の字形、摹刻の字形で満足せざるを得ない。阮元の著作「積古齋鐘鼎彝器款識」の如きそれである。出来ることなれば劉心源の「奇觚室吉金文述」の如き又は最近の「藝術叢編」の如き原拓の寫真版又は石版ならば十分である。殊に龜甲文字の如きは筆寫とか摹刻とかでは殆んど用が足りなくて、却つて誤りを傳ふる如き結果さへある。是非とも龜甲獸骨文字などは原拓本かさもなくばその寫真をとりて之を以て根本資料とせざるを得ぬのである。

これ迄文字の研究に就いてはやゝもすると、重箱の隅に終始執してゐてそしてむやみに狭く深く行き過ぎる傾きがあつた。それは一つの美風と見ることも出来る。けれども大局に通

ぜずして唯それ丈では困る。又文字とか言葉の研究にはよくあることであるが、例の一言一義説の如くに何でもかでも我が思ふ所に従つて牽強附會せんとする者がある。こぢつけで自らそれを解し得たりとなし、それが如何に非理であり又非科學的であつてもかまはぬ。唯單獨なる一つの材料からドグマに陥つた説をなし、而もそれが永古不磨のやうな考へを起して信ずること厚く、決して他人の批評などを許さず、極めて偏見なる態度であるものがある。また極めて僅かの事を重大視して他人の説を非議するものもある。文字や言語の方面にはこれが多い。自分では自分の説が最も公平なる又最も眞實なる斷案なるが如く考へ遂にはそれを迷信の如くにそのまゝ信じ切つてゐるやうな手合もゐる。そしてその非を悟る機會を失ふのである。文字研究の態度としてはこれが最も恐るべき舊弊となる。しかしよほどよく注意してゐなくてはこの弊に陥る傾きがあるのである。若し一度この弊に陥るときは折角の研究の任務が果されなくなつて了ふ。所謂物好きのアマチュア研究ならそれでよろしい。宛かも日本の言語が何でもかでも支那語起源のものと考へられ一から百まですべて支那語の起源由來で説き去らんとするその態度の如きはたしかに一つの迷信となつてゐると云ひ得る。か

くなつては最早や他の學界の要求を充し得ないのみならず、又社會一般の上からそのやうな研究は重く見られなくなるのである。又研究として何の價值もなくなるのである。さればかかる態度の研究は學問として認められなくなるのは當然である。

吾人は屢々われこそは天下の文字の發明者也と自稱する徒に出會ふ事がある。その熱心の度とその根氣の強きことと主張のえらきことには實に感服させられるのであるが、その態度に至つては賛同し得ない。狂氣の沙汰と云ふべきである。假名の改革とか文字の新案とか、片假名の新定とか云ふ議論、又その自稱新文字を云々するものである。かゝる人は多く文字狂に非ざれば常識の疑はれるものである。そのことばかりを考へてゐて、人さへ見ればその文字のことをのみ吹きかける。かくてその人は常識あるものより見れば確かにエキセントリックのものと見られるに至るのである。所謂文字發明家なるものにして若しも文字そのものが社會にいかにして出來たか、いかにして社會に對してそれが生命を持ち続け得るかを知つて來るならばかゝる無鐵砲なことは云へなくなるのである。が未だそこ迄は來てゐない。故に狂人じみた言語動作をなすのである。文字研究者は之とたちがちがふことは固よりであるが

やゝもすると之と相異なること紙一重のみなるものがある。よほど戒しめてゐなくてはならぬのである。

この研究態度のことは文字研究の任務の上から云つて重大な關係があるゆゑこゝに一言附加しておく次第である。

吾人は文字研究の出發點として何を先づ考へて置かなくてはならぬかと云ふ問題に對しては以上述べた如きことが先づ肝腎なものと信するのである。これは研究そのものの性質を心得てゐるものには餘りに當然すぎる問題であるが、とかくその弊があるので一言して置いたのである。次に然らばこの文字學の範圍とするところはどの範圍まで行くか、又諸方面の關係のある範圍はどの範圍のものまで關係をつけて行つたらよいか、少なくとも補助學科としては何學を採つたらよいか、又その研究方法はどうしたらよいかと云つたやうなことに就き次に大要を述べて見たいのである。

## 二、文字學の範圍

文字學の取扱ふ範圍は此れに従ふ學者によりて幾分の相違のあるは免れぬ所であるが、之を成る可く廣く見てその範圍を大きく見てみたいと思ふ。卑見にてはその極めて嚴重なる意味に於ける場合とや、他の實際方面應用方面に於ける場合との兩者に區別して考へる必要があるであらうと思はれる。即ち、

その一、純學術的にどこ迄も文字の學究そのものを方針として進むもの

その二、純學術の實際方面を考慮に入れてその實際社會なり教育界なりに適用せしむる方面を研究調査するもの

その三、純學術から應用方面に向ひ例へば文字を藝術的に又文藝的に取扱ふ目的にて調査研究を進むるもの

このうちその一に屬するものに就いてはあとで詳述する。これは文字學そのものの本論となり主體となるべきものである。その二その三に列舉した方のはむしろ文字學そのものから云へば從屬的關係に在るものであつて純學究的のものからすると調子が少しく違ふものである。その二に述べた實際社會の方面のことと云ふのは國字問題とか、漢字整理問題とか新字制定の問題とか活字の問題、振假名の問題、字數の問題、支那と日本との國際文字の問題などがこの部に入るのである。八釜ましい問題ばかりであるが、これには眞の文字の徹底的考察が出来てゐなくては問題の解決にあつていつもぐらつく。正鶴なる判断を下すことが出来なくなる。これらは社會上の實際問題として何れも重要な事項となるのである。同じくその二のうちに教育問題の方面のことを擧げておいたが、これは國民學校なり中等學校なり又は専門程度の學校なりに於て漢字をいかに取扱ふか、義務教育で貧弱なる文字を教へ込んでおいてそれで文字能率があがるかどうか、又むやみに澤山のを注入しておいてそれで國民義務教育は済むものであるか、基礎的に教へ込むものはいくらいくらで、あとは中等學校に進んでどれ丈を、専門教育に進んでは幾千にするか、この邊の按排をどうするがよろしいか、それとも始めからかゝる區別を立つることなく從來の通りの流儀でたゞき込むか。

かやうな實際上の問題が色々ある。これらは純學術でなくてもかなり十分なる調査をしてからでなくては出来ないものである。

その三に述べたところの應用方面、これは新しい見方であるので人によつては之は文字學の取扱ふ範圍でないと云ふものがあるかも知れぬ。要するに近來世間で藝術上に文字の形を色々に圖案化して應用する傾きが生じ來た。甚だ面白い傾向である。シヨウ・ウインドウに於て又看板に於て、包紙や書物の表紙外函に於て、其他色々の場合に漢字の象形的性質を應用美化して趣味的に表現せんとして來た。この際に於て折角そこ迄進んで來た以上は今日よりも今少しく精確なる文字上の知識を持たせたい。でたら目の圖案式漢字では困る。少なくとも文字の生成起源、昔の状態ぐらゐは知つてゐなくては全く困る。文字そのものの古いときの形を知らない爲めに随分噴飯に價する奇形を書きそれで平氣であるやうなことがある。又字學に無智で説文の二頁をも見て居ない爲めに全く誤りに陥りて文字ある人士の笑を招くやうなものもある。これらの圖案家に向かつては少なくとも文字學そのものの何たるかを一應知らしめておく必要がある。その故に藝術上の作品を作ると云ふやうな人に取つては純學術

的でなくてもよろしいが文字の手ほどき位は必要である。尙書道と云ふ方面からいふと云いたい事がたくさんある。落款の下手な爲めに見られないものがあつたりする。折角の日本畫、文人畫をぶちこはすことさへあるのである。

次ぎに尙その三のうちで文藝上のことも述べておく。これは支那系統の文藝は半ば文字上の美を一要素とするのである。詩賦の美しいのもその爲めである。單に言葉の上のひびき音韻の關係のみではない。文字上のあや、文章と云ふものが矢張り文字上の知識を有してゐなくては出来ないものである。所謂字面の都合がよく出來てゐなくてはならぬのである。文字の使ひわけ文字の列べかたこれが肝腎である。達意でさへあればよいやうなもの、その實矢張り何と云つても字面の變化に巧みなものではなくてはうまくこなせないのである。内容の貧弱なものを文字の美で胡魔化せよと云ふ意味ではないのだが、或る程度までは何と云つても文字上の性質を知り同義異字などをよく知つてゐなくては動かぬ事があるのである。全く進まれないことがある。それ故に文學者たちは純學術的でなくとも文藝に關係のある程度に於て文字の學問が出來てゐなくては文字を應用する點に於て拙くなるのである。文藝が一種の

飾りを要するものであるならば文字はその飾りの一要素であるから一應その文字の呼吸を知つてゐなくてはならぬと云ふことは議論の餘地がないのである。

かやうなわけであるから、その二、その三で述べた實際社會の方面のこと乃至は藝術文藝方面のことも或る程度までは純學術的の方針で進むときにもその事を考慮中に入れて居て然るべきことである。かゝることは學究的には無用のことだと云つて一概に無視してかゝるものがあるやうであるがそれはあまりに狭い。また一方、活字問題、國字問題、それから圖案、文藝などに文字のことが拙く見えてゐると臺なしに非難される。これは平素からよく教養が盡されてゐなかつた結果である。文字の學問は單にせまい文字のことばかりの研究が文字學に非ずして矢張り實際上的のことも應用のことも含めた廣いものでなくては十分健全なる發達を期しがたいと思ふのである。このことは文字學の範圍を決定するに當つて最も大事なことだ。之を無視したり考慮に入れないと云ふことになる文字學は一體何の爲めの學問であるか。果は實際の當面の問題にあつて何等役に立たぬものとなる。學問として全く効果のないものとなるのである。文字研究の任務のところでも述べておいた通りかゝる實際の役に

立つ方面のことを社會でも要求する代りに學者の方でもその事を考へてその範圍を定めなくてはならぬのである。

次ぎは既に述べたその一のところにある文字學の本論として又主體として取り残しておいた文字の純學術方面のことに就いて述べよう。

### その一、文字の純學術方面

文字は言語學で言語を取扱ふのと同じやうなわけである之を純學術的に取扱ふにしてもそこに二つの方面が自ら分れて出て来る。言語をば研究するにあつてはマクス・ミュラー流の考へからして之を言語そのものの科學的研究とそれから今一つは言語を通じて他の各方面の文化、古代文化などをしらべる、所謂フィロロジの研究が起つた。それと同じわけで文字も亦言語と似たもので唯文字は言語（音と意味のあるもの）の要素の外に之に形（字形）の加はつてゐると云ふ丈のものであるから略々の研究法を之に適用して見ても差支なからうと思ふ。さうすると、つまり、文字の純學術的研究には左の二つの方面があることになる。



イ、文字そのものの科學的研究、これは文字の本體のみを研究しその形とか音とか意義とか云ふやうな方面のことのみで文字そのもの以外には出ないのである。

ロ、文字以外の各方面の文化史を文字をとほして見ること。即ち文字を一つの關鍵として、そして文字の闡明から引いて古代の法律、風俗、宗教、軍事、刑罰等何事でも之を文字の方面から明かにせんとするのである。文化史の側は文字をとほして色々多岐に互つて調べられるのであるが、更に文化史以外のことでも例へば兒童心理の一面など文字書取りから窺ふことが出来るのである。

支那金石學で取扱ふ範圍は古銅器そのものの形式、年代、所在、銘、拓本などのことを主とし、又碑碣そのものの形式、年代、所在、銘、拓本、法帖などを主とする。そのうちでも字形のことや字數のこと及びその読みかたのことがやかましいのである。こゝに文字の純學術的研究で文字そのものを研究すると從來の金石學中唯その銘、拓本、法帖に見ゆる字形の事にのみしか觸れない。大分そこに金石學と文字學そのものとの間に徑庭があることになる。かやうに金石學と文字學とは範圍がちがふからしてこゝには金石學の範圍でなくやはり文

字學として考へたいのである。先づその純學術としての文字そのものの研究は更に分ちて三つとなすのである。即ち、字形と字音と字義とである。これはいつでも同じことで誰れ人が見ても文字生成の要素は此の三者の外に出ない。この三者によつて文字が出来て、この三者の變化あるが故に文字の變遷も起つて來るのである。その中いま字形と字音の研究範圍に就いて述べてみる。

### その二、字形研究の範圍

文字學に取扱ふ字形の研究には之を時代年代の順序の方から云へば、

- 一、龜板文（龜甲獸骨に見る龜卜用文字）
- 二、三代古銅器銘文（主として殷代と周代との時代に於ける金文）即ち鐘鼎古文
- 三、古隸漢隸（秦代の古隸以下兩漢時代に於ける碑碣の文字）
- 四、章草楷行（六朝隋唐以下の文字、これは主として書體の方の材料になり文字そのものの研究材料としては價值が少ない）

の如きものがある。

この字形の問題にあつて一番大切なものはその字形を最も有力に示してゐる材料である。拓本そのものである。これは實物としての龜甲、獸骨、鐘鼎、碑碣を容易にすぐ手に入れることがむづかしいので従つてどうしても拓本殊にその原拓本を手に入れると云ふ順序になる。然るに今日はその拓本の蒐集はひと仕事である。拓本を集めても之を盡くす事は困難であるから或は持ち寄り或は個人にして大きく集めてゐるものを取りまとめてコロタイプ又は寫眞石版なり金屬版なりにして之を書物にするの便法をとるのである。この印刷の方法によるときは最近の刊行にかゝるものまでをも手に入れることが出来るのである。

字形の方面で従來金石學者の取扱つてゐたのは例の鐘鼎古文であつた。これは説文解字の研究に一步を進めたものでその爲めに説文の解文にはいつも鐘鼎文が唯一の關鍵であつたのであるが、更にその後最近に至つて龜甲文字の發見があつて以來鐘鼎文そのものの研究に又龜甲文字がその關鍵となるに至つたのである。これは金石學上の空前の進歩であつて過去幾百年の金石學はこゝに一大光明を見出すことが出来た譯である。鐘鼎文が比較的圖案的實用

的になつてゐるに比較して龜甲文字の方には元始的なまた繪畫的のものがあつて、いかにもこれならば支那上代の文字が繪畫象形から出てゐると云つても誤りでなく眞に繪をつくりであると首肯せしむるものが澤山あるのである。世を降るにつれてそれが亡びて了つた。或は變化して了つた。鐘鼎金石文に見えるものは即ちその第二第三の道程にあるものであつて繪そのものから大分遠ざかつてゐるもののみである。無理に繪として象形として考へられないこともないが可なりむづかしいものがある。況して後漢のときに出来た説文になると、已にその繪畫としての特色は殆んど消えうせて亡くなつてゐるのである。而も説文の上では象形本位の解説法を試み讀者もそれと心得て合點したつもりである。けれども事實は欺くことが出来ぬ。之を最初の龜甲文字の元始的な象形に比べて見たならば雲泥の差がそこにあることを誰れしも見出すことが出来るのである。

字形の研究に單なる楷書のみを以てしてゐては何の研究も出来ない。必ずや説文解字ぐらゐは少なくとも見てかゝる必要があるのであるが、更に鐘鼎文に迄遡つて見てゐなくては眞實の處は判らぬ。今一つ根本的のところに行けばどうしてもその源泉たる龜甲文字の知識をか

りて來なくては解決がつかぬのである。かやうにして今日では字形研究の範圍はこの三段の階梯を踏む可き事になつて來てゐる。而もその材料が比較的たやすく得られる時代になつて來たのである。又支那では國民性から云つても文字の書かれたものはよく保存せられる關係もあり旁々金石の材料は誠に天下の至寶となすと云つた空氣が漲つてゐるのである。印材の如きも秦篆の銀印であるとか漢銅印の如きが、殊に愛玩せられてゐる。又漢碑なども山東、陝西各地にまだかなり残つてゐるがそれがよく保存せられその拓本も珍重されてゐる。これらの材料、文字資料は比較的容易に得られることの爲めに支那では此の金石學がよく發達し又その影響で文字の形の上の研究が長足の進歩をなしたのである。

かやうにして吾人の蒐集し得る材料は文字學の方面では之を年代順とか字體の種類とか器物の種類とかに従つて分類することを第一着の仕事としてゐるのであるが然し學問としてはそれを本として何等かの理窟何等かの事實を抽象し歸納せんければならぬ。文字には文字としての理法なり原則なりその發達の徑路なりを考へて見て、又製作の意匠を考へて見て何等かのプリンスブルを發見すべきである。又或る他の事實を證するに都合のよろしい原則を見

出すことが任務なのである。形の研究には是非ともこゝ迄その結果が到達しなくてはならぬ。個々の事實の發見から進んでその事實を綜合した結果、或る最後の解決の關鍵を得るところまで行くべきである。固より之が研究の方法としてはエジプトやアツシリアの文字との比較をも必要とすることであらう。或は他の學問の補助的力を假りて來る必要も起るであらう。けれども終局のところは字形の研究によつて文字學そのものの系統、體系を完成する爲めに役立つ所の原則のやうなものを見出すことが純正文字學の立場から必要なこととなるのである。

### その三、字音研究の範圍

字音の研究は支那では古くから韻鏡の研究があり比較的科學的研究に近い研究として目されてゐる。此には語頭の音も、語尾の音も、中間の母音のこともひととほり明かにすることが出來てゐる。しかし韻鏡の研究ではそれ丈で古今の音の變遷を見るわけにはいかぬのである。周代の古音古韻に關する研究は詩の如き韻を押せる詩韻より行くを捷徑とす可く、又その

邊までの範圍ならば字音として或る程度まで大體取扱ふことが出来る。けれどもそれ以前の古音となるとわからなくなる。論語の音の如きも、今日の論語の読み方では、眞の古音は出て來ない。その孔夫子當時の音を復舊させて見て始めて本當に讀めるのである。ところが周代の音で論語を讀む方法などは未だ全く講ぜられてゐない。形の方では篆書論語が已に行はれてゐるが周代音の論語のよみかたの公にせられたもののあるのを聞かないのである。

字音研究ではその材料として古代のものを用ひるばかりでなく現代の支那にある地方の方言音などは之を十分に利用して此が苟しくも音韻變遷なり古音推定なりに助けとなるものは悉く採つて参考に供す可きである。又日本や朝鮮の字音なども相當に参考になる性質をもつてゐるのである。今字音研究の範圍内に入るべきものとして考へられるものは次ぎの如きものである。即ち、

- 一、詩經その他先秦文字の詩文にしてその音韻上参考となるものは之を材料中に採入る可きである。
- 二、漢代以後印度サンスクリットの言語にして支那譯されたる固有名詞、人名、地名など

の字音。梵語と支那譯との對照によつて古音を幾分明ならしむることの出来るものがある。これらの音譯ものは採りて以て材料となすべきである。所謂佛典の翻譯に見ゆる音譯の文字、梵漢對譯の古い經文などはこの側の重要な材料となるのである。

- 三、南支各地方、浙江省、福建省、廣東省、臺灣の如きまた朝鮮日本の如きところの字音そのものはかなり古い時代に傳はり支那古音をそのまゝ保存してゐるものが多い。或は日本朝鮮の言葉の如きウラルアルタイ語族中の言葉の中に又古く支那語が化石的に傳はり保存せられてゐる事もある故これらを材料にすると支那古音の研究が出来る。

- 四、文字そのものうち複合せられて出來てゐるもの即ち合體文字中にはその中に音符を有つてゐる所謂諧聲文字なるものがたくさんある。これらはその音符の比較によつて幾分なりとその古音を研究する上の手掛りとなるのであるから、この諧聲文字は字音研究に多大の手掛りを與へてくれるのである。

## 三、支那の上代文字

支那文字の生ひ立が象形に起り、その象形は六義に分類され、條理整然たる統制の下に構成せられてゐる如き見解を有するものが多い。これは後漢の説文解字を始め、文字の研究書籍を見るものやゝもすると陥る弊である。やゝもすると文字は倉頡一人の製作でもある如く考へられることもある。

大衆生活の程度の低い支那民族にありては、殊に上代の、元始生活とまでは行かないにしても、相當低い民衆生活を營んでゐた當時の社會に、文字の使用が考へられるとするならば、之は當時一般にひろく理解のあり、使用上に生命の澁澗たるものでなくてはならぬ。必ずやその一般の認めて、普通文字として刀筆の上に現はされてゐたものは、極めて大衆化せられてゐたものでなくてはならぬ。その當時の字形と云ふは半ば繪畫的であり、その形が直ちに誰れ人にも認容せられ、それに結付けられた音と意味とが、容易にすぐ相互間にうなづき得

たものでなくてはならぬ。少數の役人、一人の學者が之を制定創造したなどと云ふことは、あの地理的にひろい領域を考へ、又その當時の世相の實際を考へて見て、殆んど不可能のことだつたらうと云へるのである。

## その一、日月考

古代文化の實際的描寫は象形文字の上に最も豊かに又最も卑近に採り入れられてゐる。日月星辰、山川艸木、虫魚鳥獸、何れもよくその象形の表現法によつて文字圏内に取り込まれてゐる。これに就いては一點の疑ひもないことであるが、しかしその描寫象形上の運筆の都合や、又傳統の久しきに互る歲月の推移に伴ひ、意外なる訛傳をそのまゝ繼承する如きこともあり、後世の學者をして誤らしめて居るものも少なくない。日月の二文字がそれ／＼その實物の形から來てゐることは争はれぬ。けれどもよく觀察して來ると、之は何れも眞の象形ではなくして、六義に云ふところの指事たることが判るのである。

先づ日の字は、圓形にて現し、之に修飾限定的のしるしを加へる。その形には色々ある。

單なる圓形だけではその何の義たるかを決定しかねるので、その特に太陽であることを明白にする爲めに、之に指事の加筆をするのである。



史頌鼎、器蓋、

筠清館金文

大夫始鼎、

薛氏鐘鼎款識

日父乙爵、

積古齋鐘鼎彝器款識

日庚父癸彝

積古齋本

伯遼頤盤

攷古

旂鼎

積古齋

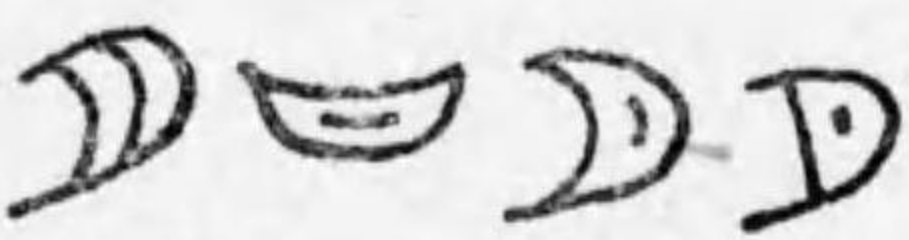
龜甲獸骨文

殷虛書契

かやうにあまたの象形を見出すときは、その形が單なる圓形ばかりでなく、そこには必ず

太陽であること即ち特定のものときめつける筆の加へられてゐることがわかる。これらの金文並に龜甲文字は何れも信賴するに足るべきものから採られたものである。以て上代の日の字が吾人の考へてゐる圓形ばかりでないことが判る。

次に月の字について見る。三日月形に對しては之を何とか修飾限定しなくては月の意味にならぬ。そのまゝであつては夕(ユフベ)である。もと太陰の形をとり來たつたものは夕(ユフベ)を示したものであるが、更に之に或る物を加へて始めてツキの義が表はさるゝことになつてゐる。而もその月の形を示すツキの古文にも千差萬別のもが見出されるのである。



召伯虎敦

積古齋鐘鼎彝器款識

鄒公敦

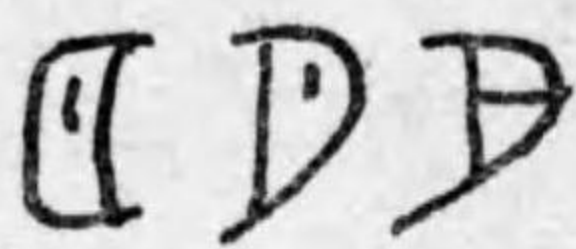
積古齋本

月形卣

筠清館金文

己酉方彝

嘯堂集古錄



史反鼎

西清古鑑

茲天子鼎

積古齋本

楚公鐘

復齋本

かくの如くして、單にその月なら月の意味を現すにしても、それに指事のしるしを伴つてある。始めは單に三日月の形の描寫されたものが、太陰そのものを示してゐたものであつたであらうと思はれるのである。けれどもそれが既にユフベ、夕宵の義をとるに至り、最早その月の象形のみを描寫されたものは本來の太陰の義をとらなくなつた。それで之に月(太陰)の意味を持たせると云ふ爲めには、何か約束的のしるしを附せなくてはならぬこととなつた。これが右に列記せる各様の古篆としての象形的指事の構造をとるに至つたものであらう。之は尙殷代の龜甲獸骨をとつて、その月の字の古形について見るも大體それと同じものである。がその時代の古いだけ、それだけ元始形のものも多く、たゞ單にその月の輪郭として三日月形を描き現し、これを以て二月三月の月に用ひられてゐるのが普通のやうである。龜甲文字

からよほど時代がおくれると最早かゝる形を見ることは少なくなる。こゝには今、殷代龜甲獸骨文字に見るところの月の字の古形を示しておく。



四月と釋文す

殷虛書契卷四



十三月と釋文す

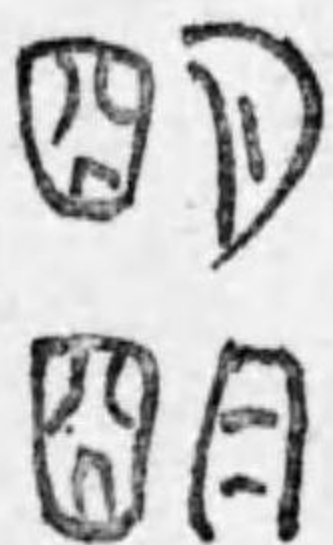
殷虛書契卷四

(註、十三月とは閏年に見る月を指す)

四月は三に一を加へて四となしたるしを用ひ、十三月の語句は十と三とを轉倒して用ひてゐるのが普通である。之を三十月と讀みては意をなさないのである。これは龜甲文字に見えた言葉の上の注意點であつて、頗る奇な現象と云はねばならぬ。

文字の象形の上に現れた描寫、またはそれが言語の上に表現されるときは、かゝる奇な現象が見出される。何にしてもその日や月に對する上代人の描寫方法が、かゝる書き振りの下にひろく一般に認められてゐたことが、龜甲金石の上に察せられるのである。之によつて日なり月なりの古代形式は明白に認識されることと思ふ。ところがこれらの文字を要素に、更に第三の新しい會意文字を構成せんとするときには、往々にして誤解やら考へちが

ひなどを生じてゐることがある。と云ふのは、古來誰れしも認めてゐる明の字に就いて考へて見てもわかる。説文解字にも見えてゐる字であるが、世俗には、明は照也、从日月、として考へられてゐる。日月星の精光は皆明なりとか、或は段玉裁の註にも、明明は猶明照也とか解かれてゐる。後世の學者も亦多く、明は日月の精を會意して作りたるものと斷じてゐる。けれども明の字そのものの古い處の姿は日と月との合字ではない。龜甲金文の元始状態について調べて見ると、むしろ他の形を採つてその生成の要素を異にしてゐることを發見するのである。これは、



は照也、从月



とあるべきもの、その左半は窓牖の形に象れること云ふまでもない。字形の古いところをしらべて見ても、明がその日と月との合字で出来てゐるのを見る場合は殆んどなく、必ずや窓牖の象形に成つたものを要素の一つとしてゐるやうである。その右半の月なることは固より

である。實際について明の字の古體を集めて見ても、窓の形によれるもののみを見出すのである。例へば、

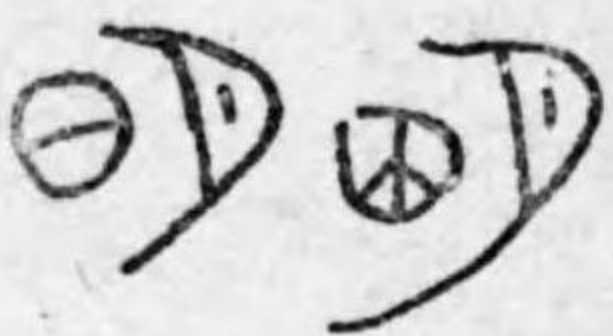
	明我鼎	積古齋本
	明我鼎	積古齋鐘彝器款識
	毛公鼎	說文古籀補
	銘勳鐘	攷古
	叔向父敦	說文古籀補
	執叔編鐘	筠清館金文

支那の上代文字



晉姜鼎

嘯堂集古錄



寅簋

博古圖錄

大體かう云つた式の材料が収集せられる。その間、日と月との合字として斷ぜらるべきものは見出されないのである。今日支那南北各地を遊歴し、又古代の繪畫描寫になる民家の窓牖を見るに、その窓框小さく、厚壁の面にかうした形の格子を見ることがあり、縦横に、又斜に、様々と組合されたものを見る。決して一樣でない。思ふに古代にあつても、後世の如くその民屋は内部が暗く採光甚だしく不十分に出來てゐる設計であるから、その小窓を通して月光の照らし込むことは、夕宵の屋内生活には何よりの照明として有りがたく感じたわけであつたであらう。燭光を利用せる程度の民家はかなり裕福なうちであつて、一般には夜は照明の方法としては月光を當てにし、月のなき夜はそのまゝ薄暮室に入り休むの外なかつた譯であらうと察せられる。之は今日の片田舎僻陋の地に於ける田家の生活から推しても考へ

られる所である。

明の字を以て太陽と月との會意文字なりなどと説くは、後世の人の知識、理窟を基に作られたる氣の利いた説であつて、上代文化を解釋せんとする生活相の觀察としては受取りがたしい點であると考へる。明の字はどこまでも民屋の窓の象形と月との取り合はせで出來たものとして解釋しなくては、上代生活の實際にピッタリと來ないのである。こゝにはこの卑見を述べて明の字の沿革起源を研究する上の一假定説となしておく。

次ぎには月にちなみて有の字を持ち出して見る。有は説文解字にも見えてゐる。説文にはどう出てゐるか云ふと、之を正しく月の部に編入し、そして之に對して、



有は不宜有也。春秋傳曰、日月有食之、从月又聲。

之はつまり日月に蝕あることを云ひ、月蝕のことでも指して云つてゐるものらしく解かれる。そして、又の字は音符なりと見てゐる。之は或はさうかも知れぬ。又が音符にあるのは事實であるが、しかし又會意の義も含み、有する、把持するの意を持つてゐる。第一その手にするところのものは、説文には月が書かれ、太陰の象形が配せられてゐる。ところが事實多く

の金文から、有の字の古形なるものを漁つて來ると、一向に太陰の形をしたものを含んであるものは見ない。何れも肉の形そのものである。象形の上に見る肉片そのまゝの形が描かれてゐる。祭の字のときの肉、胃の字のときの肉、肝の字の時の肉、何れも皆同じものである。その有の字の下半は正にこの肉であつて月ではない。即ち、

散氏盤

積古齋鐘鼎彝器款識

召伯虎敎

積古齋本

孟鼎

說文古籀補

毛公鼎

說文古籀補

齊侯罇

嘯堂集古錄

秦權

積古齋本

これらの一つとして月（太陰）の形を含んでゐるものは見ない。月蝕と云ふことをどうしてこの字に結付けて考へたか。許慎の意中がわからぬ。また手を翳して月を打眺めたとしての造字法を解くは、あまりに風流閑雅に失するきらひがある。今少しく實際的でなくては古代文化の解釋とはならぬ。

思ふに之は矢張り肉を手で所有すること。この肉片は自分のものであると云ふ所有權を示したつもりで文字であると考へられる。さながらこれは、他の例で、禾に對して、この禾は自分のものであるとしるしをつけ、之にムを書き加へ、私のものとなしたと同じ造字意匠である。そこで私の字が生れ出てゐる。もしその物を公平に、ム（モノ）そのものを分ち、等分すると云ふ如き心持を示すときは、之に八の字を加へ、公の字を生ずる。こゝに私と公との造字上の考へが兩輔相並んで明示せられるのである。

私の字と公の字に見る造字意匠

支那上代に見る文字上の構造にはかくの如き所有觀念のあたりの頗る明白なるものがあるが、此の有の字の場合には、最も明瞭にその間の心理が窺はれる。これによつて「有」の字の古形は、又の字（手にて握ること、又取ること、把持することを指示するもの）に肉を配して出来てゐるものたることが判る。肉をたしかに手で握んでゐることが、即ち上代生活の上に最も似合はしい實際に合致した構造たることを思はしむるものである。説文解字の文面に、有の字の月の如く見えてゐる部分を、日月の月に見たる解釋は受取りがたい所である。それで有の字に見る月は何にしても、その字形の上から判断しても、肉そのものの象形であるし、又上代生活の實狀から見ても、それであることが推測せられるのである。以上は日月に關する古代文字の實際と、並にその日月に酷似した古代文字からして頼でもないものが持出され、遂には似ても似つかぬ解釋まで持出されるに至るとの實情を述べた次第である。つまり今日では日月が合せられて明の字となつたとか、又月に手を翳してゐる形

から有の字が出来たとか、殆んどその上代文字の資料證左の上から問題にならぬやうなことでまで信ぜられるに至つた。甚だしい例になると、帽子の帽の字の右半までもが、日月の二字の合字でもあるかの如く信ぜられてゐることがある。それは冒であつて、元來はその目が横の形であり、それに姿全體を蔽ふ西域の風習である象形が、その繪文字の起源をなせることを推知せしむるのである。さればその右半の冒の字のみについて云ふならば、次ぎの如き變化があたまに浮ぶ。



大要こゝに列擧した順序を経て、後世の冒又は帽の字の出来たものであることが察せられる。その沿革歴史の容易でないことがこの一事によつても考へられる。同時に今日俗字に帽の右半をよい加減に、日月に書いてゐるもの多きを見るも、この間の消息によつて一目瞭然たるものがあることを知るべきである。之はアラビア回教徒あたりの風俗を察し、漢字の起源を考へて來るならば、一段の興味ある脈絡を見出すのである。

次ぎには首の字に關する考察である。

### 一、その二、首の字考

首の字に就いて之と密接の關係のある文字はあまり多くない。先づ普通に見るところのものを以てするならば次ぎの三者であらう。

- 一、馘の字
- 二、道の字
- 三、縣の字（左半は首の字の倒形）

一體首を主題とした文字は上代生活を檢討する上にかなり重要な意味を有つてゐる。なぜかと云ふと、上古有史以前にあつては、それが獸の首にしる、人間の首級にしる、又人間そのものを示すときのしるしとして之を取扱ふ場合にしろ、相當、古代人の實生活に觸れたものがある。日常生活の内容に觸れたものを有してゐる。それだけに首そのものが持出されてゐる場面は悲壯にも見える。そこに上代味の特徴が窺はれる。こゝには馘、道、縣の三者に

ついて順次文字上の解釋を試み、併せて上代文化に見る造字意匠の如何なるものが存せしかに説き及んで見たいと考へる。

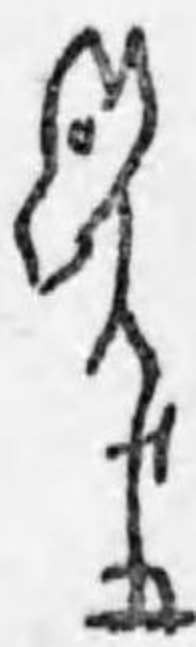
#### 馘の字の古形

殷代に見る龜卜甲の文字として知られた馘の字はかなり澤山のもが見出される。而もその形はさうその甚だしい距りはなく、大同小異のものである。



龜甲獸骨文

殷虛書契卷六



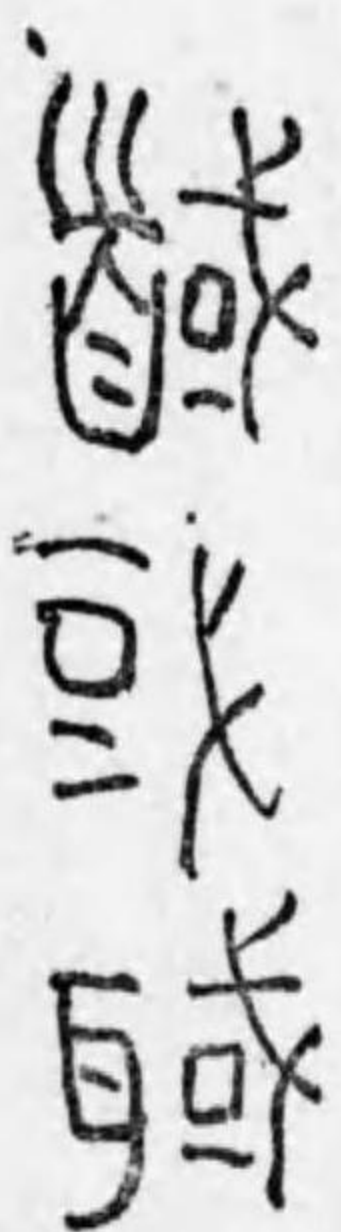
龜甲獸骨文

殷虛書契卷六

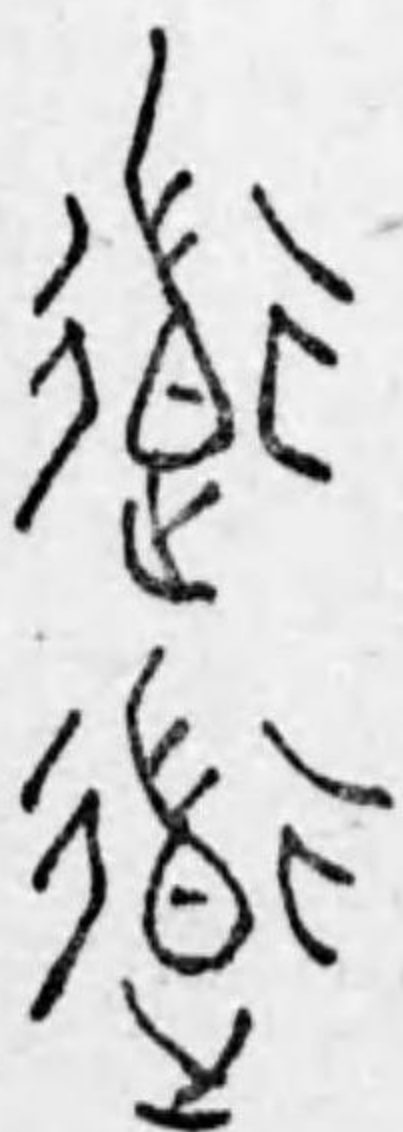


龜甲獸骨文

殷虛書契卷六



說文解字及び鐘鼎古文



説文の文面には馘は耳に従ふも、同字として取扱はれてゐる。と云ふのは、

馘は軍戰斷耳也、春秋傳曰、以爲俘馘、從耳或聲、

とあるのでよくわかる。これは詩經の攸馘安安(皇矣)の傳に、「不服者殺而馘其左耳曰馘」ともあるので、一層その上代の事實をたしかめ得る。つまり耳を取つて馘するも首を截つて馘するも同じわけである。耳の代りに首が造字上使はれてゐるのもその道理である。

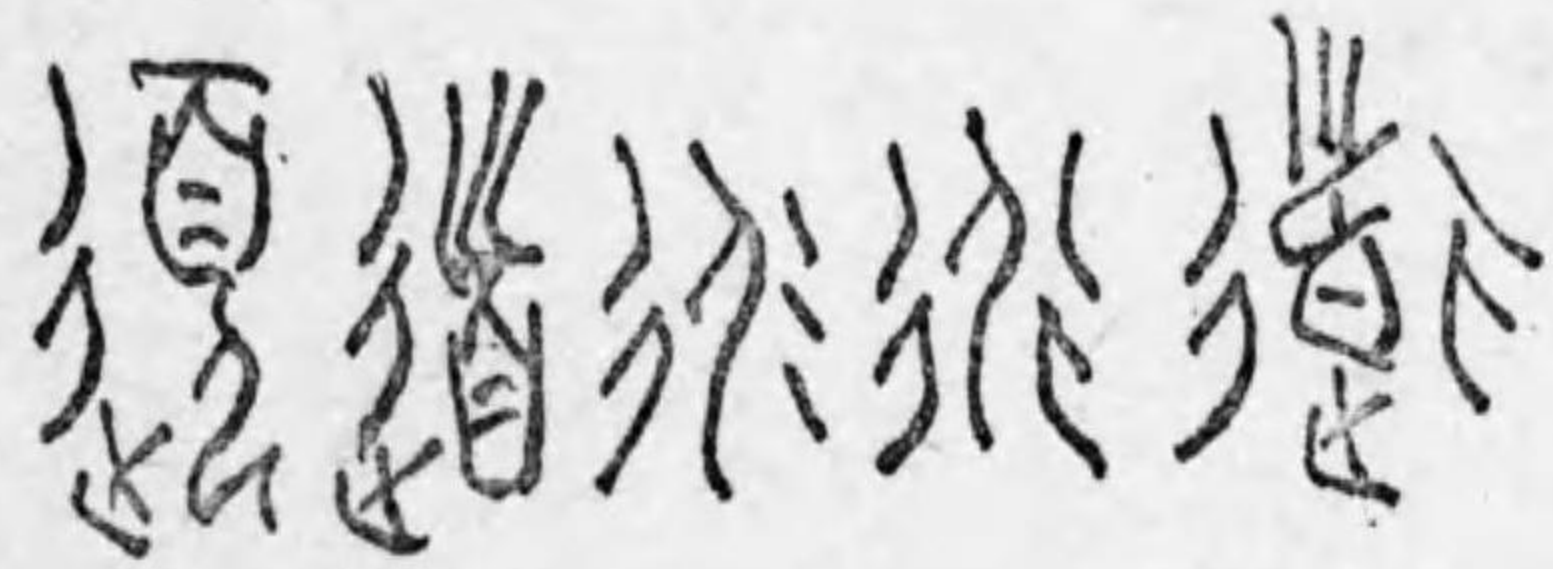
之を言葉の方から見ると、馘は *Kuak, kuok* の古音であつて、獲の古音と言語としては同じ概念を表示する類語のうちに入れて考へられる。爾雅にも「馘は獲也」とあるのが思ひ併せらるべきものである。古代文字の形の上では、人間の首か、又は動物の首か、よく判明しがたいが、殷代龜卜文字として現れてゐる龜板文には、さながら梟首の姿に見ゆる元始形式が目撃せられる。鬮體ではなく生首として見らるゝものの掛けられた姿が看取せられる。そしてその下半には武器又は刑具の如きものが配せられてゐる。之を若し武器と見らるゝならば首(梟首)と戈の形とで以て馘の字の先驅をなせるものとして解釋せられぬでもない。その資料の見出されるものが殷虛龜甲獸骨であるだけに、一層その上代生活の面目も窺はれる譯である。

支那の習俗は、先年郭松齡がその斷末魔にその梟首頭蓋骨に雪が詰められ、奉天の公園にさらして大衆の見せしめに供されたことがあり、又浙江ではその督軍を僭したとの廉で、孫傳芳大人が之を拉致せしめ、死刑に處してその首を西湖湖畔にさらし、行人の見せしめにしたといふデマもあつた。この類の生ま生ましい實例はいくらでもある。古代に限らず、現代に限らず、首を切つてさらし首となすと云つた場面は茶飯事とされてゐる。

「或」の字は元來國土を守るの義。その領域を示したるしの口に對して、干戈をかざし國境を護るところから、口に一を加へ、更に戈を加へてあるものだと説かれてゐる。しかしこの馘の字の場合に於ける「或」は、かゝる國土の義とか、武器の義とか云ふ意味を配合したと云ふよりか、むしろ馘の字そのものの音符であるから見られる。或(國)の音の古いところも、獲の古音も、共に同じ系統の音であつたことが察せられるのである。詩經皇矣篇の本文に見えてゐる馘の字の古體が、上に述ぶる如きものであると考へ得るならば、茲に上代文化の面目が躍如として動いて來る感じがする。武器に生首の掛けられた争鬪生活の一場面も

これから想像せられる。

道の字の古形



(行に首) 寅簋

攷古

(行に人) 石鼓文

金石索

(行に人) 太保敦

說文古籀補

(走に首) 繹山碑

金石索

(走に頁) 詛楚文

金石索

道の字の異體はかなり澤山あるが、大體この範圍を出でない。本來道の字は古代の造字法から見ると、行の字とその中間に首の字の挿入せられて出来たものである。或は又その行の字の下に止の字の加はれるものもある。つまりこの行の字と止とで以て走の字の生れ出るところがわかる。何れにしても、步行、去來、停進の動作が示されてゐるものとして解せられる。上代殷虛龜卜文字あたりで見ると、行の字は𠂔であつて、四つ辻、大還、廣小路(道)にあたるものであつて、道路の象形として受取られてゐる。或はさうかも知れぬ。その道路に當り人影が見えてゐる。これは行の字に人の姿の配せられたものが、あちこちにと散見するのでわかる。行と人の合字で出来てゐる道の字の古體は、最も明瞭にその造字意匠を物語つてゐる。行に首なる文字は、首を以て行人そのものの首部、頭部だけを表現せしめたものと解せられる。人影の去來、往來の光景を首のところのみ書いて、その外の處は察せられるとしてゐるのではないか。時には頁の如く人の姿全體を描いて之を表示してゐるものもある。何にしても明白にその意匠はわかるのである。つまり首の去來動きを示す爲めに止の字を加へ、前頁に見る如き構造のものをも見出すのではないかと思ふ。

説文に道は人の行く所の道也と説いてゐるのは、この人を描寫したつもりの路上の去來を採入れたものとして解せられるのである。又首に寸を加へ、導の字の古字となせるものもある。これ亦路上に關係ある文字として受取れる。

道

道の字の篆文及び籀文、説文所録

古代支那の社會でその人智の未だ進まなかつた當時、その通路なるものを表示せんとするに苦心してゐたことは略之で以て察せられる。よくその十字路を持つて來て、之に行人の姿又その略體としての首の形を配し、之によつて路上の場面が示されたものとなしてゐるのである。之によつて上古の人々がひとりこの交通道路のことばかりでなく、衣食住に、又祭祀信仰に、又軍事行政の上に、建築、工藝の上に、あらゆる方面にかうした苦心を費してゐることがわかる。而もそれが更に有史以前の長い歳月を費し、最も大衆的に又各地方の土民にもわかり易く、受け入れられ易く發達したものと察せられるのである。

縣の字の古文

説文解字に、縣は從系首之倒形、會意、爲梟首之象。とある。この字は系の字の古形と、さかさまの梟首の形とから成り立ち、上代生活の薄氣味のわるい處をそのまま表現してゐるものである。

鄒子鐘

攷古

縣妃彝

古文審

齊侯鐘

嘯堂集古錄

齊侯鐘

博古圖錄



(小篆)

說文解字

縣の字の古體は色々あるが、要するに古いところに溯つて見ると云ふと、樹木の象形があり、樹幹へ持つて行つて、之に綱が垂らされ、その綱の末端にさかさまに懸けられた生首がぶら下げられてゐる光景が見える。而もその首級には頭髮の垂れてゐる生醒い場面が見えてゐる。これは果して文字上に見る通り、首だけの實寫であるのか、それとも人間の姿全體がさかさまに懸けられてゐる形であるのか、その邊は想像するの外ない。莊子に見ゆるところ、又孟子に見ゆるところからするなら、帝之縣解と云ひ、又倒縣を解くが如しなど云ふ文面のあるところから考へて見ても、そこにはたしかに人體全部を樹上にさかさまに懸けられてゐたことが判る。その事實を基にして考へると云ふと、此の文字上の樹幹と、綱と、倒首との三者は、正しくその刑罰のところを表現したものだと思つてもよろしい。しかしそこまで立入つて考へなくとも、少なくとも倒懸の梟首だけの程度で考へても面白い。よく戦争のとき敵將の首級をさらしくびにして樹上に、柱の上に、又電信柱にぶら下げられてゐるところを

見る。決して珍らしい事ではない。

縣の字の元始状態がかゝる事實に立脚して造られてゐるとすると、今日の縣の字はその要素中から木の字の部分を省略してゐるわけになる。實際後世に流布する懸の字、縣の字は、何れも木を有せず、單に糸と首の倒形のみから成り立つてゐる。果してかゝる二要素の合字がその本來の面目であるかと云ふと、糸即ち綱と首だけでは意味をなさぬ。どうしてもそこには樹幹なり樹枝なりの取り合せを必要としてゐる。又その方が元始生活の面目をそのままピッタリ表現してゐるとも云へる。元始形の縣の字はその木が右に又左に、どちらにおかれてあつてもよろしい。そしてその綱のかけられた關係を示してゐるのである。これが縣の字本來の意匠である。

ところで縣はかくの如くして、刑罰の義を示すことが本來の意味でもあるやうになつた。又この倒懸の刑は上代としては相當重い刑であつた。磔と同じ程度の重刑であつたであらう。墨、鼻、剃、宮、大辟など、色々刑目はあるが、それらよりもつと以前の上古の刑であつたことと察せられる。こゝに縣の字の文化的意義の搖籃時代が看破せられる。しかしいつし



か刑の執行所と云ふ地點が、役人やら市井の人々やらの集團生活を營むところとなり、これが行政區域を示す語となり、それを表はす文字となつてしまつた。所謂府縣の縣の義と云ふことになつた。そこで本來の懸ける義の方を現はす爲めに、縣に心を加へ、「懸」となすに至つた。今では縣そのものには掛ける義はなくなつた。けれどもよくよく本を洗ひ求めて見ると、そこには倒さ首、鼻首の存することがわかるのである。之をアガタと訓じようが、ケンは又はシエン、ヒエンと音で誦じようが、文字の方の起源には必ず生首を存してゐる。その證據が嚴然として存してゐる。こゝに縣の字の古代文字の研究と離るべからざる重要性がある。又かゝる意味深き歴史を有することが支那現行文字の史的價値を高める所以でもある。縣の字の分解とその要素の意味、並にその配合の上に見のがすことの出來ぬ事實の存することは以上の如くである。この縣の字をかりて來るだけでもどんなにか興味深き文化の半面が推測せらるゝことかわからぬのである。

現在行はれてゐる文字を通して、その上代の生ひ立に遡り、當時の文字構成の上に窺はる

る文化の一般は、その研究穿鑿の方法次第で、如何やうにも察せられる。しかしそれには篆書とか龜板文とかの古い時代に遡ることを必ずしも必要としない。元始状態を見るにはその上古の字體に遡るを便利とするも、更にその後の有様を窺ふには又おのづから後世のものを以て察することも出来る。所謂楷書の形をとりて發達してゐる唐宋以後のものに就いて見ると、明白に見られるものもある。

之は租税の兩字から、禾稻が古代の納付物であつたことの物語られてゐるのを知るとか、又貢の字から貝がみつぎの品であつたとか、貨幣財寶の重要なものであつたことを知るとか、澤山の手掛りがある。それと同じやうなわけで、また砲の字からして古代の大砲の石製であつたことが知られる。石扁はその材料を示すしであるから、一見して上代の砲身の製作が推知し得られる。この流儀の見方からして、鯨が魚類（水中にゐるもの）に見られてゐたり、蝦が虫類に入れて考へられてゐたりする類の珍奇な事は多い。

又今日俗間で用ひられてゐる花婿の婿の字は、元來を云ふと女扁であるべきわけがない。この婿はもと士に従へる婿である。士と胥とで婿と書かれてゐたものであるのだが、いつし

か女扁に同化せられ、嫁の方へ引付けられてしまった。柔かく軟化したやうに見えるが、大衆の間に使用せられてゐる文字のこととて、之は理窟通りには行かぬ。婿が女に従つては不合理だと云つて訂正させて見たところで、一般には既に婿として認め、之を士に従つて書き改めたところで公認されないまでに至つた。これは尙砂糖の砂をわざ／＼水の扁に従つて、沙と直して見たつて始まらないのと同様である。沙漠とか、流沙とか云ふときの沙は沙であるが、日本の砂糖、砂利のときの砂は沙ではない。砂の獨占する處となつてしまった。

かくの如くして楷書の中に於ても、今日と千年以前のものとの間にはかなり隔りを生じ、今更ら如何ともしがたいものがある。唐の干祿字書の中にも、これらの有力な資料がまた含まれてゐる。文字はその使用せらるゝ間に生命を宿してゐるものであるから、その使用せる社會人の文字に對する常識が、常にこの間の消息を價值付けることになる。それによつてその時その時の文化の程度も推知せられることになる。必ずしも上代ばかりでなく、中古以後の社會の文化も、文字を通して、興味ある史的考察の一方面を形成するものと云へるのである。

### その三、上代文字の發達

上代の支那文字の形態は、概して繪畫的である。繪に近きがゆゑに總體に互つて生氣がある。刻者銘々の考へによつて一個一個の文字が刻せられて居る爲め、個人的癖が幾分づゝ現はれて居る。固より後世の文字ととも、その筆者と文字形態との間には争はれぬ關係がある。然しながら上古の人がその當時の文字例へば一つの動物なり品物なりを刻せんとするにあつて、その物の特徴を囚へて之を寫さんとする考へは何れも同一である。これは文字上の約束であるから、例へば鹿の字を刻す時はその特徴を囚へ、決して馬のときの特徴と混する事なく劃然と區別して刻せられてゐるのである。若し之を混同した寫しかたを敢てする時は、文字としての役目が没却せられてしまふ。されば上古の人々も此の點には注意が屆いて、刻せんとする文字は成るべくその文字の現はす物に限つて認めらるゝ特別の部分に注意をして刻して居ることは事實である。その點は技術は幼稚ながら一致して居るのだ。然しその特徴として認めた點を描寫するに當つては必ずしも百人が百人同一の描寫の型に嵌つてはゐな

い。その型は自由勝手である。その爲め反つて繪として見る時は中々生氣が認められる。然し文字としての立脚地からは之を繪畫として優れりとの故を以て進歩せる文字となすべきに非ざるは固よりのこと、其の文字としての役目を果たすに都合のよい形態をなせるものを以て優れりとなすべきだ。上代文字の變遷して居る經過の跡は漸を追ひ各々その傾向を有して來てゐるのである。けれども上代文字にはその特有の性質としてどうしても刻者銘々の自由なる刀法が現はれて居る。例へば動物の描寫法を見るに次ぎの如きものがある。

鹿——鹿の字の古文は、龜甲の卜辭に見えるものが最も古い。



殷虛書契に據る鹿の字の上古の形態一例

かくの如き形で、色々に變化せられて居る。刻者の見るところにより殆んど十人十色の態である。然しその鹿の描寫なることには一致してゐる。

馬——馬の字の古文は、金文龜甲文共に古くから見えてゐる。



殷虛書契に據る馬の字の上古の形態一例

かくの如き描寫法が見られる。これも亦十人十色の刻法で描かれてゐる。鐘鼎古文には更に變態のものもある。

すべてかやうに色々と刻者の意匠によつて違つて刻されてゐる。然しながら何れもその描寫の法がちがふと云ふまでであつて、その鹿なり馬なりの特徴をうつせる點に於ては決して手ぬかりはないのである。即ち、鹿にあつては、その岐角殊に三岐の角を頭上に刻し、體は寧ろ輕快に、脚はむしろ長く尾は短かく表はして居る。又、馬の字に就いて見んか、その特徴として大首、鬣毛、豐尾、蹄蹄を漏れなく刻して居る。各字甚だ周到なる用意あるを認めなくてはならぬ。此の用意周到なる點は常に鹿馬の兩字に於てのみ然るに非ず、上古の文字の過半は此の形迹を留めて居る。その當時極めて頻繁に用ひらるゝものに在りては、その繪

畫的痕迹は比較的削られ居るを見るのだが而もその各文字の元始状態に遡るときは、矢張り繪のやうであつて、細密なところが何れにも認められる。

動物關係の文字にては右に述べた二字の外、虎の字、豹の字、犀の字、象の字などの如何にも繪畫そつくりのものが甚だ多い。殊に虎とか豹とかに在りてはその體軀の面に畫くに虎文豹文を以てせるなど頗る精巧にして、かのエジプトの繪文字と雖も之に匹敵することの出來ぬ程のものがある。動物學上太古その支那並に東部亞細亞に分布せられて居た動物の種類の一斑も或る程度までは此の動物關係文字の形態から推測を立て、他方、化石、遺骨の形態の方面と相まつて調査を進める時は相互關係にて斯學の新生面を開くことが出来るかも知れぬ。少なくとも象ならば象と云へる一種の動物文に就いて云つて見ても上古文字使用の時代に他の鹿馬野猪兕牛等と共にそれが山野に現はれ田獵の上に知られて居たものであると云ふやうなことも證據立てられるのである。

#### 1、上代文字の正體と略體

上代文字形態の一斑は上述の如きものであるが、上古の文字の間には後世のそれと同じくその手にて刻さるゝに正體なると略體なるとがある。謂はゞ楷書的なると草書的なるとの兩者が共存して居たと見られる。文字發達の上より云へば、未だ草昧不定の状態に在り、正略の區別を取て立つ可きに非ずと雖も、然し、苟も文字なる以上は、その實用的役目に叶ふやうな變形せらるべきは理の當然明白なることである。これは後世の篆書が隸體となり又楷書となり、次第に草書を發達せしめて、現時、楷行草の諸體が實際社會に行はれて居るのと同じわけ、つまり實用上にて、なるべく手數のかゝらぬ形體に書かれる傾向をとることは、古今同じわけである。支那上代の文字に既に此の現象が見られると云ふことは、篆文の研究上甚だ興味あることである。たゞしかして、に注意すべきは、その略體文字が如何に繁々しく行はれようとも、その書體は必ず篆書體たるを失はない。後世の所謂、楷書とか草書とかのやうな別體に變化して居ることはない。同じく常に篆書の形式だけは守られて居る。その範圍内で、正體が略體となつて居ると云ふに過ぎぬのである。その果して、何と云へる文字は、如何なる字形に書くを以て正體と認むべきかと云ふことは問題なれども、假りに上代文字は

その繪畫的にして生氣あるもの、自由濶達なるものを以て元始的文字即ち歴史的正字（若し正字と呼び得るならば）となすことが出来るならば、比較的實物寫生の繪を以て文字の正體となすべく、而してその刻刀の省略せられた刻文は之を略體だと云ふ事が出来る。此の意味に於ける正略兩體は篆書中に甚だ多く見出される。今その一例を龜甲獸骨文字と、鐘鼎彝器の銘のうちから採つて左に列擧して見よう。即ち、

鹿の字の古文（龜甲獸骨文字）

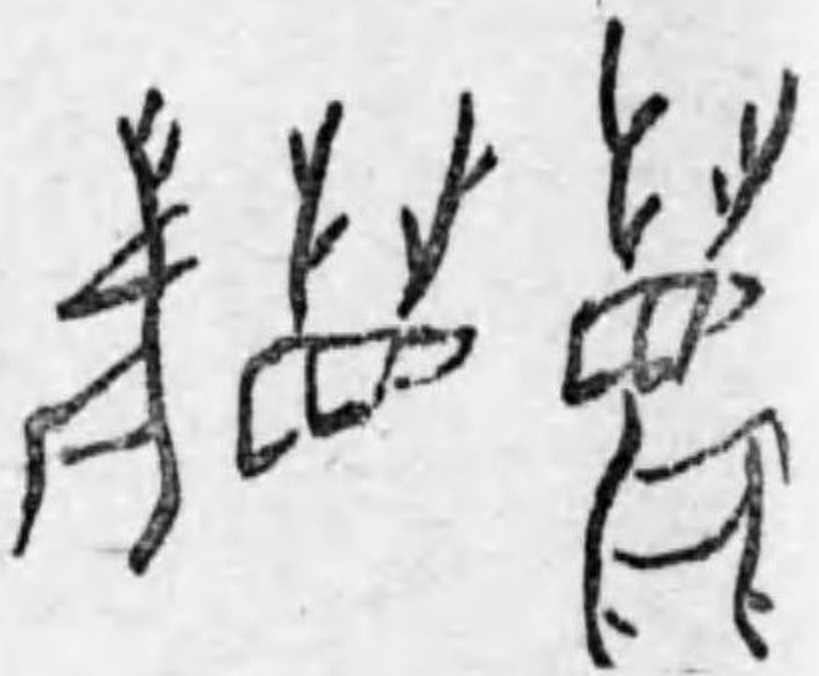
(一) 正體文字



殷虛書契卷二の三十五

殷虛書契卷三の三十三

殷虛書契卷三の三十二



殷虛書契卷四の四十七

殷虛書契卷一の五十二

殷虛書契卷一の四十八

(二) 略體文字



殷虛書契卷四の四十八

同上

同上

殷虛書契卷四の二十九

支那の上代文字

(牝)

殷虛書契卷二の二十四

(牝)

殷虛書契卷四の四十八

(牝)

殷虛書契卷二の三十五

壽の字の古文（鐘鼎彝器銘）

(一) 正體文字

兄光敦

兄光敦

積古齋

牧敦

牧敦

攷古

叔夜鼎

叔夜鼎

積古齋鐘鼎彝器款識

(二) 略體文字

師器父鼎

師器父鼎

筠清館金文

趙亥鼎

趙亥鼎

說文古籀補

周公簠

周公簠

拓本

叔液鼎

叔液鼎

嘯堂

父季良壺

父季良壺

筠清館

豐姑敦

豐姑敦

積古齋

伯其父簠

伯其父簠

積古齋

支那の上代文字



高克尊

嘯堂



乙公尊

西清古鑑

孫の字の古文（鐘鼎彝器銘）

(一) 正體文字



祖辛敦

積古齋



鬲叔與父簋

(金文)



齊子中姜罇

樊古樓



楚公鐘

王復齋

(二) 略體文字



丁琥卣

積古齋



父辛卣

樊古樓



鳳文鼎

古鑑



子孫角

積古齋



父己人形彝

攷古



合孫祖丁觚

嘯堂

支那の上代文字

右に掲ぐるものうち、孫の字正體中の動物の如きものは専門家の間で慣例上金文にて之を孫と讀み居るを以て茲に掲げたわけである。本來孫の字としての音と義とを此の文字が兼ね有するか否かは疑問である。要するに上述の「鹿」「壽」「孫」の三者は古文正略兩體の一例を示す材料たるに過ぎぬが、之によつて、同じく鹿とよむ可き文字中にもその異形があり、又壽の字、孫の字中にも異形のあることがわかるのである。字形の發達上よりすれば、正體文字必ずしもその進歩せる形に非ずして、略體の反つて進歩形なることがある。略體文字必ずしも俗惡なる字體を代表するものではない。むしろ慣用のあまりに繁きものは自ら略形にて多く用ひられ、否らざるものは比較的多く原形のまゝにて用ひられるのであると概言することが出来る。例へば龜甲文字に於て云つて見るならば、その十千十二支を示せる文字の如き、單獨にその一字だけを抜きとりて見る時は、讀み能はざるものがある、と云ふ程に粗略な文字の書かれて居るのが多い。鐘鼎文にありても慣用文句なる數壽萬年無疆等の文字には多く粗笨な略形が用ひられて居る。されば篆書の範圍内にて通覽して見ても嚴格な正體と實用一點張りの略體との併用が周代に多くあつたことは争はれぬ事實である。

周代の文字の形態はかくの如く概観することか出来るが、然し尙又後世の楷書を立脚地として之を見る時には、又別に興味ある研究が出来る。固より篆書の時代には、楷隸の字體に變化することを豫測してゐたわけではあるまいが、後世の楷書體の中には古文、大篆、或は小篆の體から直ちに之に變化して來て居るものがある。即ち中間の漢隸を経ることなく篆より直接に楷に來て居るものが少なからず見出されるのである。中には又隸より直ちに草に移つて居ることもある。前に示した「孫」の字の古文の正體などは後世の楷書の字形と殆んど違ひを認めない程である。楷書の「孫」を知るものは誰れでも古文の孫を推讀し得ないことはあるまい。動物起源の象形文字も或る物は推讀が出来る。然し鹿壽等の古文が楷書體のそれになる迄には如何なる變化を経過したであらうか。思ふに龜甲文に見る所の鹿の字は鐘鼎文のそれよりも繪畫に近い。文字と云ふよりは繪である。繪なるが故に楷書に關聯して説くは少しく迂遠の感じがある。壽の字の古文に在りても多少そのやうなところがある。しかし今日の鹿の字、壽の字の淵源はたしかに上記の古文正體より發して居ると斷言して憚らぬのである。果して然らばその古文より一段一段に變化推移して、後世の楷書にまでなつた順序が



辿り得られるかどうかと云ふに、之には古代の材料があるによつてその順序が明かにさぐり得られる。

ロ、上代文字の變遷

鹿の字の變遷



龜甲獸骨文字——龜板文代表的形式

籀子尚、古鑑——古銅器文代表的形式

石鼓文、拓本——大篆代表的形式

說文解字——小篆代表的形式

舊拓禮器碑——隸書代表的字形

楷書(初期)

艸書代表的字形

壽の字の變遷



兄光敦、續古齋本

趙亥鼎、古籀補——代表的形式

說文解字——小篆代表的形式

漢鏡文、金索——隸體代表的形式

支那の上代文字

漢瓦當文、石索

楷書（初期）

文の字の變遷

從古堂識學卷十五

樂生鼎 鈞清館金文

乙公敦 四清古鑑

師酉敦 續古齋鐘鼎彝器款識

趙鼎 說文古籀補

文父丁卣 說文古籀補

師遽敦 續古齋本

說文解字（小篆）

鹿壽文の三字の古文、大篆、小篆、楷書の變化はかくの如く整然として行はれて居ることがわかる。此の種の整然たる變遷はすべての古文篆書に求め得られるかと云ふに、決してさうではない。或る古文は小篆となるまでに、非常な變化をなして形式を改めてしまふことがあり、又或るものは古文で簡単な字形であつたものが小篆で反つて複雑になると云ふやうな

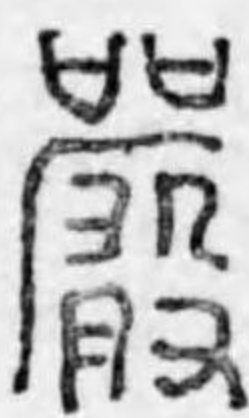
支那の上代文字

逆なものもある。即ち卑近なる實例で之を云つて見れば、

嚴の字の變遷

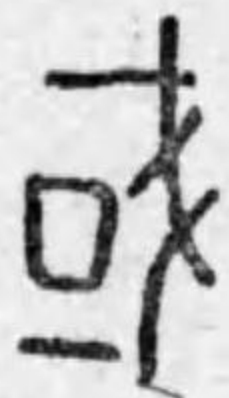


古文、鏡叔鐘



小篆、說文解字

國の字の變遷



古文、宗周鐘



小篆、說文解字

前者は古文、小篆間に相違あるものの例であつて、後者は古文よりも小篆となつてから却つて畫の増加したものの例である。かくの如き事實よりすれば楷書から古文の形に遡つてその

異同をしらぶるは固より文字の本末を明かにする所以で文字學上必要なことであるが、小篆の状態より古文に遡りて、僅かの字體の變遷上の相違の跡を見ることが亦甚だ必要である。何となれば實用上から云ふも、一、二、三の字、口の字、小の字の如く古文と楷書との間に相違の殆んどないものは問題とならぬが、其の楷書形にて類推の出來ぬ古文は、寧ろ小篆より遡つて攻究する方を捷徑とする。又小篆と古文との關係は楷書とそれとの間の關係よりも密接な點があるからである。

文字進歩の歴史的傾向よりすれば、小篆は古文よりも簡單なるべく、又楷書は小篆よりも簡單なるべきである。これは全體の上よりしてかやうに云ひうるも、特殊の材料、個々の事例を一々とり來たる時は例外となるものが少なくない。現に國の字の如きもその反對例證の一となる。けれどもこれは又別に文字の原則に、一方に簡單化せんとする傾向のあるに對し、字義の區別を立てる爲めに字畫を複雑にせんとする傾向があるに由るのである。殊更複雑に向はせるに非ずして或る目的を以て畫を附加するものである。それ故に古文が次ぎの時代に傳統せらるゝに當つて、必ずしも單純化せられるばかりでなく、他方には反對の傾向をとつて

反つて複雑に向はしむるものもあることに注意しなければならぬ。

#### その四、上代文字の統一期

支那上代文字の形の様式は、古銅器銘と龜甲獸骨文字との間に各差別が立てられる。而も後者龜板文中には、わけて象形そのまゝの文字が多くして、文字と云よりも繪であるかと疑はれるほどのものがある。これは字としてその初期のものたるを證するものであつて、古銅器銘の中にもその状態にあるものが多い。程度上の差はあつても、共に文字發達史上、その初期に在ることは疑ひない。案ふに文字の初期の形態は、全體に於て其の繪畫的なるの故を以て、字として整然たる統一的形式を具備して居ない。故に上代文字の形態に就いては次ぎの如きことが云へる。

上代文字は、その文字になり始めた最初の繪畫的要素をそのまゝで保存せる故、之に向つて文字としての統一的形式を求むることは出来ぬ。支那上古より先秦時代にかけての文字は即ちこれである。

かやうに推斷し得る。固より、象形文字は或る程度範圍まではその象形的典型を脱するとは出来ぬ。然し本來、實用上の要求によりて、自ら社會に作製せられた文字故、その當初の形式が時代の經過、推移と共に、時代なり社會なりの思潮に符合するやう變化し行くべきはあたりまへである。さなきだに文字は日常使用されつゝあるものなれば、日に増し漸次簡便になり、また他の便利な修飾を加へて更に分歧文字を作製すると云ふことは、必ずあり得べきことである。上古最も多く見る文字の一なる「壽」の字、「鹿」の字、「文」の字などが前述の如き徑路をとりて變遷し、遂に説文に見る如き形にて、兎も角一まづ統一せられて居り、又、虎の字、羊の字の如きも、同様に説文に見る小篆の形にて兎に角統一せられて居るのである。上古より先秦に至る長い時代の文字を、各字形について集め分類して見るに、その筆畫（形態の細部を示すに用ひられた線）の多様多種なることは實に豫想の外である。殊に春秋戰國時代の文字に於ては、國により地方によつて、相違して居る所がある。上古交通の未だ十分開けなかつた時代に文字の不統一なりしこと、各種各様の字體を用ひて居たことは當然のことで、交通の便のかなり開けた周の中葉以後とても決して文字の統一の秩序の

あつたと云ふことは認められぬ。たゞ漸次繪畫的痕跡を減少して行くと云ふ傾向が著しく見えた丈であつて、各字大同小異、さながら後の六朝時代の草書體を概觀したやうな状態であつた。これは晉に文字上の不統一のみでなく、根本は、周室の權威が漸次衰へて、天下は群雄割據の姿となり、列國の文物亦競うて勃興し、言論の自由、學術の興隆等、空前の盛況を呈するに至つた。その當時のことであれば、中原にその文字に統一ある典型の行はれると云ふやうなことは望み得べからざることである。此の故に(一)上古の字體の統一なかりし理由は、その形が未だ元始的であつた爲めである。(二)先秦時代に字體の統一なかりしは周室の權威地に墜ちて、天下を一統する能はざりしに由る。然るに次ぎの秦に至り、始皇の天下を統一し文物の歸一をはかりしことありて(西紀前二百年代、今より二千一百年前)以來、文字も亦茲に漸く混亂時代を脱し得て統一ある字體を見ることが出来るやうになつた。かやうに論じ來ると云ふと、先秦時代には常に全く文字は混亂に混亂を重ねてゐたやうに見られるかも知れぬが、之は程度問題である。然し先秦の古文は大體に於て未だ統一的の型を有しなかつたと云ふことが云へるのである。論者或は云ふ。周の中葉、宣王の時(西紀前

七百七十六年より七百三十六年に至る)の石鼓文(大篆)の字體があつて、文字の統一を示してゐるのではないかと。勿論これはある。若し之を他の周代金文の不統一なるに比較する時はよほど統一的典型があつて、よい資料となる。然し此の石鼓の傳説に就いては尙その時代の當否に就き研究の餘地があるものなれば、暫く自分は石鼓に見えた大篆からその字體統一を云々することは見合はして後の研究に譲りたい。

要するに上古以來の古代文字なる古文大篆は、その繪畫的なると、その所謂文字的たるを問はず、總べてそれらが秦の時になつて始めて統一的典型にて整理せられることとなつたのである。即ち上古以來、各文字に對して色々の多き字體のあつたものをすべて整理し、各字は唯一つの字體にて代表させることとし他は之を棄却してしまつたのである。これは非常なる英斷であつて、その之が實際の局にあつたものは宰相の李斯であると傳へられて居る。その整理統一の結果として見るに足るべきものは、秦篆一に又小篆と稱する字體の大成であつて、之が最も多く收録せられてゐるものは文獻上では說文解字十四卷である。又金石文の上にて多少は残つて居る。傳説によれば秦二世皇帝東巡の時に刻した文字であると傳ふる

所の嶧山刻石（西紀前二百〇九年）泰山刻石（西紀前二百〇九年）瑯邪臺刻石（西紀前二百〇九年）の銘の如きが石文中正にその代表的典型たるを示して居るものと思ふ。そのこまかい點に議論はあるにしても之を以て秦篆の殘缺遺字と見て假定するは不合理であるまいと思ふ。然し如何にせん此等石文のものは字數が甚だ少ない。それ故に説文に許慎が録する所のものを以て最も豊富なる又最も貴重な資料としなくてはならぬ。兎も角も、先秦のすべての文字が統一せられた時代は秦に在りと云つてよろしい。蓋しこれは時代の要求と、政策の必要とによれるものであらうけれども、又一つには戰國末各地方の字體がよほど統一的に近づいて來て居て、後より云へばそれが秦篆に酷似してゐたと云ふことも參酌する必要があるのである。されば決して秦の時前代ととび離れた字體を案出して新典型を天下に強ひんとしたものの如く考ふることは出來ないのである。次ぎに然らば秦篆統一前の文字の沿革と秦篆そのものとの比較は如何。今一例を「漁」「永」の兩字にとりて示して見よう。

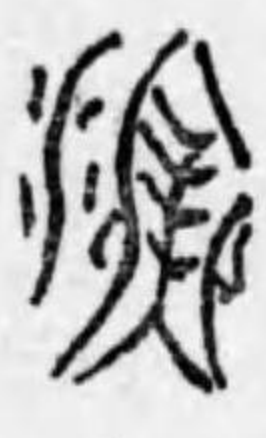
漁の字の古文（龜板文に見えたるもの）



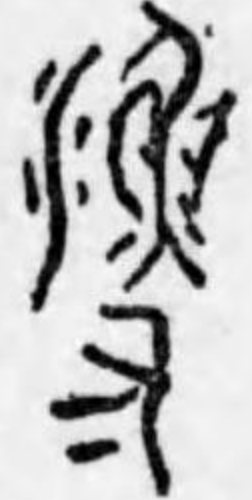
殷虛書契卷六の五十



殷虛書契卷七の十三



殷虛書契卷七の九



石鼓文



殷虛書契卷五の四十四

漁の字の小篆（説文）

支那の上代文字

𩺰

捕魚也从魚从水

𩺱

篆文、灑从魚

永の字の古文（金文）

𣶒

仲丁壺、金索

𣶓

姑馮句、古籀補

𣶔

匱公匜、鎔清館

𣶕

史賓師、積古齋

永の字の小篆（説文）

𣶖

「長也、象水至里之長。詩周南、江之永矣」の永の字これなり

かくの如く古文の時代にはすべて文字の體が一定せぬのみならず、右文左文すら一定し居らぬことがある。又その要素の繁簡宜しきを得てゐないものもある。それらをすべて統一したのが秦篆（小篆）である。されば秦篆は實に古代文字の時代を劃して居る劃期的な字體として甚だ重要なものである。以上を以て古文の統一期の大要となす。尙秦篆以下のもの、兩漢三國時代の文字即ち古隸、漢隸、八分等の字體の起源に就いてその歴史的關係が秦篆より直傳して來て居るか、又は秦篆を経ることなくして、先秦時代の古文より直ちに來て居るか。このことは字體史研究の上に甚だ興味ある問題であつて精密に論すべき方面がこれには多々ある。又、隸分の後を承けて發達し來たつた楷書の字體にあつてもこれ亦順序よりすれば隸分より來た筈であるが、然し必ずしもすべてがさうではなくして、中には古文より直傳のものでないかと思はれる楷書の字體さへもある。されば、隸分楷は大部分小篆から、一部

古文から来て居ると云つてもよろしいのである。詳細はこゝに省略する。

かやうに漢字を生きたる文字として観察研究し、之を古今の實際に照して見ると云ふと、その長い使用年月の間にはたしかに進歩のあとが歴然として目撃せられる。固より漢字は生物に非ざれば、之が態形中に有機的生命を認めることは出来ぬ。けれどもすべて文字は、言語の表識として符牒として實社會に讀書社會に實際使用せられる事に於て、生命があると云ひ得る。一字一字に就いては新陳代謝の行はれるは言語の場合と同じかるべきも、文字（漢字）全體としては漢字は古來尙看過すべからざる大勢力を有し大活力を有し上下三千年の間に著しい進歩の跡を認むることが出来るので、今茲に文字の進歩の結論を述ぶるに當つて、進歩そのものの概念に就きてその要を摘記しておく。即ち、

一、古來支那文字はこれを書き又は讀む上に經濟的となれること、これ漢字進歩の一要項である。印刷に附す場合のことは後に云ふ故これを略し、單に手書する場合の文字に就いて云ふ。文字は讀むときよりも書くときに、時間及び勞力の經濟的なるを以て進歩の一條件に

數ふべきである。國際關係の上より見て、その便利なりや否やのことは上代の文字に就いて云々すべからず、たゞ（一）書く上に又刻する上に手数を多くとることなく、而も（二）言語の表彰せるすべての意味又は意識せるすべての思想を細大漏らすことなく之を調節して字形に現はすことの出来る文字を以て進歩せる文字と呼ぶことが出来る。此の點に於て支那上代の文字は甚だ缺くる所があつたことは顯著である。併しこれは社會文化の程度の如何によりて常に支配せられる。上代社會には上代社會に適當なる書體が行はれ、そのたとひ煩はしき字體であつても之を煩はしいとなさず、また不精密な意のみしか現はすことの出来ないものにも敢て之が不足を感じないと云ふことがある。支那上古の繪畫的の文字が此の點に於て如何に不經濟的なるかは贅言を俟たぬ。しかしその漸く文化がすすみ、社會が激忙の状態を呈するに至れば勢ひ時間と勞力とを惜しむに至るべく、従つてなるべく經濟的の形式をとる傾きになるは事實の證明せるところである。即ち字畫そのものが概して書き易い形になるのである。若し今日でも草書が普及的のものなればそれになつてもよろしい理窟である。然し實際に於て草書は書く上には經濟的で都合がよろしいが、讀む上には不都合、不便の



多き文字である。それ故、楷書を以て今日最も普及的なる且つ經濟的なるものとなすのである。而もその楷書の範圍内にも更になるべくは略形に移らうとして居る傾きが見られるのである。古來字形の變化にこの形跡の明かなるは漢字進歩中最も注目すべきところである。

二、漢字は又特種の發達を許して全體としての不備のところを補つて行きつゝあること。此れは日本なり、安南なり、廣東なり、それぞれ地方的にその土地に合ふやうな新字（特種文字）が出来て來てゐる。人力車を俾と書く如き即ちその發達の一步を下するに足る材料である。若しこれが支那本土の文字のみに據りその他の地方の新作が許されぬとすれば甚だ不自由不都合なる次第である。このことは言語上の方言が諸地方に分岐して來るとよく似て居る。但し文字は方言の如く細かくに地方によつて分れることはないのである。又社會の相違に従つて諸種の文字が新製せられ、近くは株式仲間にて立派なる屋號を示せる特種文字の製せられたるがあり、又學生間の筆記には銘々工夫をこらしたる特種文字がある。而してその筆記文字中には學生相互間に公認せられて居るものがある。歴史を「厂史」となし、直徑を「直徑」となす如き一例である。かくの如く漢字は各方面に這入つて考へて見ると云ふと、

それぞれ適當に利用せられ、そして一般的の漢字にて不足不都合な點のあるところは常に補はれつゝあるを見る。これ漢字進歩の第二である。

三、需要字數減退の傾向のあること。漢字は象形本位の文字なればとて無限にその數の増加することを許さぬ。これは同音文字にて新語、新概念をうつす工夫のこらされる爲めと、二字三字に組合せて熟字として一新語をうつすやうにする爲めと、その爲め新字を殊更作することは稀であると云ふ傾向があるのみならず、舊來の文字と雖も或る専門家の間の外、一般に用途の少ない文字は漸次世間より棄てられて行き、その結果、日用文字は殊の外少數のもので間に合つて行くと云ふ傾向になつて來た。そのうちにも使用度數の一等の部類に屬すべきものが一千餘字にて足りると云ふ現象が現はれるに至つた。これは甚だ興味ある問題である。二等字三等字を含むとも三千字を多く出でないのである。教育ある社會に於ても、六千字即ち康熙字典所録の文字の十分の一にて足りると云ふ輓近の傾向を示して來た。これは漢字進歩の條件として第三に數ふべき事項である。字數減退のことは、文字上の進歩と云ふよりも之を用ふる社會の進歩と云ふを適當となすに似たりと雖も、思想、言語の表彰に不

足不都合のない限り、少數の記號にて用を辨じ得る傾きになつて來たのは、文字實用の上より見て時宜に適したことである。

四、漢字が文明的印刷に適合するに至つたこと。文字は時代と共に進むものなる以上は、各時代の文房具と共にその現はれかたが違つて來なくてはならぬ。鐵筆（刀）にて竹簡に刻せられて居た時代から、進んで毛筆の世となり、茲に刻鏤の状態を脱して墨書の時代となり、更に毛筆の域を脱してペン書きの世となり、又活版の時代となるに至つた。然らば鐵筆時代、毛筆時代、ペン時代、活字時代と云ふ順序で字形その者も亦顯著な進歩のあとが見られなくてはならぬ。今や印刷の方法は愈々益々手書の範圍を侵し來たつて、漢字のタイプライターまでもが發明せられ、年一年とその機械による印刷が盛んになつた。漢字がかくの如き機械的文明の利器に應用せられるに至つたのは一つは漢字タイプライターの力なりとは云へ、又漢字の進歩の一つとして數へても差支ないことと信ずる。此の際、漢字の新面目を益々發揮せしめ、今一層その日用文字の光りを輝かせ、日滿華共通のものを力説し、その上に字畫は公認されたる略字を代用して文字をやさしくし、大切なる漢字を以て、日常の用を十分に

且つ容易に足させると云ふやうにすることは、益々漢字本來の面目に叶ふことだと思ふのである。

要するに現代の漢字の使命は愈々重く、一大飛躍をなすべき時に來た。否、現代及び將來に於て更に發展せしめ益々社會の實際に適合せしめて行くべき運命にある。漢字は實社會から廢棄せられることは斷じてないのだ。飽くまでも世の爲めに利便を提供するものであらねばならぬ。又今日の漢字は古代の漢字が誤り誤りて遂に卑俗の極現代の俗形となり了りたるものなりと云ふやうに、古代崇拜をなすものがあるが、此は古典を崇拜するの弊から來てゐるので、文字までも古尊今卑にて律しようとするものである。古今のあひだ時には六朝の如く字體の混亂せし時代もないではないが、大體に於て上下三千年間進歩的の傾向を取つて來たものである。しかるにその字形が含蓄ある特徴を有してゐるところから、世人これが調査研究を煩はしいものとなしとかく棄て、顧みない。吾人は固より漢字を以て理想的文字と主張するのではない。その東亞に於ける神々しき存續の跡が果して文化發達の理に照らし妨げをなしてゐるや否やに就いて聊か愚見の一端を述べたのである。

## その五、説文

次に説文のことを簡単に述べておく。説文とは説文解字の略字である。説文解字とは文(單一要素の文字)を説き、字(複合せられたる文字)を解剖するの義で、後漢時代の文字教科書の題號と云つたわけである。

## 説文の著者

説文の著者は許慎(字は叔重)と云ひ、後漢、和帝、安帝の時の人、官、太尉、祭酒に至る。性、篤實、五經の造詣深く、文字學の鼻祖として仰がれて居る。周秦の時代は未だ文字學の興隆なかりしも、始皇帝の焚書のことありし時代を承けた漢に在つては、文字研究殊に古文の誦讀と云ふことが時代の要求であつた。許慎が其の晩年に説文解字(十四卷)を著したのは時代の必要に逼られた爲めとは云へ、支那文獻學上に樹立したその功績は實に偉大なものとして稱するに足る。日本に於ても許慎祭を上野説文會にて催したことがあるし、支那でも清朝末に之を文廟で併せ祀ることとなつたのは、決して偶然ではない。

## 説文の年代と内容

年代は後漢の建光元年九月二十日に出來たので、その事は同書の序文に見えて居る。丁度安帝の十五年歲次辛酉、我が景行天皇の五十一年、今日より大體一千八百年前で、西紀一百二十一年(羅馬帝國全盛時代)に當る。當時の原本が今日残つて居れば結構此の上もないことであるが、遺憾ながら轉寫、複刻を重ねたものばかりで、従つてその間に原本相違の點のあることは豫め含みおかなくてはならぬ。内容に就いては、天地、鬼神、山川、草木、鳥獸、蟲魚、雜物、奇怪、王制、禮儀、世間人事の各方面に互り、部を分つこと五百四十、之を十四篇となし、九千三百五十三字を説き、重文一千一百六十三、解説用文字十三萬三千四百四十一字と算せられて居る。

## 解説の方法

許慎は篆篆即小篆を材料に採つて之を基礎の字形となし、之に統一ある解釋法を試みた。その方法は、有名な六書の方法である。象形、指事、會意、諧聲(造字上の範疇)、轉注、假借(用法上の範疇)が即ちそれである。もと説文は兒童の讀み物として作られたものであつて、

子游の急就篇と共に當時の俗書であつたらしい。然し一千八百年後の今日から見ると云ふと奇字あり、廢字あり、奇古尋常でない。のみならず、後世の日用字、祇(ケン)、ネストリア教の神)、祚(ツ)、珈(カ、婦人の首飾)、瓊(セン、玉盃)、琲(ハイ、珠五百枚)、芙、蔬、茗、藏、醜の如き、また售、喫、些、蹉、跎、蹙などの字は何れも當時まだ出来てゐなかつた爲めに載せられてゐない。故に今日の實用書としては勿論適切でない。然し古代文字の研究上には決して看過すべからざる寶典である。固より幼稚な觀察法があり、科學的でない點もある。之等は今日の文字學、史學、考古學の知識で補つて行けば差支ない。要は説文は支那文字源流の一資料としての價值があるに過ぎぬ。支那趣味の人々又は支那人の研究の形に嵌つてゐる人は非常に説文を賞讃して完璧となす傾きがある。併しながら文字の研究は説文を以て終極の目的とするに非ずして、よろしく説文より入つて説文を超絶するところがなくてはならぬ。説文の爲めに捉はれた研究では眞の文字研究の道には叶はないのである。

論者或は云ふ、説文學は死學なりと、是れ或は然らん。されど斯學の死活如何は、研究者の著眼と、研究方法とに據ることである。説文を批判的に研究して、一方には、古の眞理を

考覈熟慮し、他方には、それによつて新しい法則なり事實なりを發見することも不可能のことではない。説文が編纂せられてより康熙字典の編纂に至る約一千五百年間には、四萬七千の文字が生産せられ、その結果字典には廢字を含み、五萬六千餘字の大數が注明せられて居る。今、現行日用字はその十分の一に過ぎぬが、兎も角後世字の淵源する所一としてその要素を説文に發して居ないものはない。更に遡れば周代の文字所謂鐘鼎古銅器の銘字、並に獸骨龜甲文字にまでも關係があるのである。

#### 四、西方の上代文字

##### その一、埃及文字

一

支那の文字が本來、象形起源なることはその根本材料によつて調べて見ると、意外にたく

さん見出される。直接、動詞や形容詞又は助辭の如く見えてゐる言語をうつせる文字にしても、其の古形を見る時は別にその元始的の根本義を有し而してその字が動詞や形容詞などに用ひられる時の意味は、その轉義に過ぎぬ、否、その同音語假借に過ぎぬと云ふやうなことになる。例へば、支那上代の語にて「往來亡災」と云へる田獵語があるが、その「往來」の二字に就いて見るに「往」の字、「來」の字の兩字は共に樹木の象形であるのである。かやうに動詞の義が、たとひ無形の義であらうとも、その一字一字の原義に於ては、その象形起源の明かなるものが少なくないのである。

今埃及文字に就て見るに、同じくその象形的文字が繪文字としての形式を具へてゐるが、それが多くの場合に單に音の價あたしか有してゐない。所謂音文字と同様なわけで、象形の動物又は波狀又は手や口などの形で表はされてゐても、多くは或る音の表彰にあてられたものに過ぎぬのである。しかし元來はその描寫した形が即ちその字の意味に一致してゐたのである。それで埃及文字本來の字形は云ふまでもなく象形であつて、支那のそれよりもその種類並びに數に於て多い。その繁簡の度は、或るものは支那のものよりも繁しく、或るものは簡な

るものもある。その形には象もあれば虎もあり、太陽もあれば水もある。又人間の種々なる容姿をうつした象形がある。その他器物類の如き又家屋に關したのものもある。又人體の一部分をのみとりて文字となしたのものもある。勿論支那と同じやうに或る形の文字を二三結合させて色々の會意文字を造ることもある。總じて其の埃及文字の要素となるべき文字は全體で六百二十ある。尙これがそれ／＼結合字を形成するときは多少變化したる形をとるのであるが、大體に於て六百二十字と見ておいて差支はない。その各文字の状態は如何かと云ふに、その一例を示せば次ぎの如きものである。



發音 L



發音 A



發音 N



發音 B



發音 U



發音 A



發音 F



發音 K

次にこれらの文字の書き現はしかたに就きてその方法は如何にしたかを調べて見るに、埃及では細く鋭利に尖端を作りたる葦のペンを用ひてゐたのである。支那では古文は一概に漆で蝌蚪状の文字に書かれてゐたやうに云はれてゐるが、事實を調べて見ると、餘程鋭き小刀（彫刻用）で、獸骨や龜甲などの面に刻してゐたものである。されば埃及のも支那のも共に随分微細な點まで描寫をしようと思へば出來たものであつた。實際埃及文字はよく局部のところまでその描寫法が緻密に現はれてゐる。支那の龜板文なども局部まで描かれることも随分あるけれども、支那の方は同じく繪であつても、よほど自由である。一つの概念を示すために唯ほんのそのスケッチに過ぎぬ位で形態容姿の表彰が如何にも不規律であり、上代

のものは嚴重な型に囚はれてゐない。之に反して、埃及の方のはコンパスや其の他用器畫の道具を用ひて畫いたやうな趣きがある。つまり埃及文字の方は、整頓して居て細部に手が届いてゐるが、筆の妙味と云ふ方には缺けてゐる。之に反して支那の方のは字が象形としては整一でない。細部の點は埃及のそれ程に手が届いてゐないが、併しよくその要領を描寫する點に於て、又その筆の妙味を形姿の上に表はす點に於て特徴があるのである。支那は上代、筆を用ひる前には小刀で刻してゐたのであるが、その刀を用ひるに當つても、よほど埃及式の手法とは其の趣きを異にし、一見して兩者の特色は之を察することが出來る程である。發音の上より見ても埃及の一音式なるに對し支那のは一綴音式であるゆゑ異なつてゐるのであるが、象形の表彰の上、殊にその書きぶりの上より見てもたしかにその間に相違點のあることを認むることが出來るのである。

二

支那文字の研究からすると埃及文字の方面はその地理上の距離から云つても又言語上の關係から云つても非常に遠い。歴史上の關係からは學者によつては支那文字と埃及文字との間

に因果關係、本末關係があるもののやうに主張するものもあるが、然し今日のところ未だ支  
 埃兩國の文字の間にたしかな脈絡の通じてゐると云ふ證明はついて居ないのである。空に、  
 埃及文字と云つても始めての讀者諸君には趣味が起らないかも知れぬ。今一例を固有名詞を  
 現はしたものに採つて擧げて見ると左の如くである。



Sii-kheb

Su-kheb

Ra-nebtefa

Ra-wben

ネブテファ王

ウベン王

此の例に見られる通り埃及文字の古代の形は繪本位である。但しその形のうちに楕圓形で  
 多くの文字を取圍んでゐる線があるがこれは文字ではなく、その固有名詞たることを指示し

てゐるものである。

支那の文字の極めて古い時代の状態は云ふまでもなく繪畫の状態を脱しないのであるが、  
 或る點までは森羅萬象中のものの象形であるから一致せるものがあるのである。これはその  
 管である。鳥なら鳥をうつすことにすると鳥の形式と云ふものは多くは大體一致してゐる。  
 鳥であつて獸類の如く描かれてゐるものはない。又毛物にして鳥の如く描かれるものもない。  
 鳥はどこ迄も鳥の形に畫かれる。支那に鳥の字が普通の鳥の字とフルトリの雀とがあり、更  
 に鶴の字の扁にある所の雀の字があり、又獲の字の旁にある隻の字、或はまたケリカモの鳥の  
 字があるとか、鳥の字に最もよく似た鳥の字があり、或は意味は忘れられてゐるが甲乙丙丁  
 の字が又鳥の象形で出来たもので極めて古い時代殷あたりの時代の象形を見ると矢張り鳥の  
 形をしてゐる。かやうに鳥にも色々あるが、埃及に在りても同様で埃及の鳥の字は支那に負  
 けない位ある。而もその鳥の姿の描かれてゐる方向までが同じく左方に向つてゐるのである。  
 右手を以て鳥を描くときはその向きかたが自ら左方に向くのである。若し右方に向くやうに  
 描かうとすると甚だ無理がある。埃及であつても同様で、右手で描く以上は、矢張り同じ方向

に出来あがるのである。足を描くにしても埃及人は之を左方向きに書き、蛇を畫くにしても同様である。その象形に左右のないものならば兎に角、殆んどその左右のあるものは左向きになるのである。

埃及文字は右に示したやうに几張面ないつも楷書の形でのみ現はれてゐるかと思ふと決してさうでない。支那文字と同様に時代によつて相違がある。矢張り最初は繪畫本位であるが時代を経るに従ひ行草の體となり、畫も次第に減じて來て、遂に鳥の形からAの字が出でたり、波の形からNの字が出たり、ライオンの形からLの字が出ると云ふ程度に迄も進化して來るのである。この點から云ふと、たとひ漢字は最初の起源が鳥なら鳥の實物に由つてゐるとしても、その古文篆書、隸楷行草すべてを通じて考へてもAの字の如きものまでには進んで來ない。精々草體にしてもその略體の程度が知れてゐる。ライオンの獅子の獅の字の如きはテンド最初から存してゐない。これは波斯地方から來たもので、もと支那にはゐなかつた。もと原産地は西域にあると云ひ傳へられてゐる。爾雅には獅子のことを狻猊と云ふ二字で現はされてゐる。その狻猊にしても獅にしても之を如何に略してもLの字の程にはならない。

支那の文字はいかに略されても程度がきまつてゐる。草體略體の形が精一パイの處である。ところが埃及では、後世の文字の程度迄にはなり得なかつたが、その盛んな王朝時代には十分進歩し、東歐南歐の地方に入るに及んで更に著しき進歩を遂げたものと假定せられるのである。埃及文字そのものの研究はあまりに縁が遠きに失するやうだが實は今日の時勢はこれらの文字も又アッシリア文字もすべて有名なもの、ひとわたり調査に觸れておく必要があるので一言しておく次第である。

## その二、支那文字の西方起源説に就いて

### 一

説文は字源の形を知り又その組織構成を知る上に重要な書物で、此の書物のあるが爲めに、支那の文字研究は莫大な利益を得てゐるのである。今から千八百年前に此の寶典が備はつてゐたことは文字をしらべる吾々には非常な幸せである。而して説文に含まれてゐる文字の形式及び構造の大體は秦時代の篆書を取つてゐること固よりである。書物は今より一千八百年



前に編纂せられたとしても、その内容の書體殊にその一字一字掲げられてゐる文字の體は更に四五百年も昔の體である。即ち紀元前二世紀あたりの文字である。勿論秦代となつて急激に作つたわけではない。多く周代中葉頃に支那各地方に行はれてゐたものうち自ら整齊せる字體が秦の時に統一せられて一定の字體に標準がおかれたと云ふに過ぎぬのである。

然るにその説文のうちには晉に秦篆（標準體）なるものを掲げてゐるばかりでなく時々古文と云つて支那最古の字體を示してゐる。これは説文の編纂時代から云ふと、七八百年も遡つた時代のものであつて、時には殷とか初周のものもあるべく又時には周の中葉より春秋時代のものをも含んでゐるのである。されば説文の内容はその取扱へる字體はよほど古い時代のものを取扱つてゐるものと云つてよろしい。漢時代の字體は所謂漢隸で隸書が行はれてゐたのである。編者の許慎はその當時の隸書に見る字體は全然棄てて顧みず、單に上述の古い字體に就いてのみ述べてゐるのである。而してその根本の支那文字の起源に就いては、所謂黃帝時代に蒼頡が六義の方法を心得てゐて鳥獸の足跡を觀て思ひ付き案出したものだと云ふやうな傳説的事を述べてゐるに過ぎぬ。これは説文の叙に明示せられてあるので判る。併し

これは事實をしらべて書いたものとは勿論思はれない。文字傳説は各國に荒唐無稽のことが多い。支那でも文字を自然界の一現象からとつたと云ふ民族的傳説を後世紹介してゐるに過ぎぬのである。然るに十九世紀になつて西人で支那の文明を研究するものが現はれ、佛人テリアン・ル・ラクウペリの如き又その他の學者が東洋の文明は東洋獨發のものに非ずして西方起源のものなりと説き始むるに至り、その側の論者は、天文曆數上の知識を始め上代の支那文明を説明し得る文化史上の諸現象が今のイラン、イラクのユウフラチス、チグリス兩河の流域に上古國をなせし大國（今より四五千年前の故國）アツシリア、バビロニア國の方面より東漸したるものなりとのことを唱ふるに至つた。黃帝時代の文化は多く西方文明の餘波に過ぎぬのものとして萬事を論ずるに至つた。ラクウペリ著「支那民族以前の支那文明」にこのことは明示せられてある。この説は西人の間には固より東洋でも之を信するもの又は其の説を非としないものが少なからずあるに至つた。甚だしきは中等教育の東洋史教科書などの中に之を是認してゐる記事を見るのである。

かやうな次第である故、支那の文字が西方起源のものであると云ふやうに見られるのは無

理からぬことであるのみならず、鐘鼎古文の字體をひろく集めて見たり又説文そのものうちから古文を蒐めて見ると云ふと所謂アツシリア、バビロニアの字體の中には一點一畫の描寫法で支那のそれに似て居るものがある。西人は單に文字の西方起源論を説くに説文ばかりと云ふやうな薄弱な論據で主張してゐるものではないかも知れぬが、事實東西兩者の間に類似を強ひて見出さうとするには先づ説文中の古文を蒐集して見るのが一番西方アツシリア文字の形に似たものを見出し得る所似である。

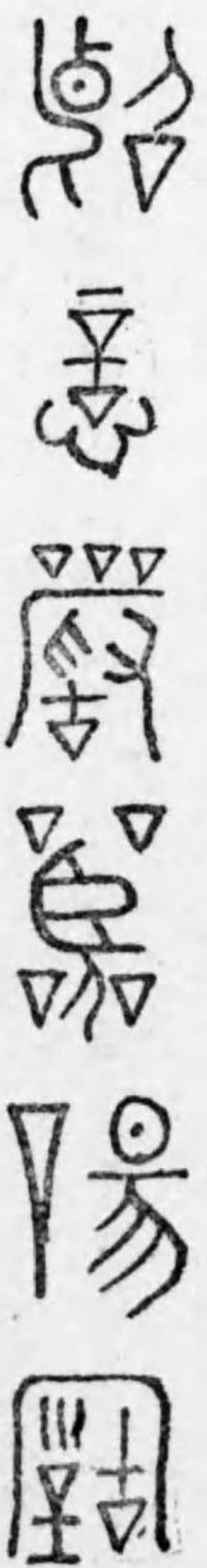
しかし説文の古文が事實上周代に行はれ或は周初以前に行はれてゐた眞の古文字の體を其のまゝ現はしてゐるものであるかどうかは疑問である。古代文字の字體としての價値は説文に掲げられた古文體よりも鐘鼎なり彝敦なり然るべき精確な眞の古銅器の銘にあるところの古文體の方が廻かに貴いのである。説文を絶對視して説文に在ることを理由として立論するときは時として非常な誤りに陥ることがある。これは佛人ラクウペリが説文を證據としてゐると云ふことを云ふのではない。同著者は説文の理由も何も根據は擧げてゐない。唯多くの他の文化と共に文字も亦西方より來たと云つてゐるのである。

## 二

支那人は文字を創造する力がないとか、文字は必ずや西方から東漸せられたものに外ならぬと云ふやうな側の説は先づ上述の如くである。然し今日未だ埃及文字から來たと云ふ説は聞かないのである。たまにはその想像説を出すものもあるがしかし強ひて單語上に偶然一致せるものを探し出して來るならば二十や三十のものは一致した形で見出されないこともない。しかし天然自然界のもの象形又は人體部分の象形の如き偶然に一致したもののあるは敢て珍とするに足りない。かゝる偶然の一致を以て史的關係を云々するは大局を知らざるものする所であつて、學術として取扱ふには今少し慎重の態度に出でなければならぬのである。つまり歴史的關係はアツシリア方面にも、又埃及方面にもないと云ふ方が今日の研究程度では安全である。今後その方面の資料なり證左なりが續出して來て大局の文明推移の有様が明かになつてくる時代があれば兎に角、今日は未だかやうなことを立證するはむづかしいのである。

然らば説文のうちに西方の文字にまちがひ易い様な形をした古文があると云ふは如何なる

文字であるか。今其の例を少しく列挙して見よう。



此の種の古文の掲載せられたものは少なくない。固より説文に示した古文體は此の種の外の外にも亦いろいろある。外のもは西方文字と聯絡のある點を見出ださない故ここに殊更省略したのである。即ち強ひて支那文字とアッシリア方面の文字との聯絡を見んと欲すればかゝる字體に就いて先づ研究して見る必要がある。之を調べるには筆の研究が先づ第一になされなくてはならぬ。何となれば筆又はその書く所のもの、その道具次第で字の線がいかがやうとも現はれるからである。アッシリア文字を書く時の筆は方形の長い筆である。謂はば四角の箸の如きもので、書くに紙はなく、泥土に痕をつけて行つたものである。然るに支那に於てはかやうな方法は考へられなかつたやうである。刀を以て刻法をとつたのが最初であつたらしい。これも元始状態に於いてはいかがであつたかはわからないのである。若し支那

においても角箸の如きものを用ひたとしたならば、前記の古文などに見る小圓形のものとは出來ないわけである。事實アッシリア文字にはかかる圓形のものとは出來ないから現はれてもゐないのである。のみならず、東西兩文字の上に現はれたすべての意匠が異なつてゐる。第一曲線を巧に用ひて文字の結體となしてゐることはアッシリア文字には見えない點である。又文字の縦行横行關係も彼此の間にある大なる相違の點である。龜板文にも時として横行なるものがあるがその趣きが彼のとは違つてゐる。とにかくすべての點で相違せるに單に▽の如き形した部分のみが漸くにしてアッシリア、バビロニアの所謂楔形(キューネイ・フォーム)に似てゐると云ふまでである。これを除いて他に東西兩者の間に類似した形の上の比較は出來ないのである。而もこの楔形の體が多くの古文或は全古文に現はれてゐるか云ふと、説文所録文字中的一部分のものに過ぎないのである。而も又説文以外の周代の眞の鐘鼎彝器に就いて考へて見るにかゝる楔形のものとは少なくして殆んど出て來ないのである。されば説文に見えたこれらの古文形は支那上代の古文を代表してゐるものとは勿論思はれないのである。従つてそれが支那文字の起源を説明してゐるやうな貴重な資料とも考へられないのである。

さればいかに説文の古文中に西方の文字に偶々一致した楔形ものが出て来ようとも之を以て支那文字が西方から来た文字である如く説くことは、全く浮いた論となつてしまふのである。次に然らば西方アッシリア、バビロニア文字とは如何なる形の文字なるか、これに就いて述べて見よう。

### その三、アッシリア、バビロニア文字

西方亞細亞（チグリス、ユーフラチス河の流域）に、今より約七千五百年前に既に刻文として楔形文字が現はれてゐたことは史家の遺物遺跡研究によつて明かなことである。同地は最古のバビロン帝國の故地であつて、その最初の王はサルゴンである。その王の時代に既に立派なる文字の使用があつて、それが刻文として種々のものに遺つて居る。その刻文の研究によれば、サルゴン王はもとセミティック種族である。早い時代に西方から移住して来たのである。彼は多くの同族を移住民として伴つて来てゐたのであるが、更に又他の古い移住民と接觸し混じてゐた。彼等は高度の文明を他より輸入して上代に一大光明を放つてゐたもの

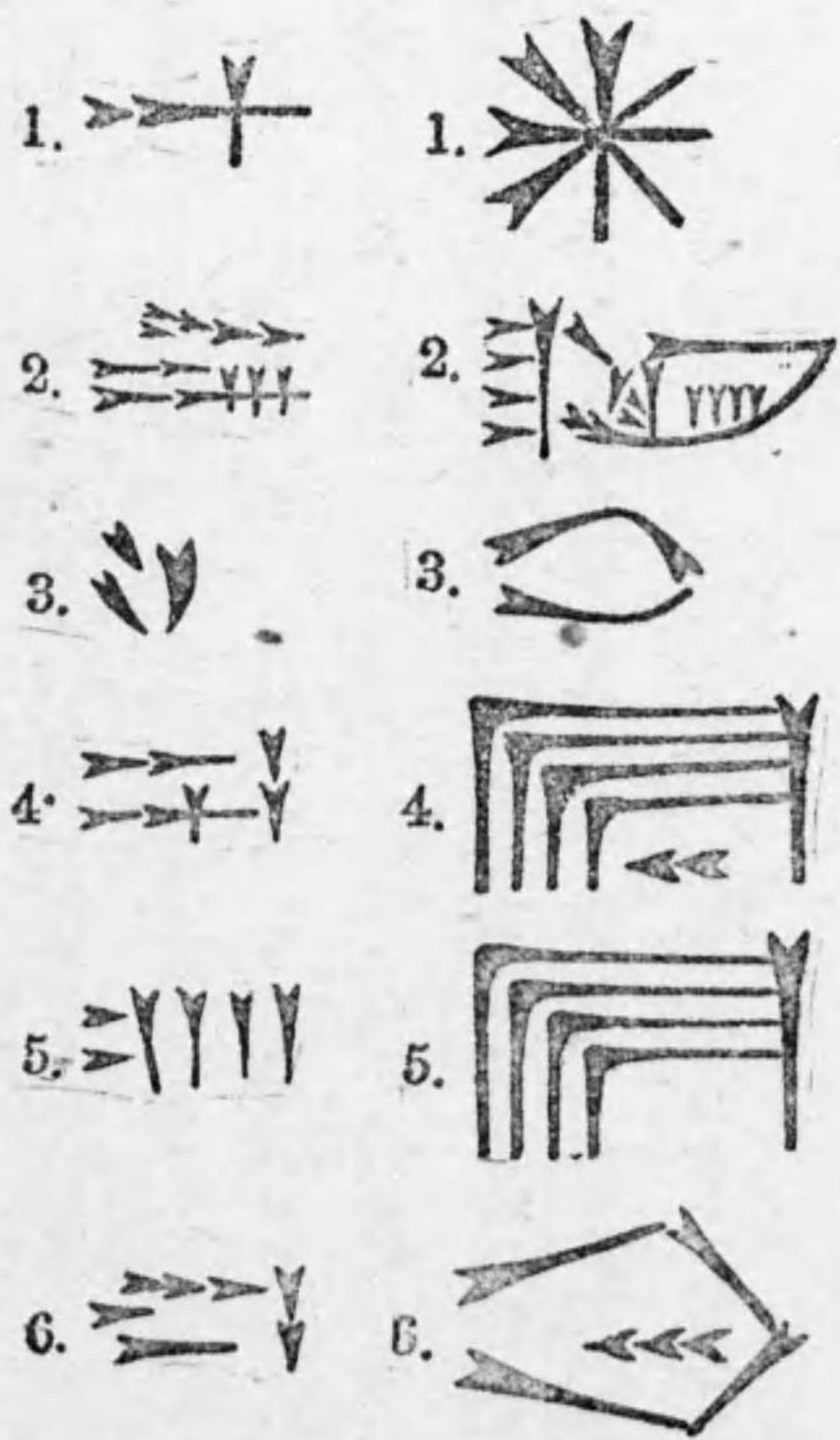
であるが、其の楔形文字は始めスメル種族から學び其のスメル人の楔形組織を自國に受け入れたと云はれてゐる。併し其の遺文によれば自分共の要求に合ふやうに之を變へて使つてゐた。言語も亦スメル文字と共に入つて来た。これは日本に支那文字の入つて来た時それと共に漢語も一緒に入つて来たのに似てゐる。爲めに言語上はセミティック語とスメル語と両者が併行して使はれてゐた。その時代は實に長かつた。その間に一が他に影響をした。宛も日本に和漢混淆の語が出来たやうにその國に於ても鴉式の語が次第に多くなつて来た。單語は漸次外來語の増加を見るに至つた。而も最後には言語としてはセミティック語が標準の普通語となるに至つた。しかしスメル語の方も全然亡びたのではなく文章語として記録刻文の上には尙その生命を保つてゐたのである。

註 古代バビロニアはその後外敵の侵入あり、西紀前一八〇〇年頃には北方の一部に追ひ詰められ、次いでアッシリア國が分離し西紀前六〇六年の頃はアッシリア王ナボロニアの勢力隆盛にして遂にこれが新バビロニア國を立つるに至つた。有名なネブカトネザルはその次ぎの王である。その當時の文字は皆楔形文字で刻されてゐる。しかし簡便法を貴ぶのと長い時代の使用により、漸次變化し後にはその結體の違つたものとなつた。

古代バビロニアの楔形文字は後になるとその字畫がよほど變化して來てゐる。總じてアツシリア文字及び新バビロニア文字の形は、古代バビロニア文字の簡單になつた形である。而してアツシリア文字は新バビロニアのそれと全然同一かと云ふにさうでない。左に三者の比較を示して見よう。

古代バビロニア

アツシリア



新バビロニア



右のうち最初の(1)は星形にして神の義、古代バビロニア文字よりアツシリア形となるを示す。(2)は刀形にして王の義、これ亦形の上に變化あり。(3)は日の意、日數を表すに用ふ。(4)は門の意。(5)は家の義。(6)は月の義(一月二月三月の月の意に用ふ)。その形の象形的起源はかくの如くして上代に遡り得るものもあるが又其の最初の出發に於て其の何に象りたるかの明かでないものもある。又古代バビロニア時代にその文義が例へば(1)に於て神の義であっても、更に古に遡リスマル時代の原義は如何と云ふに「天」のことを意味してゐたのである。必ずしも本來の意味がそのまま傳つて來てゐるもの許りとは定まらないのである。

アツシリア、バビロニア文字はかくの如くその意味もその形も起源以來、種々の變化を経て來てゐるが、その最初の形が繪から出てゐる事はこれによつて推測せられるのである。而

もその繪文字なるものは獨り星形や刀形のみと限らず、總て此の式の出發點を有してゐた文字の多いことがわかる。後のバビロニアの楔形文字になると殆んど支那の楷書又は草書の如くになつてその本來の形からはよほど遠くなつてゐるが、若しその元がスメル時代のものに關係がつくものであるならばその比較研究が出来るわけである。吾人はバビロニア文字の原刻を見るたびにその或る何物かの象形に關係のあるものならんとの感を深くするのである。

## 五、結 語

文字及び言語は國民の福利増進の目的に叶ふやうなす可きものである。わけて文字は言語を寫す爲めの方便に過ぎぬものであるから、出来るだけ國民の性情に叶ひ國民の習慣に合つたものでなくてはならぬ。國運の發展に伴つて實用上至便な文字であることが文字の役目として最も大切な點である。國家の進歩發展の爲めから云へば文字は從屬的のものであつて、文字は國家のために存立すべきものである。文字は國家のためには如何やうになりともその

一般國民の便とするところの道を取つて進まなくてはならぬのである。決して文字の爲めに國家の進運が阻害せられ、妨害せられるやうなことがあつてはならぬ。國家の存立を眼目とする限り文字が累を國家に及ぼすことは有り得べからざることである。併し若し國家にして文字のために害毒を受けることがあるとしたならば既にその國の文字なるものはたしかに其の國民のために濫用せられてゐるのである。だからと云つて文字には含蓄の多い構造を有しその生ひ立と永い傳統の間に輕視出來ぬものを有してゐる點は認むべきである。

今之を世界の大文字國に就いて見るに、アツシリアにせよ、埃及にせよ、其の王朝の衰頽期とか滅亡期とかが文字中毒のために蔽はれてゐたとは思はれぬ。然るに支那では如何かと云ふに、古來三四千年の歴史は幾度かその王朝を代へてゐるが、その間に唯古の尙ぶ可きことをのみ知らしめ、文化の上の事物は凡て來歴古事を尊重して推獎するの習慣がある。そこで文化史の大なる中心の一つたる文字が又頗る重大なる意味を有することになつてゐる。三四千年間自然に養ひ來たつた文字上の趣味はたしかに支那國民全體の上に蔽ひひろがるに至つた。假令無教育の土民の間にあつても、その各々文字を讀んだり意味をとつたりすること

は出来ぬにしても、その文字を尊重することは知つてゐる。文字は神様同様に或は神に次いで尊ぶべきものと思つてゐる位である。蓋し萬世支那民族を統一し古今を通じて悖らぬものは、第一、儒教の教理、第二、文字の統一が即ちこれである。戦争があり、王朝の轉覆があり、國はいかやうに變ずるとも唯變らぬものは此の儒教と文字との二者である。支那國民總數のうちの幾割が儒教と文字とを眞に理解しにゐるか否かは明かでないが、兎に角、文字が政治上の力以上に抜く可からざる力を以て永い年代の間を押へてゐることを見るのである。文字の力は實に恐ろしい。ここに於て、文字愛と云ふものは確かに支那の國民性の一つを形成するに至つてゐるのである。道路に見る字の書かれた紙屑は、その文字を尊ぶの精神から必ず之を拾うて「惜字塔」に納めて焼く。この一事によつて見ても文字尊重の思想が國民性として深く國民の腦裏に入つて居ることを見出すのである。

自分は先年支那山東省古の齊魯の地を親しく踏査して、文字上の觀察を試みて見た。文字を書としてその實地書かれてゐる筆蹟を見ることに注意を拂つてゐた外、尙風俗として文字が如何に國民間に遇せられてゐるか、又美術上に文字が如何に利用せられてゐるか、道徳上

に文字がいかに役立たされてゐるか、又歴史上の遺物として文字が如何に残されてゐるか、また趣味の上に文字がいかに取扱はれてゐるか等の點をいろ／＼と探ぐつて見たいと思つた。さうした眼を以て齊魯の地をあるいて見ると、文字なるもののみ問題ではあるが、頗る興味のある觀察が出来るのである。日本でも文字と云へば、之を西洋の諸國に比べると餘程問題になる點があるが之を支那に比べるときは日本の文字は支那に於けるほどやかましくはない。蓋し日本は西洋と同じく、言語本位の國であつて語に重きを置く。されど文字のことも少なからず深い關心を持つてゐる。然るに支那になると、全然文字が本位となつてゐる。日本では言葉の統一をはかり國語の普及を計るのを眼目となし、文字は統一を期するにしても從屬的關係になる。支那は之と反對で文字の統一をはかり、文字の普及を計るを以て眼目となすのである。これは既に過去の歴史の證明するところでも明白である。此のことは山東省各地の故都を視察するにつけてもその點が明白に見られた。家々の檐端のきばに掲げられてゐる門聯を見るにつけてもその文字をいかに國民が尊重してゐるかがわかるのである。門聯の文字は南北各地到るところ手書せられた文字のうちで、最も明白に又最も趣味多く又最も統一

的に現はれてゐる。書籍、新聞等の文字の形の上に統一のあるのは勿論だが、此の聯の句に統一ある文字を見ることは面白いことである。

## 初等漢字の字源(一)

### 一、文字の知識は字源から

日本では、例へば文字の教へ方に就いて見てみるに、おきまりの、日、月、山、水がそれぞれその形からきた象形文字であるといふこと以上に一步も進んでゐないのである、明の字の如きもその起源が窓の形と月光を示す月の配合から來て居るといふ方の事實は説明せず、唯日と月との取合はせであるといつた在來の間違つた考へを襲踏するだけだ。それ以上本當の事實に即した研究に進まんとする者を見ないのである。

支那の文字と云へば、人も知る如く漢字と云ふ固苦しい呼び名のせゐか、いつも骨董視せらるゝだけで、多少とも之を生かして研究し教育上に一新生面でも開かうといふ風には考へ



られて居ない。せつかく日本人は東洋人として一般に享有する思想感情習慣風俗から自然に培養せられてゐる常識を背景にしてゐる。たいして骨を折らすともこれがちやんと理解される特殊の環境におかれてゐる。かやうに西洋人などの到底及びもつかぬ便益を有するはいふまでもない。ローマ字の宣傳固よりこゝに排する譯ではないがせめて現代の日用文字に就いての字源を知るだけでもどれ位例へばこれが教授上の趣味を深からしむる上に調法なことか判らない。文字は國民學校一年生の讀本に見る簡単な構造のものにしたつてその淵源は古い。五千年からの歴史が有る。その因縁來歴が判然として來るときは第一趣味がにじみ出で字畫の誤りを繰返すことなどもなくなつて來る。

近來西洋文明に陶醉せる新しい教育家たちはやゝもすれば徒らに漢字は小面倒臭く複雑に拵へ上げられてゐるなど評し去らんとするやうであるが、月の字にしる、日の字にしる決して迂濶にできたものではない。必ずや吾人の誇りとする美しい東洋文化を背景として古代の祖先たちが長年にわたり自然に作りなした結晶物に外ならないものである。東洋の古文明、古典に考へをおかんとするものは漢字の生ひ立についても思ひを致し、これが研究と教授上

に確固たる信念を持たなくては嘘である。

古代文字の結晶は後世幾多の變化を受けてなつた楷書の形のみから察すると危険である。矢張り今から三千年五千年といふ古い時代の根本資料たる三代鐘鼎古文なり又周以前の龜甲獸骨に見えた龜卜の刻文なりに據らなくては安心ができぬ。さういつた根本材料から文字の生ひ立を調べて來ると一方に文字そのものの組織構造が正確にわかつて來ると同時に、その文字の背景を聯想せしむる古代文化の内容までが明かになつて來る。例へば貝の字並に貝の字の系統を古に遡つて調べて見るとこれがことごとく財貨に關係を有し古の經濟生活の中軸をなしてゐる興味ある史實を發見する。

歴史や考古學の上からいふと古代には泉といつて農具の形をした貨幣や貨布といつて小刀様の貨幣が行はれてゐた。秦の世に降つてからは五銖だの半兩だのいふ穴錢が行はれてゐた。然し漢代王公貴族の古墳から發掘せられる貝貨、貝飾の類や、又財だの寶だの、貯だの貧だのいふかねに關聯した文字を集めて來ると明瞭に貝そのものが上代の貨幣として使はれてゐたことが判る。貧や貢、賤などの字に貝の含まれてゐるのもこれから解釋がつく。かういつ

た方面から支那文字を研究して行くならば一段と興味が増して来るであらう。

### 假名と漢字

國民學校一年生の讀本に見る片假名がその起源を支那文字に發してゐることはいふを待たぬ。アは阿の扁から、イは伊の扁から、ウは宇の冠から、エは江のつくりから、オは於の扁からといつたやうにすべてその字の扁旁冠脚の一部をとり他を省いた形からできてゐる。中にはその楷書の形といふよりは行艸の體から脱化してできたやうなものもある。オの於に於ける、キの幾に於ける如きその好例である。今日學者間に大體判つてゐることではあるが順序として五十音の全體を原字に對照して表に示し左に掲げて見る。

#### 五十音片假名の表

ア(阿)	イ(伊)	ウ(宇)	エ(江)	オ(於)
カ(加)	キ(幾)	ク(久)	ケ(箇)	コ(己)
サ(薩)	シ(之)	ス(須)	セ(世)	ソ(曾)

タ(多)	チ(知)	ツ(川)	テ(天)	ト(止)
ナ(奈)	ニ(仁)	ヌ(奴)	ネ(禰)	ノ(乃)
ハ(八)	ヒ(比)	フ(不)	ヘ(部)	ホ(保)
マ(末)	ミ(三)	ム(牟)	メ(女)	モ(毛)
ヤ(也)	イ(伊)	ユ(由)	エ(江)	ヨ(與)
ラ(良)	リ(利)	ル(流)	レ(禮)	ロ(呂)
ワ(和)	ヰ(井)	ウ(宇)	エ(慧)	ヲ(乎)
				ン(无)

この對照表については多少異説があるかも知れぬが大體かやうに諒解せられてゐる。

このうち「へ」は邊からといはれてゐたが故大矢透翁の調査でその「部」の旁の脱化した形から來てゐる事情が明白になり今では最早や疑問の餘地がなくなつて來た。尙平假名の「伊」ろ(呂)は(波)に(仁)ほ(保)へ(邊)と(登)の方に就いても同じやうな研究の徑路から、今日の形がそれ／＼できて來た事も明白になつた。たゞ其のうち、る(留)を(遠)た(太)む(武)ぬ(爲)け(計)あ(安)さ(左)み(美)ゑ(惠)す(壽)とい

つたものがその片假名と起源を異にしその沿革が變つて見ゆる位のものである。しかし、ここには假名を主としてゐる譯でないから餘りこの問題には觸れないでおく。

さてこゝでは國民學校用讀本に見えた漢字中その主要なものについてこれをそれ／＼その起源沿革に遡り、なるべくその字體發生當時の形體構造を突き止めそれを根據に元始象形の正體を明かにしながら説明して行つてみたいと思ふのである。もつとも極く初步の文字にありては、それらの分は何れも單純な一要素の構造になる者で、上古の支那人の目に映じた事物をそのまま簡單に取り來たり或は當時の人智で達し得る範圍にて考へ出したものを現し來たり之を以てその自分の言葉の符牒にしてゐるに過ぎぬ。低學年用讀本に見る支那の文字といふと極めて簡素明瞭なものが多く、之が高年の讀本に見るやうな色々複合排在せられた合體文字の構造を見ることはないのである。

以下、國民學校教科書に出て來る漢字を多少分類して、頁の順でなく、暫く山川水江、火日月、木本竹といった風の順序を作つて之を講述して見ることにする。

## 山・川・水・江



山は上古の人のあたりに單純な獨立した山の形を考へたものではなく、山脈をなせる連峰を寫したものである。特にその三嶺をとり來たれるはたゞ群峰を意味したに過ぎぬ。もし小丘陵を表示せんとする時は一峰を減じてこれを二峰にして現し「丘」となす。丘と山との相違はかゝる山容の區別で示されてゐる。今日山と書かるゝはその山骨の要領を示したものである。

川はもと巡の字に見る川と同じく河川水流の變化を示したもので、その屈曲のあるを古い形體とする。いま川と書くは後世の變形である。古音は江、川相通ずるところあるもこれは専門にわたる話になるゆゑ省いておく。

水はいま書かれてゐる字形では何等水の姿に縁がない。木の字に似たやうな形に書かれて

ゐては全く本来の水の姿に添はない。元來水は「益」「溢」などにある上半の水の如く水平に描かれてゐて然かるべきをいつしか縦書きにされた都合上水平の姿から遠ざかつてしまつた。ときたま盥の字における水の姿の如く縦書きなるべきものも見ないではないが、一般に水は他の車だの舟だの象だの豚だのいふ字の類推から矢張り立てた形にされてしまつた。

所で今から三千年以上古い時代の龜卜文字についてこれを調べて見るとまづカーヴをなした水流が幾條も描かれ、これに持つて行つて小波を配した積りでもあるか、幾多の點々が加へられてゐる。漁の字に見る水流の如きは一等それが賑かに又完全に象られて居る。また上代の地理上に見えた「水」は渭水、漢水、泗水といったやうに皆河流の意味で用ひられてゐる故この字源も亦それに縁故があると思ふべきである。

江の字の扁に見る水の如きは正しくそれで之には水流の意味が聯想せられてゐる。尤も江は本来大江長江の江で、江口の幅は七十五哩、上流一千六百哩も船艦の航行が自由自在と云ふ水郷を有してゐるのだから事實上内海か海峡の觀を呈し、日本人の考へてゐる河川の概念などでは及びもつかないところがある。

火・日・月

火の字源は火炎の形に象る。もとこれは崑崙の象形、噴火山を寫せるものかなど云ふ説もあるが一般普通に上代人の間に知られた物としては卑近なる火炎の象形に發せるものとして考へるが妥當であらう。説文解字には火は煨也とあり、炎上燒くの義に解せられてゐる。今日マツチの文化に浴してゐる者は上代生活の火だねを得る困難さとその有難味に充分の理解を持つものがどれ位あるであらう。上古燧石ほぐちを使つて火を起し漸くのこと火食を覺えたといふ元始生活は今日見る河南山西の穴居民にしたつて想像もつかぬ事實であるであらうが、その最古の生活に火を得ることは恐らく容易の事でなかつたであらうと思ふ。古代ローマのヴァージン(巫女)が神火を絶えささないやう齋き守つて居たといつた如き神祕的な説話は支那上古史の上では見出されない。しかし燧人氏の教へたといふ火食傳説は或はその頃始め

火・日・月

一二七

て燧石で火を起すことを學んだ一とくさりの消息を物語れるものではあるまいか。火の字の象形がかうした人工になる火炎を物珍らしげに描いたものだとする上代生活の場面は面白く想像される。

日は圓い太陽の象形なること周知の如くであるが、今日書いてゐる形は員の字の上半と同様、四角の姿を取るやうに變つて了つた。由來支那文字は運筆の都合とか刀子の關係とかで圓い形も書きやうで四角、象形とはいふもののひどい隔りを生ずるものである。員の上半といへば本來員を一つ二つと數へて圓い印をこれにつけてゐたものであるが、いつかそれが四角になつて了つた。言語の方では説文に日のことを實也と説いてゐるが、日の字は形の上では單に太陽の圓形を示すばかりでなく、中に一點又は乙字の古形を加へてこれが太陽そのものなりとの約束を確實にしてゐるところが見える。もしかういつた加味された物のついてゐない時はたゞ圓形をした輪郭だけで茫漠、何等指示する特定の意味がないことになる。宛もこれには更に後光の周圍に加へられたものもあるやうだがもつとも至極の限定的指示法であると稱し得るのである。

月は太陰の象形繪文字であることはいふまでもなく、既に三千年前の殷代の龜卜文字にもちやんと其の描寫がはつきり出てゐる。當時閏歳を示せる「十三月」といふ語にもいつもこの月の形が寫生的に表示されてゐる。その形はもと新月に象られ説文の文面にも見ゆる通り、月は闕也で、缺けた月影の姿が描かれてゐる。もしこれが満月の姿で現されるとすれば太陽との區別が立たなくなる。上代人のこの邊に意を用ひた跡は今日歴然と認められる。

周代鐘鼎文に見る月はこれと異り、新月、みか月に持つて行つて一點を加へ整つた形を示してゐる。もし月を描かんとするに新月の輪郭だけで止めておくならばユフベの「夕」と區別がつかなくなる。「夕」も月の象形であるが本當の純な月の形だけを寫したものに過ぎぬ。月の方はその形が太陰であるとの意味を確實にするためその夕の形へ持つて行つて更に指事的の一點を添へ、その月としての獨立した姿を定めてゐる譯である。ちなみにいふ殷代龜卜文字によく出て來る五夕とか十三夕とかの夕は何れもみな月で、五月、十三月とそれぞれ釋文さるべきものであると思ふ。

なほ月の字の形に似て非なる姿をとれる字には、有、育、胃、絹、肪(何れも肉から來た

もの)、また朕、勝、服(何れも舟から来たもの)、また朋、鵬(何れも鳥の羽から来たもの)などがある。又俗に冒、帽の類も月に混同して書かれてゐる。本来、月の系統から出てゐるものは僅かであつて、明、朔、朗、望、期、隴等にすぎぬが、昨今は時勢が時勢といふのであるか、どれもこれも殆ど差別撤廢の尖端を切り大同主義の第一線におかれてゐる。

## 木・本・竹



木は最も明瞭な象形の一つで、枝の出てゐる樹木を根こそぎ引つて抜いた姿を描いた字。殷代の龜卜文字によると、かなり複雑した枝ぶりまで描かれてゐるものもある。こゝに左右一枝づゝ示されてゐるのは鐘鼎文の方から来た描き方である。蝌蚪漆書の方ではあまりこまかく寫されないが、龜板刀子の方の刻字ではかなり微に入つた表示法がとられてゐる。上代の造字意匠では艸の象形には根を加へず、木の部と禾の部に屬するものにはこれを加へてゐる。森林の如き密集せる木を寫すときにしても根を加へその概念の内容を破壊しないやうに注意してゐる。

本は木の字から出た指事の構造を有してゐる。木と本との違ひはその點により象形の根に一點を加へた點だ。その點により木から離れた特別の意義を定めてゐる。木の字、本の字のタテ棒を跳ねる跳ねぬの議論は時々聞く處であるが字源からすればそれは問題の價値はない。又本を大と十の二字合體に作る者がある。往年東京日本橋の本の字をかやうに慶喜公が誤られたといふところから一騒ぎを起した事があつた。公はその後これを假名に改められたので問題は立消えとなつた。

竹はその笹の葉に象れる圖様から出てゐる字である。元來草の艸とこの竹の書振りとはその體に明白な相違が立てられてゐるに拘らず、古隸八分隸あたりの書體から之を混同し、本來竹を含む篤、等、筑の如きものまでを誤つて艸に屬する字なるが如く書いたことがあつた。竺、筑、篤などに見る音がヂク、チク、トクであるのもこの竹の音から出てゐる位である。その竹を艸に混同してならないことはその邊から見ても諒察せらるべきことだと思ふ。

## 私・年・米・花

私の字は禾とム(米)の合字。稻とムが組合はざるゝ以前ムだけで私の義が出て居たと古書には述べられてゐるがそれは確でない。説をなすもの又ムは人間の鼻の恰好を示したものだとか邪惡の義を示した形だとか云ふが、古い處は圓形、三角形容器を示した形など色々で、その元始形の意味は捕捉できない。

後、禾の姿にその圓形三角形のしるしの配せられてからワタクシの義が明示され、上代農民生活の一場面も面白く想像せらるゝに至つた。といふのはこの手掛から、これこれの禾稻は人の物でなく自分の物だといふしるしの必要から付けられたものだと思ふことができるからである。全く判じ物のやうな説明になるやうだが暫らくかやうに假定しておく。このことは公の字の場合の構造が矢張りその三角又は圓形のものを持つて來てこれを公平に分ける意

味から八の字の冠せられてゐる事實のあるに併せ考へ、私の字に見るムも亦略察し得られるのである。上代では禾稻そのものが租税を示す代物となつてゐたり、又乘の字や兼の字の主要要素となつてゐたりといふやうにかなり重要な位置を占めてゐる。そこから見ると私の字に見る禾は公共の物でなく私有物だ、私の物だといふ點に特に力が這入りそこを指示するためムが加へられたものではないかと思はれる。

年の字はもと禾と千の合體字。私の字に禾が意味の主要要素となつてゐたと同様、年においても禾がまた意味の上の大事な要素となつて居る。禾稻は年に一度實のるといふ事實のある處から持つて來たもので、穂が十分實のり下垂してゐる姿を寫したのからできてゐる。支那古文明の閃きは年の字の古體一つ見るだけでもその氣候風土の大體が推測され、年一度の農作から歲月を示す歴法までもが判る。上代文字「季」の字はその生ひ立の意匠に趣味津津たるものが見出される。古體「季」の字の下半の千は年の音を出せる符牒、「私」におけるムも亦その音符、「江」の工も音符である。かうした音の出るしるしの音符を含む支那文字は之を總括して諧聲文字と呼び、全體の字數の約八割以上はこれが占めてゐるといはれて

ゐる。

米は字源を示す材料に乏しいが、從來知られただけの形から考へると、その刈取られた禾稻をまとめ束ねた姿を示したものと見られる。横に一線の劃されてゐるのは之を藁ででも束ねた恰好をそのまま寫したものと見る。支那人の米の考へは日本人のそれと異なり普通日本でいつて居る米はあちらでターミ(大米)と呼び、粟のことをシャオミ(小米)と呼んでゐる。粟ヲ食マズといふ時の粟だつて矢張り米の一種で、それを畑から刈取つた時の様子は同じ姿で書いてゐたものと見える。

花の字と華の字。艸と化との合字に成る花の字は後世の新字で、その本來の原字は華である。之もその上代の繪文字程度の處まで遡るといふと、上半、花朵を有し、小枝に列をなして群がれる濃婉な花びらなどが聯想せられる。下半には愕跨などの一部に見出さるゝと同じ恰好の音符を有してゐることに氣がつく。支那がその國土を中華と自稱してゐるのも誠によき字を掴まへて來た譯だが、一方に麴町の麴を米に花で「糝」と洒落込んでゐるのもまたうまいところを選び出して來てゐるといへるのである。

## 田・子・天

田の字は田畝の姿を寫した象形。これは男の字における田、畦の字、界の字、疆の字などにおける田の要素から見ても明白にわかることである。支那の田畝は島國に見るそれの如く細かくきざまれたものではなく、大陸的に大まかに仕切られ、どうかすると畔線の立てられてゐないところもかなりある。しかし耕農の方法は大略日本が上古支那から學んでゐる關係から源流を同じうするものが多い。

田はもと田畝を描いた略圖たることに違ひはないが、畏の田、異の田、畚の田、雷の田といつたやうにその楷書の形から見た恰好から直ぐ之をすべて田畝の田であると見るは誤りである。字源の上からする構造上の釋方はかうした別系統の類似形を相當に混入して居る場合もあるのだから眉唾ものであつて、其の甸、界、畫、當、畿、畷といつた田の字と意味の聯



關してゐるものでない限りは、よく／＼その點留意すべきことである。

子の字は子供の象形、幼兒の容姿を示したものである。その描寫の要領としては左右兩手を高くあげてゐること、又その頭部を特に注目して大きく表示してゐること、又全體の恰好が幼兒の表現に主力をそゝいでゐること、その邊が何といつても小孩シヤウハイの象形たることを證明してゐる。時にはその描寫形のうちに左向でなく右向になれるものがあつたり、左右兩手のうちどちらか一方をあげないでさげてゐるものがあつたり、またどうかすると脚部、兩足を表してゐるものがあつたり、又描寫の都合からでもあらう殷代龜甲文に見る如くその首部を現すに四角形を以てせるものなども見えてゐたりする。孔、孕、孝、游、孫、學などに見えてゐる子はすべて皆その最も普通なる幼兒の姿を含める文字として古くより認められ、わけてもその孔、孫の如きはその兒童の頭髮に可愛い飾の施されたる所を見るなど古今風俗の間に濃やかな興味を唆らるゝものがあるのである。

又ひろく支那古代文字を見てゐると倒子といつて子の字を倒様に現した字の見つかることがある。悪い子供を指したもので、これをトツ(突)と呼んでゐる。教育の育の字や流の字

に見る上半の形は「云」に似た形のやうであるけれども、さうでなくこれは倒子を示したものである。

天の字の古形は人の正面向に立つてゐる姿で、特にそのあたまの部分強調したものである。天は巔タカと同語を現せる字であるが言葉の方ではテン、テン同音であるのだ。由來人間の容姿を描寫してゐる古代文字には數々あるが、その中でもこの天の字に見る象形の如きはよく體の整つたものといへる。後世の筆法ではこの天の字の頭の部分が一の字に引直されてしまつたため人の姿の意味は汲みとれなくなつた。今日見るやうにこの天の字を蒼空の天に轉用して來たのはその音の方から假りに假借したに過ぎぬのである。際涯なき蒼空を表現せんとする方法は埃及では孤線を以てしてゐるが支那上代には直接天空そのものを表示したと見らるべき繪文字は見當らない。いつもいきなりこの人の象形から來た「天」の字をかり用ひて來てゐる。天を音符として發達した諧聲文字を見るとその中には「吞」があつたり「添」があつたりする。吞の上半を天(エウ)とするのは本來は誤りである。

つまり後世それが天の字を含む事實を忘れてしまつたためか、そこへ誤つた形を採入れて

ある者がある。これはドン、テンの音の出てゐる由來から考へて見ても天の字がこゝに正確に書入れられなくてはならぬ位のことはずぐわかるべきである。

## 大・小・又

大の字の形は誰れ人も知る如く人の大の字成りに正面に向き手足を張つて立つたところの姿である。これは天の字のやうにその特に部分的の處に重きをおいて作つた象形法ではなく全體を手軽く描寫してゐる文字である。世間にはこの大の字成りの姿から考へて、男兒の裸體姿を解かんとして「太」の字を採出し、これは正にその局部までをも寫生した象形だなどと、戲談かと思ふと戲談ではなく眞面目に辯じ立てゝゐるものがあるが、それは滑稽である。支那の古俗、いくら田夫野人の兒童が多かつたとはいへ、そこまで丸出し姿をするやうなことはしない。説文解字には大を解いて、天大、地大、人亦大焉、大は人の形に象るなどあるが、その言葉の上の関係は大小の大に非ずして身體の「體」に脈絡があるものと見られる。しかし字形そのものは裸體姿のからだの描寫でなく衣服をちやんと着けた時の恰好たること云ふまでもない。尙夫の字にせよ、奢の字にせよ、また亦の字、立の字、竝の字、走の字、それから番の上半、妖の右半といつたやうなものも元來はこの大の字の系統から生れ出たものでその字の親屬關係はかなり複雑を極めて居る。専門的に見て來ると尙「幸」だの「去」だの「法」だの「泰」だのといふ字の中にも何れもこの「大」の字がその構成要素として這入つてゐる。大が人に關係を有しその緊密の力を有してゐたことは上古たいしたものであつただらうと思はれる。

小の字は物の微細なる意味を表示するため「一」と「八」の兩要素から作られてゐるといはれてゐる。その中央に見るタテ棒は小さき針の如きものでこれが見にくいので搔き分けて見るといふ意味から考案しそこへ八の字を加へてゐるのだと解く。これが果して正解であると見るべきかどうかは判らぬ。然し八と刀から「分」ができてゐたり、分と貝から「貧」ができてゐたり、八とムから「公」のできてゐたりする事實から綜合して見ると或はさういつ

た見方もできるといへる。ところが殷代あたりの古い資料に見る小の字は必ずしも古人のいふやうに八の字は配せられてゐない。たゞ小さいタテ線がそこに三つ引かれてゐるだけであつて、説文あたりに見る巧な註釋面とは符合してゐないのである。たゞこゝには事實のまゝを紹介するに止めておく。なほ少とか肖とか瑣とかに見る小は勿論この小の字を示してゐることに疑ひないのである。

又の字は本来手の形に象れるもの。今は指三本しか描かれてゐないがその数の多少には拘泥すべきでない。又の字の起源が手であるところからこの系統字をひろく漁つて見ると色々と轉用された場合が見つかる。トル(取)ウケル(受)サズケル(授)タスケル(友)カツグ(昇)アタヘル(興)ヨヂル(攀)などといふやうな文字がそれで、そこに相應有力な意味を出してゐる。して見ると「又」の字は元來手そのものを示してゐる「手」の字と相表裏し、「手」の活動を更に大いに助けてゐるとも釋かれるのである。なほ又の字は聿、放、皮、及など一見わかりにくい所に含まれてゐることもあるが、また啜、綴、啜といつたはつきりした所に見えてゐるものであつても、それは關係のない別系統のものであつたりすることが

あることを一言こゝに附記しておく。

### 正・目・見・力

正 目 見 力

正の字の構造は一と止の要素から成り、一は或る地點、止は人の足の動作を示せる字。ここに一、止、兩者の配合せらるゝは説文に正は是也一以て止る也とある如く、その止まるべきところにて踏止まるの義を指示せんがためのものであると思はれる。その場所に踏み止まることを以て正となし、それで足るとなせるは宛もそこに上代生活の正義の觀念が汲み取られる氣持がする。その正しいことと足で踏み止まるといふ考へとが結び付けられてゐる心理は實に上代人の思想を窺ふ上に興味深き題目である。

由來字源の解釋にはかうした道學者流の曲解らしい説き方はなるだけ避くべきだが、善惡正邪に關する上代人の考へや心持を窺ふには相當人情の機微に觸れて解かなくてはならぬ。

字系の上から正の字と脈絡のある是非非の是の字を探つて考へて見るに、之にも正と同じ義の含まれてゐる理窟が判つて来る。又その正、是兩字と系統を同じうする足の字を見るに之にタルと云ふ意味があつて見たり、或は又古代に於て正の字の裏返しになれる字に「乏」の字があつてそれが足ると反對に缺乏を意味してゐる字であつたりする。これは皆正の字そのものが本となりそれから推理演繹せらるゝ分出字であるとして考へられるのである。五千年の星霜を経た今の時代から上古の人々の常識心理を判定しその間に尤もらしい理窟を見出さんとする如き企てはその企て自體が牽強附會に陥り易い傾きを持つ。而かも零碎なる三代文字の構成要素やその斷片的資料からその幽玄崇高な眞理を求め掴まんとするのであるから、それは宛も例の針の穴から天を覗くの譬にも似たる仕業と見られることであらう。

正の字を足の字に結付けて解く方法の如きは餘りに突飛のやうだけれども、これ以上の手探り方は未だ今日見つかからないのである。それ故つまり正の字の元始的意義はその則を超えず踏止まるといふ觀念に本づいて、正しいといふ考へができてゐるものと解せられるのである。

目の字は本來横に水平の位置を保つて描かれてゐたもので眼球眼瞼も明瞭に描寫せられてゐた。そして殷代又は周代の古文字中にはそれが随分誇張して描かれてゐるものもある。懼の字の右半に見る一對の目の如き、もともと鳥の恐れを抱きて眼光を鋭くせるに象りたるのもである。盲、眉、看、瞽、相、睦、すべてこれらに見る目は後世たて書となつてゐるが本來を顧れば車舟同様横に復舊せらるべきものである。

見の字は人のひさまづいた姿に左方を見張つてゐる眼を冠したもの。その首の主要部中で目のみを誇張し之を胴體にくつ付けた形である。殷代龜卜用文字には特に多く之を見出す。稀には又寛の字の下半羊角を帯びた見の字の古形を見出すこともあるがこれにも又極端に誇張された目が含まれてゐるとして解釋せられてゐる。

力の字は上古之が鋤鋤の形に象られ之を把持せる人の手の配せられたものまでも發見せられてゐる。従來力の字は説文あたりでは人の筋也と解かれてゐるが、それではその形によつて來たれる所が解けない。努力、助力、勞力、力役などの力は後世原義から引きのばされて二次的以後のツトムルの義となつて居るが、然し男の字に見る力はツトムルといふよりも之

は農具に手をかけてゐる圖柄が元始形として見出されてゐるのである。こゝに力を鋤鎌の形から來たと見るのは自分の一家言であつて前人には未だその説を聞かない故暫らく假定説としてこゝに之を記して置く。

犬・牛・太



犬の字のものと形は動物そのままの姿を現し、始めは横書きであつたのが、豕、象などと共にたて書きとなつたものである。楷書の犬の右肩に打つ一點はもと耳を指示したものの名ごりである。古來支那では犬は羊頭狗肉の狗でクウと呼ばれ、三角耳の立つた黒いのが今でも各地の水村山郭に歩いてゐるのを見る。價の安い大衆向の饅頭には狗の肉がきざんでいれられてゐるくらいで、狗はかなり一般住民の間に親しまれまた普遍化されてゐる。古人は犬を狗と區別して親を犬、子を狗と呼び、その親しみの情と鳴き聲の方から狗の方がひろく一

般化さるゝに至つたものらしい。しかし合體文字を作る時は狗でなく犬の字をそのまゝ、いつも採入れてゐる。臭、狀、狂、狴、狴、狴、狴、狴、狴、獄、獎、獵、獻の如きは何れもそれで、犬そのものの性情用途を物語れるもので、これが又古代文化を知る上に重要な資料ともなつてゐる。その古く犬の子が可愛がられて床上に弄ばれてゐるところから狀の字が生れ出た。又犬が狎れて人を犯し、狷介な叫び聲を發し狂ひになつたりする。之をそゝのかせ又けしかけ(獎)て狩獵の方に使はれたりもする。又その肥大した見事なのは羹の料理にして宗廟に供へ獻じたりもする。かく見て來ると犬に關聯した文字は悉く面白く説明し得られる。チン(狎)の字は國字であつて支那に見ない字であるが、これ亦面白い作り方である。また抜、跋、髮に見るバツの音符にはちやんとこゝにも犬が這入つてゐる。その走る貌を指示せんとして音符のバツが加へられてゐるのである。

かやうに犬の字一字にしてもその古代生活の文字上に反映したところを細かく見て來るとかなり興味深いものがある。犬くらゐだからとて決して疎かにはできぬものである。

牛の字の原形はその頭角とその首のつけ根のところにある肩上の隆起物を描けるものであ

る。楷書や篆書の形は甚だしく元始象形から遠ざかつてゐるのだが、もとはその左右兩角の曲線振りなど最も明瞭に寫されてゐる。上代の牲物、馬や豕、犬、鹿などはその體軀の全姿が寫さるゝ習ひであるが、牛は羊の字と同じくその首部のみを表示し他の部分は一切描寫されてない構造になつてゐる。

牛の字はたまた犀の字に見る如く、その必ずしも牛でない獸にも牛の類と見られてか、その義符に用ひてゐることがあるが、多くは牝、牡、牧、牲に見る如く畜類の代表的しるしとして用ひられたり、又牢の字における如く牛馬を養ひならせるかこひ(檻)の義から一轉して牢獄の義に移つたり、甚だしいのになると「物」の字に見る牛の如く萬物天地間のもの何でもを代表し現すと云ふところ迄も一般化せられてゐたりすると云ふ風に漸次その意義の用途が擴大されて來てゐる。上代の牛は實に大牲也とまで云はれ、牛、羊、豕の三牲中でも之が第一に數へられ神前に供へる最善最高の瑞畜とせられてゐた位だから、牛さへ奉納しておけばあとは先づそれで代表されてゐるのだと云つた如き心理も自ら解せられる。牛の字は神前に告ぐるときにも牲として供へられ、牛と口とで告の字を作つてゐる。告朔之饋羊の告がこ

れである。上代の牛は應用がひろくその牛の字を要素とする「物」の字一字を取つて見るだけでも古文明の一分野が説明せられる。又牛の鳴聲から作られた「牟」の字が、ム、ボウと呼ばれてゐるのもまた面白く眺められる。

太の字はもと大大と二字重ねられてゐたものが一字に纏められ、大の字の下に便宜上、二の字が入られてゐた。それがいつしか大一となり再變してつひに今の「太」(ハナハダシ)となつたのである。されば本來これが大の字の複合字たることはいふまでもない。

人・口・耳



人はもと人の左に向いて立つた姿を描いたもので、頭、胴、手足の各部を具有してゐる。至極簡單ではあるがよく要領を得てゐる。人の字は勿論一人を意味したものであるが、二人のときは人に二の字を配し「仁」の字を作つてゐる。二人以上集まればそこに人情、同情、

思ひやりの起り仁愛の氣持がにじみ出るものとされてゐる。人三人集まるときは見る目の多くなる所から考へて之を眾の字に作り上げ、人三人の頭上に持つて行つて目を描いてゐる。三人とは多數大衆の義を暗示したもので必ずしも數に拘泥してはゐないのである。

又人の字をさかさま倒形にする時は化の字の本字の「匕」(バケル)の字となる。變化の義が之にある。又人の形を左向きに二人並べて描く時は從の字の古字「从」となり、一人が他の人に從ひ並べる義である。互に背中合せにすると北の字となる。もし又それを右向きに向けかへると比較の比の字ができるといった調子に、實に自由自在なものである。従つて人の字の系統は古來かなり多く榮え、人、匕、化、比、從、北(背の古字)の類から兄の字、臥の字、司の字、后の字といったものにもまでも這入り込み随分できてゐる。そのもとの元始形が簡素であるだけに色々複雑な發達を遂げ、その點は大の字や子の字などの比でないのである。

口の字の古形は人の口を開いた姿を示したものである。同じく口に書かれてゐるものでも、員、圓の口、回、國の中に見る口、それから石、舍、京に見る口などは、こゝにいふ口とは全く關係を有しないもので、その起源が始めから違つてゐる。本來からの口の字は口と手で

助くる義の右(佑)の字、口でよろしいといふ可の字、口で甘い辛いを見わけける味の字、口でよろこびを述べる喜の字から、口々に十代も語り傳へてゐるといふ古の字、士の言葉には嘘がないといはれてゐる吉の字といったやうに何れもそれぞれ口そのものが本になり之と密接の關係を持つて作られてゐるものである。鳴、啼、號、哭などの字にしても直ぐ其要素の中に口の字が含まれてゐる理由はちやんと首肯せられる。また苟といふ字を見て來ると之にも口が這入つてゐる。が、これは善美義と同様、神前に手向ける神羊に關聯した文字で言を慎しむべきを戒めてゐる字であるゆゑ羊冠をおきその下に口を配してゐる。詳細はこゝに省略しておく。又増加の加の字にしたつて、加は本來力の字の示す努力の考へばかりでは物足りないので、上古から矢張りそこに宣傳が重く見られ口で以て大いに述べ立てなくては効がうすいと見られてゐる。そこで口がその力に配せられ加の字となつたのである。

口はまた向の字、高の字、宮の字といった場合には建築物の方の意味になり入口門戸といふ義に轉ぜられてゐる。文字の發達史上にはその原義から出て他へ聯想と類推の方法によりいくらかでも移つて行く現象が見られるのである。





れるのだ。況んや支那俗間に見る如くその廟前に惡臭を放つものの雜然として存してゐると云ふ實情のあるにおいてをやである。出の字の源に就いて斷言することは輕々しくできないわけだが、暫らく自分の見たまゝ考へたまゝをこゝに實際の支那生活に照して述べておくのである。

上の字はその目安にかりに引かれた水平線上に持つて行つてしるしを附けたもの。點でも棒でもそれはよろしい。一種の指事になればよいのである。上代には點又はタテ棒を引いたものが多い。示の字、帝の字の上半に見るものは共にこの上の字の古形なりと釋かれてゐる。或はさうかも知れぬが、壇上に物の供へおかれてゐる姿に見ることもできないことはない。詳細はこゝに省く。

中の字は古書には中和、中正、中庸、天下の大本などとえらい八釜しく哲學や政治の上から説かれてゐるが一般實際生活の上からいふと今少しく卑近な説き方ができると思ふ。それは上代における狩獵時代に鹿なら鹿を獲るときねらひ打ちにしてゐた一種のモリの如き獵具の形から來たものではないだらうか。そしてその投げ道具に幾條かの長い紐か綱がついて

ゐたと考へる。これは後世の風習の上から古を推測するのであるがもしこの考へが的中してゐるとすれば「中」はその的中、當たるといふ考へが中の字の本義の轉となるわけである。タテの棒で物の中を貫く、依つて之を「中」といふといふやうな解釋ではどうも腑に落ちて來ない。從來指事にこれは見られてもゐるが自分は之を象形の部に入れて考へるのである。下は上の字と聯關して説かるべき文字であつて、その水平の棒の下につけられたしるしがたとひ點であつてもタテ棒であつてもよろしい。結局はそれがかうした「下」の字の形に變化したのだといふことになる。峠とか峠とか峠とかいふのは上下の二字から來た後世の俗字である。

## 白・郎・畠

白 郎 畠

白の字はもと白い珠玉の姿に象つたもので、その色とその形の兩者がこれに現されてゐる。

支那上代には虢季子白などいふ人名の上にもこの白の字が明記せられた。銅器銘にはよく見えてゐる。上代公侯伯子男の爵の授けられるとき、酒器としての禮器の爵が授けられてゐたことが見られるが、伯には古はこの「白」の字で現されてゐる白色の珠玉が授爵のとき下賜されてゐたのではないか。

現に玉杯に白玉のものがあり、白を擧ぐといつて杯を表はしてゐることもある。上代色彩の考へは文字上では多く染糸の方から来て、緋、紅、緑、紫、皆然りである。白も「素」の字の示す通り糸の色から現されてゐる處も見らるゝが又白玉そのものの尊ばれる所から遂に白の字も本來の珠玉の義から離れ色専門の文字となつてしまつたと見られないであらうか。説文解字には白は西方の色也とあるが、之は五行(東は青、西は白、南は朱、北は玄、中央は黄)の考へから来た後世の進んだ解きかたであつて實際的でないやうな氣がする。

尙白は、月の色に皎、雪の色に皚、人の色に皙(皙に非ず)、花の色に吧、髪の色に皤といつたやうに色々に出てゐるが何れも純白の美を示してゐるやうである。そしてその色のもとには礦物質から来てゐるものと思ふ。

この白の字には上代また時として鼻、即ち自の字から来てゐるものがある。之は自の略形であつて「者」の字の下半に見るものが即ちこれである。マホスといふときの白、建白、敬白、告白の白など何れも皆これから出てゐるものであつて、黑白の白とは物がちがつてゐる。ところで然らば普通にいふ「皆」の字はどちらの白に屬する系統字であるかといふに「皆」はマホスの方の白を含む類屬字である。これは比と白の合字で出来、その比は俱に比隣の人たちの集まりならびたるかたちである。多數の人が口を描へて詞を述べ立つるといふ義から皆の原義が生れてゐる。つまり支那世相の上からも判る通り口八釜しい連中を總括してこゝに「みな」といふこととなしたのである。世相はいつの世になつても同じものと見える。

郎の字は良と邑の合字。良によつて音の出でゐる諧聲文字なのだ。説文には郎は魯の國の邑也とある。山東一地方の都邑をさしたものと見える。邑はもと國であり、宗廟主君の處を都といひ、そのないのを邑といはれてゐる位で邑は小さい都邑をさしていつてゐたものらしく考へられる。ところでその郎は古から婦から夫をさして呼ぶ語であつたり又男子の總稱に用ひられたりしてゐる。がこれは後の轉義だと解釋せられるのである。郎君、漁郎、

游治郎などいふときのそれはこれである。されば郎が太郎次郎と用ひられてゐる日本の慣用は確かに正しく又由緒懐かしくも感ぜられる。

畠の字は日本慣用の國字で畑の字と一緒にかなり廣く又古く知られてゐる字である。白く乾きたる田地又草を焼き拂ひたねを蒔いた田のことを指してかく呼びなせるものだ。これは日本の習俗に據れる作字であつて、支那の上代には見えてゐないのである。しかし、いくら支那古代になくても實際上に必要缺くべからざるものは遠慮なしに創作もし慣用して文化の進運を促すことはよろしいことである。國字必ずしも斥くべきものに非ずむしろ大いに奨励して國産を力説すべきであると考へる。

## 土・入



土の字はもと草木の生ひ伸びたる姿に象る。説文に土は地の萬物を吐き出だせる義なりと

解けるは妥當な見方である。その元始形の鐘鼎文に出てゐるものを見ると、その幹なり莖なりの上部に持つて行つて著しいふくらみが描かれてゐる。後世には十の字や甲の字に釋文されてゐるもので、多くは草の萌芽の描寫として認められてゐるものである。けれどもこれは必ずしも嫩草萌芽といつた矮小のものに限らず草木の全體にわたる植物描寫のしるしと見ておいて何等差支があるまいと思ふ。

そのわけはこの土の字を含む合體字について廣く見てみるに、例へば土に祭壇の「示」を配してできてゐる「社」の字であるとか、又土に木を配して構成されてゐる「杜」の字であるとか、何れも土の字そのものが必ずしも嫩草や若木などの符牒ではなく相當老木大樹を指示してゐることが想像せられる。古くは社が地主也と解せられ又杜が塞也(日本訓は森)と説かれてゐたりするのも、これは文字上から見るとその「土」の字の部分が相當その時代の人々の仰敬尊信の念を繋ぐだけの神威を有してゐた大樹を指示してゐるものであると解せらるべきである。

土の字を上代に義符として構成せられてゐる字には堯とか坦とか色々のものがあるが、多

くは土地、土壤の意味で配せられてゐるだけで樹林らしい景色を想起せしむるものは一向に見當らない。

社の字は上に述ぶる如く上古から地主とされてゐるにより「社」が地神として植物崇拜の義からでも構成されてゐると見られるならば上代人の信仰上から見てふさはしいことである。従つてその社の字に含まれてゐる土の字の象形は抑も何であるか。その描寫したしるしの意義如何といふことが之に有力な關係を持ち又相當な價值を持つことになる。さればこゝには「土」は上古の人々が日常生活に崇拜の的として尊信してゐた程度の老木樹林の立つてゐる姿を示したしるしであるとかやうに假定しておく。

入の字の起源は近代的のしるしでいふと矢の方向で物の這入る動作を示したものだと思はれる。しかもその元始形は宛ら矢尻に見る矢の根、石鏃の輪郭といつたかなり鋭利な尖端が描寫されてゐる。さうかと思ふと説文解字に、入は内也、上より俱に下るに象る也と説ける處から見ると、そのあたまでは鋭い切つ先になつてゐる方ではなく寧ろ二又になれる方であつたらしく考へられる。

いま上代の干戈劍戟について考へて見てもその尖端の二又に分れてゐるものは少なくない。のみならず、現にその干戈の干の字の如きも干犯といつて二又に分れた武器旗竿を指示し、造字上の意匠も反入に従ふとあつてつまり入の字の倒形でできてゐる事實が見出されてゐる。逆の字とか辛の字とかいふ刑具を示せる文字の古體にも常にかうした反入形の要素を見ることの多いのも、そこに何等かの關係があるやうに考へられる。して見ると入の字の元始形はこれを矢張り矢尻と見るも宜しからうが、ともかく二又にわかれてゐる武器の尖端を描いたものだと察せられるのである。

## 星・空・風



星の字はもと星の一團を指せるもの。説文には、萬物之精、上りて列星となるとある。星を圓形の○又は◎に描くは自然にかなつた描寫法で、これを基本の「晶」(精光の義)とな

し、下に音符の「生」を加へてゐる。列星の多き姿を僅か三星にて表現せんとする心理はさながら限りなき大衆を口三つにて表はし品となせると同じ方法である。尙それは最、轟、森などに見る如くその類例は乏しくない。

古人は水の晶を水晶となしてゐる位で、星は之を大空に於ける晶であると見立てそしてその群星列星の描寫を更に音符の「生」にて連結してゐる。かの北斗七星にしる 筭星にしる、星といふ星はすべてこの星の字の古體にて總括したことにしてゐる。しかしこゝに日の字を三個集め來たれる晶の形は後の姿であつて、上古はその小圓のまゝ圓中點を施さない描きかたをしてゐる。のみならず「生」の音符さへも未だ取つてゐない。鐘鼎文に見る星の字は皆それである。千字文にも日月盈昃辰宿列帳など何心なく誦ぜられてゐるがその星の古形がかうした單なる小圓三個の象形から始まつてゐるとは誰しも考へてゐないところである。それも初めはさながら品の字式の形に描かれてゐたのが、いつしか晶となり生をとり、それが更にまた省かれて今見る星の省形となるに至つたのである。

この間の省略の徑路はもと壘、罍、累などが同一系であつたのにいつしかその田を減じ去り

單純化した方式と同じ行方を取つてゐるのである。尙商星といへる星座は「參」の字の起源をなしてゐるがこれが又もとは晶の字或は小圓三個を冠してゐた。その元始形は純然たる三星の形を有してゐたのであるがそれがいつしか形體をかへ後世みる如き「參」の字即ちその冠部に三個並んだムの略形をとるに至つた。でもその始めは儀仗旗竿の先端に用ひらるゝ裝飾用の三星にでもかたどりたるものやうな形をしてゐたのである。

空の字は本來は穴と工の合字。工は孔、穹などと同様、穴孔のアナ、空所のところを示した語の音をあらはせるに過ぎない。空の上半の穴はその意味を表示せることいふまでもなく、これが蒼空の天を指示してゐるのである。むなし、空疎、むだの意味は皆そこから引伸せられる。元來その穴の字の形は、上古の穴居時代を見ても、現在河南、山西、四川あたりにある穴居の民の住まひを見ても、その土室が正面の見取り圖から象られたものである。されば空の「穴」はそのカラ、空洞の心持をかりて來たものと察せられる。

風の字の起りは凡と虫との合字。「凡」は風の字の音符で虫がその意味を示すしとなつてゐる。古代支那人の考へでは風の吹く時は虫が生じ、虫はその風の變り目に孵化するの



類推から試みたものと見らるゝのである。さてその原形に見る「云」は示の字に見る上半と同様に舊來二即ち上の字が之に冠せられてゐたものの如く解かれてゐる。ところがそれには上の字の形の見えてゐない場合の「云」もあつて、上代必ずしも之が一定して書かれてゐる譯ではない。山川の氣の立ちのぼると云ふ以上は上に向ふにきまつてゐる。之を上の子や雨冠の字に持つて行つて説明を與へなくてはならぬとするのは餘りに字面に拘泥した見方であると思ふ。

雪の字はもと雨と慧の字の上半に見る形とから生じてゐて、凝雨(ユキ)は物を掃ひすゝぐものと説かれてゐる。その雪の下半にあるものは音符であるが、今は省かれて單なる「雪」の形となつた。雪が除也雪汚也雪涕也と解かれるのはその洒あらかの義に轉じてから後に應用されたものであると見られるが、又雪といへる言葉の音が雪、刷同一であるところから來たものとも解せられるのである。

電の字はもと稻妻の光りのジグザグと閃き走るところへ搔き曇る黒雲の渦卷があちこちと回轉せる光景を描寫したるもの。説文あたりには陰陽の氣の激しく輝けるかたちであるところを解いてゐる。その電の字は雷光の雷の字と併せ考ふべきものであつて互に密接の關係が保たれてゐる。

更にもつと根本の處から考へて見るに、文字上で電の字はもと神の字の原形と兄弟字であつて、今の楷書の上でこそ互に著しく違つてゐるが、その電より雨を除き、神より示を取り去つて考へると残りの部分と云ふものは即ち全然同一の形體組織に成り又書體の上も全く同じことになる。又神の字そのものの音も今日南支那から安南あたりではデン、テンと發音せられ、神電同一語であると云ふ事實も證明せられてゐる。

さればこゝに電の字から直ちに之を神の字と同一視することは許されなまでも、その電の字の構造が雨と示の相違點こそあれ、もと神様の義をとつてゐたことのあることだけは推測せられる。つまり電は雷光關係の字で雨をとつてきてゐる字ではあるが、しかし神の字と上代人の心持の上では少しも變りのないむしろ神の働きの一方面が之に現されたものだといふ風に見られるのである。

## 春・早・草・明

春の字の古形は、日、艸、屯の三部分より成り、之に推し出すといふ義がある。草木の芽生え、草の初生に持つて行つて陽氣の暖い太陽を配してできた文字なのである。同じく太陽を持つて來て植物に配してできてゐる文字にしても「未」の字の下に日を書いた後の「昧」の字の古形にあたるものがある。これは曉天爽味の時刻に於ける未明の光景を指示したものである。春の字の原義とは著しい違ひである。古より三羊開泰、三春九春などといつて陽春の季節は新緑くれなるに映じ、何とも云へぬ瑞祥の吉兆が目されてゐる。

支那には春の目出たさより木扁に春、一に又木に屯と書いて年壽の義にかつがれてゐる喬木がある。日本でいふと梅檀の如き姿をした樹木であるが、その木が支那で椿樹といはるゝ所から之をツバキと國訓してゐるものが多い。これは春、花を有するにより俗に誤用したる

ものだらうといはれてゐる。なほ古形の春の字は必ずしもこれに草冠を要とせず、行きなり屯と日の二字を配合しただけでも十分とされてゐるのである。

早の字の古形は朝陽が東天に上り出でんとする早旦の氣を指示したものである。古くは日を甲上に冠した形に書かれてゐるが、甲は芽生えの草の頭の義。早の字は、見渡す限り無限の平野に茂る草原に朝日の差し昇りたる光景とでも考ふべきものか。ともかくこれによつて晨旦の時刻に見る大陸の光景が髣髴せられる。

同じく太陽の日をしるしとして持出して來てゐる字であつても、殘肉の數片を日向に持出しこれをほし乾かすといふ義からいつしか「昔」の字の古形が生れ出たり、物をいふといふ日の字を太陽の明かるみに出し、日と日と配合し美言の昌の字を作り出してゐたりなどする。草の字で早朝の義を生み出ださうと草原の草の頭を持つて來る意匠などなか／＼興味が深い。いはゞこれは草の葉にまだ朝露の玉の帯びてゐる光景が表示されてゐるものともいへるのである。

草はもと艸と早との合字。艸を又二重に用ひたのもある。つまりそれは草叢の義を示した





をいふと描寫の上から見てこれはあづまや式の四阿とも考へられる。そこで「今」の字がイマ即ち今と解せられるわけは之に急場の間に合はせ、バラツク式の掘立て小屋だといふ意味があり、従つて今直ぐ役に立つといふ所の心持のあるところから來たものかと牽強附會して假定説が立てられる。しかしこれは保證の限りでないのである。

説文にいふ所によると今は是の時也とあつて今直ぐの間に合はせといふ義が字面の上に汲みとられる。果してしかるや否や暫く記して後の研究に備へることとする。

時の字の古形は之(芝)の字と太陽を示せる日との合字であつて、「之」は行くといふ義を示し日は太陽の四時を指す。時の漸次進み行きて推移する事の考へから一年の四時といふことが意味されて來たといつてゐるが、少し難かしい氣がする。春夏秋冬から又毎日の時辰十二時を示す場合の朝夕の方へも之が轉用せられて來た。「時」の古代音はトクの音であつて、「特」の音を「寺」の音符が示してゐる。更にその音をば「之」の字がまた出してゐたことがはつきりと判るのである。日本語でいはれる「トキ」といふのも元始時代にさかのぼつて行くと、支那音の「時」からみなもとを發してゐたものといふことがいへる。そこは譯

なく推定せられるが専門に這入り過ぎるから省略しておく。こゝにはたゞ「時」の古形が必ずしも音符に「寺」を要せず、「之」の字のみでも差支なかつた時代のあることを指摘しておく。

毎の字は母の姿が主として描かれたもので、その頭部には飾らしきものが加へられてゐる。殊に合字の敏の字の場合の如きは今一段の飾をつけた姿が見られる。良妻賢母の姿にかうした形の見出さるゝは之を「敏」の字「悔」の字「誨」の字「悔」の字「毓」の字の各方面から見てかなり複雑微妙な意味が出來るものと思ふ。かうした各種の意味と毎の字の古形とは密接の關係を有してゐるに違ひないわけであるが、その根本義においては「毓」がイクの音で育と同字をなすところから見ると、子弟教養のことから母としての心配りにその子供を倒様さかさまにしたり鞭撻のことにと八方その情を盡してゐることなどがわかる。その邊が母の胸に四六時中藏せられてゐたことが察せられる。孟母三遷の故事を待つまでもなく、一言一句一舉一動毎に意を配つてゐる母の態度、氣持の程はよくよく判つて來る。毎の字のもとの意味はこの邊に源を發せるかどうか。未だ定説とはなすがたいが暫くの間これをきめないうで自分

の氣持のみを述べておく。

朝の字は水の潮する流れと草間に旭日のきらめいてゐる眺めとを取り合せて描いたもの。その水流の代りに舟を採入れて書かれたものもあるが、それは根據に乏しい。本來朝の字はその單獨なものでも又廟の字、潮の字に這入つてゐるものでもその古形の構造はどうかといふと頗る明瞭に判つてゐるが、しかもその解釋には惱まざるゝものがある。朝の右半が月に見えてはゐるが、月や舟、肉でない事は判つてゐる。そしてそれは水流の形であるが、その水流の形が如何なるわけでそんなものと配合せらるゝに至つたか、その間の消息徑路はどうも審かでない。しかしその旭日の光りが東方の草間より漏れきらめき江水に映するといつたときの朝方の眺めはどうであらう。自分共は江南の地にいつもかうした大陸的の眺望を體驗してゐるところから上代人の水邊生活は幾分想像し得らるゝと思ふ。暫く假定説としてかうに述べておく。尙、朝の字の左半は儀仗鹵簿を示したものと解せられるのである。

## 夕・多・外・夜

夕の字は半月又は三日月(上弦)を描き來たつて之で暮を示してゐる。この形は上代月の字として讀まれてゐる場合が多いが、その月面に點を打たれてゐないところが夕の夕たるところである。暮の字の古字に當る「莫」は艸間に太陽の没したる方からいひ現されたもので、夕の方は太陰そのものの姿を描いて來て夕暮の意味を表示したものである。

上代の人々は夕の字をかりて來て夢の字などの下半に見る如く明瞭を缺きたるものを示すときに使つたり、或は暮色、暗黒面といつたグロ方面を現す時に用ひたりしてゐるが、そのうち夕が夜に關聯した事の多いだけそれだけ上代人の生活の半面を寫すに興味深く役立てられてゐる。と云ふのは「夕」を用ひて横臥轉臥の意味を示せる「死」の字を作つて、人の夕暮になつて臥するに節度を守ることが大事だと云ふ心持を含ませて見たり、また敬し慎むといふ字にできてゐる「夤」の字には人間の弱點を見て教ふる所があつたり、その他夙夜の夙にしたつてその事務をとるに朝は早くから夕は暮るゝまでおそくといつた努力の心持が字の構

造上に又意味の上に現されてゐたりする。これの古體に見る構造はやゝ複雑だからこゝには省いて置くが、そこにツトニの義が生じてゐるわけである。

多の字は月の形が二重に描かれてゐる姿であるが、これによつて毎晩夜と夜を幾つも重ね繰返す事を示してゐる。日をいくつもくり返す一方の文字には疊の字の古字を見る。これは古代には晶の下に宜を書いて現されてゐる。多の字を要素にして作られた文字には楚の國の方言を寫せるものに「夥」の字がある。オビタダシである。今は楚人ばかりでなく日常日本人のこれを用ひるもの亦夥しいのである。

外の字は、例外とか、外づれるとかいふ義からできてゐる。上代の「ト占」うらなひは平明の朝を選び尊ぶのであるに、それを態々夕方にトするなどといふのは調子はづれの例外であることがこゝに示されてゐる。それで夕にトを配し「外」の字が生れたのだとなしてゐる。殷代龜卜に用ひられた龜板獸骨はその出土品の遺片を數百點も手許に有してゐるので自分は一倍そのトひ振りについては懐しさを深くしてゐるのである。

今でも穴居の民には碌々カンテラ一つ點じないやうなうちがあり、また片田舎にはさうし

たものが多いのだから夕暮に龜甲獸骨のトひをしてその刻文を入れたり又その裏面に燬かれて來るヒビ割れの方向又その岐れ枝の工合を見るなど到底さういつた細かい仕事はできるものでない。夕方にトひをする位なら矢張り翌朝の平明を待つといふが本當である。それで外の字の古代習慣はかゝる事情から最も明白に掴むことができるのである。

夜の字は夕の臥處、寢室の意味で、亦と夕の合字からできてゐる。亦の字は大の字の正面むきになる人の姿に腋下を指示したものであるが、こゝでは帷帘のことを意味したベッドのカーテンとも見られる。其のカーテンのところは夕の字が配せられてゐるとは誠に夜そのものの印象を強からしめてゐるものである。かういつた意匠の下に夜の字に夕の字の含まれてゐる點は留意せらるべきものである。

名・氣・汽・石

名・氣・汽・石

名・氣・汽・石